富山市埋蔵文化財調査報告 14

富山市小出城跡
発掘調査報告書

―一般県道下砂子坂池田町線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

2007

富山市教育委員会

富山市埋蔵文化財調査報告 14

富山市小出城跡
発掘調査報告書

－一般県道下砂子坂池田町線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2007

富山市教育委員会

小出城跡遠景（平成16年度撮影　北側から）

堀（SD01　平成15年度　西側から）

小出城跡出土主要木製品

例　言

1．本書は、富山市水橋小出地内に所在する小出城跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、富山県（土木部道路課）が事業主体となる一般県道下砂子坂池田町線道路改良事業に伴うもので、富山県土木センター立山土木事務所（工務第１課道路改良班）の依頼を受けて、平成15年度から平成17年度にかけて富山市教育委員会が受託し実施した。なおこれに先立ち、平成８～９年度および平成14年度に試掘確認調査を実施した（肩書きは当時）。

3．調査の期間、発掘面積、調査担当等は次のとおりである。

試掘確認調査（工事立会方式）平成８年５月31日　対象面積 715㎡　発掘面積 5㎡
調査担当　富山県埋蔵文化財センター企画調整課　文化財保護主事　高梨清志
富山市教育委員会生涯学習課　学芸員　鹿島昌也

試掘確認調査　平成９年９月29日～10月１日　対象面積 3,300㎡　発掘面積 99㎡
調査担当　富山市教育委員会生涯学習課　学芸員　鹿島昌也
平成14年６月25日～６月26日　対象面積 250㎡　発掘面積 24㎡
調査担当　富山市教育委員会埋蔵文化財センター　学芸員　鹿島昌也　原田幸子

発掘調査　平成15年８月４日～10月１日　発掘面積 193㎡
調査担当　富山市教育委員会埋蔵文化財センター　学芸員　鹿島昌也　嘱託　安達志津
同　稲垣裕二
平成16年７月１日～９月22日　発掘面積 265㎡
調査担当　富山市教育委員会埋蔵文化財センター　学芸員　鹿島昌也　嘱託　稲垣裕二
平成17年８月10日～11月15日　発掘面積 260㎡
調査担当　富山市教育委員会埋蔵文化財センター　学芸員　野垣好史　嘱託　久保浩一郎

出土品整理・報告書作成　平成15年８月４日～平成19年３月22日

4．調査の実施から報告書作成までに次の方々の助言や協力をいただいた。記して謝意を表したい。

（独）奈良文化財研究所、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山市上条地区センター、上条用水十地改良区、上条校下自治振興会、石川真、浦畑奈津子、岸田徹、栗山雅夫、酒井英男、寒川旭、塩田明弘、塩原喜一、島田恒、高岡徹、土井修、中村一郎、堀芳信、松井章、松澤那々子、宮田進一、四柳嘉章、渡邉晃宏（敬称略）

5．本書の挿図・写真図版等の表示は次のとおりである。

(1)　方位は真北、水平基準は海抜高である。
(2)　座標は国土座標第Ⅶ系（世界測地系）を使用した。
(3)　遺構の表記は次の記号を用いた。
ＳＤ：溝、ＳＥ：井戸、ＳＫ：土坑、Ｐ：柱状ピット、ＳＸ：不明遺構

6．本書の執筆は、鹿島、野垣、安達、稲垣、久保が行い、各々の責は文末に記した。

総括ｉ）として富山大学理学部　酒井英男研究室各氏より玉稿を賜った。
種子類の同定については(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　中村亮仁氏からご教示及び原稿を賜った。

7．出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

目　　次

Ⅰ 遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ 調査に至る経緯 …… 2
Ⅲ 発掘調査の概要 …… 5
　ⅰ）調査の方法と基本層序
　ⅱ）平成15年度～17年度調査の概要
Ⅳ 平成14年度以前の調査の概要 …… 44
　ⅰ）試掘確認調査の概要
　ⅱ）発掘調査の概要
Ⅴ 自然科学分析 …… 49
　ⅰ）放射性炭素年代測定及び出土木材の樹種同定（平成15－16年度調査）
　　①木材（木製品・炭）の樹種同定 …… 植田弥生（パレオ・ラボ）
　　②放射性炭素年代測定 …… パレオ・ラボAMS年代測定グループ
　ⅱ）動物遺体同定（平成15・16年度調査） …… 黒澤一男（パレオ・ラボ）
　ⅲ）動物遺存体について（平成15・16年度調査） …… ㈱吉田生物研究所
　　㈱奈良文化財研究所
　ⅳ）漆器の塗膜構造調査（平成15・16年度調査） …… ㈱吉田生物研究所
　ⅴ）放射性炭素年代測定（平成17年度調査①） …… パレオ・ラボAMS年代測定グループ
　ⅵ）放射性炭素年代測定（平成17年度調査②） …… ㈱中部日本鉱業研究所
　ⅶ）重軽鉱物組成分析（平成17年度調査） …… ㈱中部日本鉱業研究所
Ⅵ 総　　括 …… 59
　ⅰ）富山市小出城跡に現れた小断層の考古地磁気研究ついて …… 酒井英男　松延礼佳
　　岸田徹　伊藤孝
　　野垣好史
　ⅱ）主要遺構の特徴と変遷 …… 野垣好史
　ⅲ）小出城跡出土漆器について …… 稲垣裕二
　ⅳ）まとめ …… 鹿島昌也
参考文献 …… 70
写真図版 …… 71
報告書抄録

凡　　例

平面図・断面図に落としたドットと、遺物実測図のスクリーントーンは次の通りである。

● 中世土師器
■ 珠　洲
▲ その他の中近世陶磁器
◘ 須恵器・土師器
○ 漆　器
△ 木 製 品
□ 石製品・金属製品・有機物
○ 被 熱 礫
油　煙
赤 色 漆

1 小出城跡
2 小出
3 水橋大正
4 水橋石政
5 水橋池田館
6 水橋伊勢屋B
7 水橋伊勢屋A
8 水橋中村
9 水橋恋塚
10 水橋小池
11 水橋開発町
12 水橋狐塚
13 水橋鏡田
14 水橋的場
15 水橋専光寺
16 水橋石割Ⅳ
17 水橋高寺
18 水橋田伏
19 金尾
20 水橋北馬場
21 水橋上砂子坂
22 田伏・佐野竹
23 水橋金広・中馬場
24 若王子塚古墳
25 宮塚古墳
26 清水堂大塚古墳
27 仏生寺城跡
28 竹内館跡
29 清水堂南
30 金尾新
31 中野（鴛野城）
32 水橋荒町・辻ヶ堂
33 水橋扇等
34 水橋永割
35 水橋朝日町
36 新堀東
37 新堀
38 国重
39 金尾新西
40 新堀西
41 水橋二杉
42 水橋入部
43 横越
44 高来
45 浜黒崎野田・平榎
46 平榎亀田
47 水橋入江
48 竹内犬神堂古墳
49 清水堂C
50 清水堂F

第1図　小出城跡と周辺の遺跡（S＝1/50,000）　上は明治43年陸地測量部測図
下は平成10年国土地理院地形図

Ⅰ　遺跡の位置と環境

小出城跡は、富山市の北東部に位置し、西約2.5㎞常願寺川が、東約2.5㎞に上市川が流れる。海岸からは直線で約2.7㎞、JR北陸本線水橋駅の南東約1.6㎞、富山地方鉄道越中舟橋駅の北3.3㎞に位置する。遺跡の標高は約3mを測る。地形的には常願寺川下流部の扇状地上に立地するが、遺跡の西約0.5㎞を南北に流れる白岩川と遺跡の北を東から西に流れる新橋川、遺跡の南を東から西に流れる小出川に囲まれた低湿地帯に位置する。白岩川は水橋出漁から水橋大正付近でかつて屈曲して流れており、小出集落の西側に接するように流れていたようである。ほ場整備前の地割り図を見ると調査地周辺にはかつて「一番割」、「下坪」、「中坪」「下山口」、「供養塚」などの小字名が残っていた。

小出城は、越中戦国史において『三州志』や『文政元年新川郡書上申帳』、『越中古城記』、『信長公記』などに登場するが、その位置は特定されていなかった。1976年刊行の「富山市遺跡地図」では、小出神社西側一帯の東西約200m、南北約150mがその範囲として登載されていた。1993年版の『富山市遺跡地図』ではその範囲を広げて東西約800m、南北約1200mを遺跡範囲としている。1992～93年にかけて富山考古学会員（金子培子氏・林寺厳州氏）による踏査が行われ、鎌倉～戦国時代を中心とした遺物が表採されている（金子・久々1995）。

文献史料によると、天文14（1545）年、唐人兵庫（武部兵庫正）が越後の長尾為景に敗れこの城に入ったとされる。永禄6（1563）年には上杉謙信によって落城した。落城後揚美庄助五郎が拠ったが永禄9年、謙信に再び攻め落とされる。天正6年の謙信の急死後、天正8（1580）年には佐々成政の武将久世但馬が居城したとされる。越中へ進出した織田方にとって、小出城は上杉方の魚津城・松倉城に対する前線基地となった。天正9年3月には織田勢が信長の馬揃えの為在京中に上杉景勝によって小出城が包囲された（小出城の戦い）が、成政らは急を知り織田勢の武将とともに越中に帰国すると景勝は城の包囲を解き撤退した。天正10年には本能寺の変後、上杉勢が小出城を奪っている。翌11年には、佐々成政が魚津城を猛攻し、上杉勢は魚津城・小出城を明け渡し越後へ退去したとされる。

本遺跡周辺には縄文時代から江戸時代にかけての遺跡が広範囲に所在する。東に隣接する小出遺跡は1919年に多数の弥生土器や石器が出土したとされ、竪跡も確認されている（水橋町郷土史1966）。水橋郷土資料館には小出遺跡で出土した磨製石剣や太型蛤刃石斧が保管され、麻柄一志氏によって紹介されている（麻柄1982）。

また、小出城周辺の白岩川流域には中世の集落や城館が多く点在し、越中中世史を考える上で重要な地域であることがうかがえる。小出城の南約2㎞には鎌倉～江戸時代前期にかけての館跡が発掘された水橋金広・中馬場遺跡が所在する。そのさらに南約2㎞、白岩川左岸には戦国期に細川宗十郎が拠ったとされる仏生寺城が営まれ、土郭の堀などが発掘されている。仏生寺城の北西には竹内館跡の所在が推定されている。さらに小出城の南西約2.5㎞の白岩川左岸の富山市水橋の場地内には『玉永寺史』に登場する鷲野城が推定され、守護代神保氏の動向を知る上で重要な地域でもある。

一方、水橋小出地内には越中の禅宗（臨済宗）寺院としては最も早く成立したとされる瑞井山金剛護国禅寺があったとされる（木倉1967）。鎌倉末期～元亀2（1571）年にかけて文献に登場し、国衙領小井出保に拠った在庁官人系の有力豪族小井出氏が鉄庵道生を招致して開山された。室町期には守護畠山氏の外護を得て建仁寺への出世寺となったが、戦国期には衰退していたようである。寺跡は曹洞宗大通寺付近一帯と推定されているが明らかではない。このような禅宗寺院は守護の支配拠点ともなる政治や経済、交通の拠点に所在していた。小出城成立の背景にはこのような禅宗寺院の存在も見過ごすことができない。（鹿島）

Ⅱ　調査に至る経緯

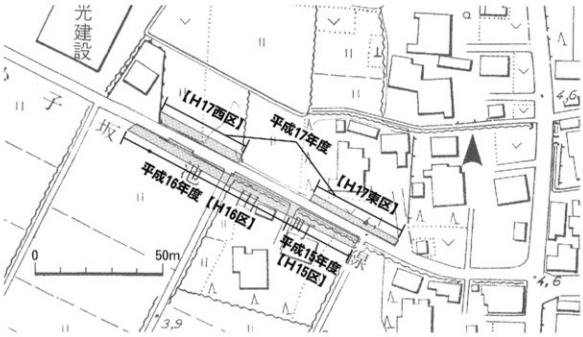
小出城跡の推定面積は127,000㎡で、縄文時代・古代・中世・近世の遺物が出土する。このため平成５年版『富山市遺跡地図』に周知の埋蔵文化財包蔵地（市遺跡№201055）として登載された。

ところが平成８年３月、一般県道下砂子坂池田町線に係る道路改良工事が当遺跡地内で着手されているといった事案が判明した。このため、富山県道路課、富山県立山土木事務所、富山県埋蔵文化財センター、富山市教育委員会（市教委）の４者で急遽対応を協議し、埋蔵文化財の保護措置を講ずることとした。まず路盤工事に着手済の延長約70m、面積715㎡について工事立会い形式による試掘確認調査を県埋蔵文化財センター職員の派遣を受けて、同年５月31日に実施した。なお、この地域については路盤改良が完了していることもあって、遺跡の所在を確認することはできなかった。

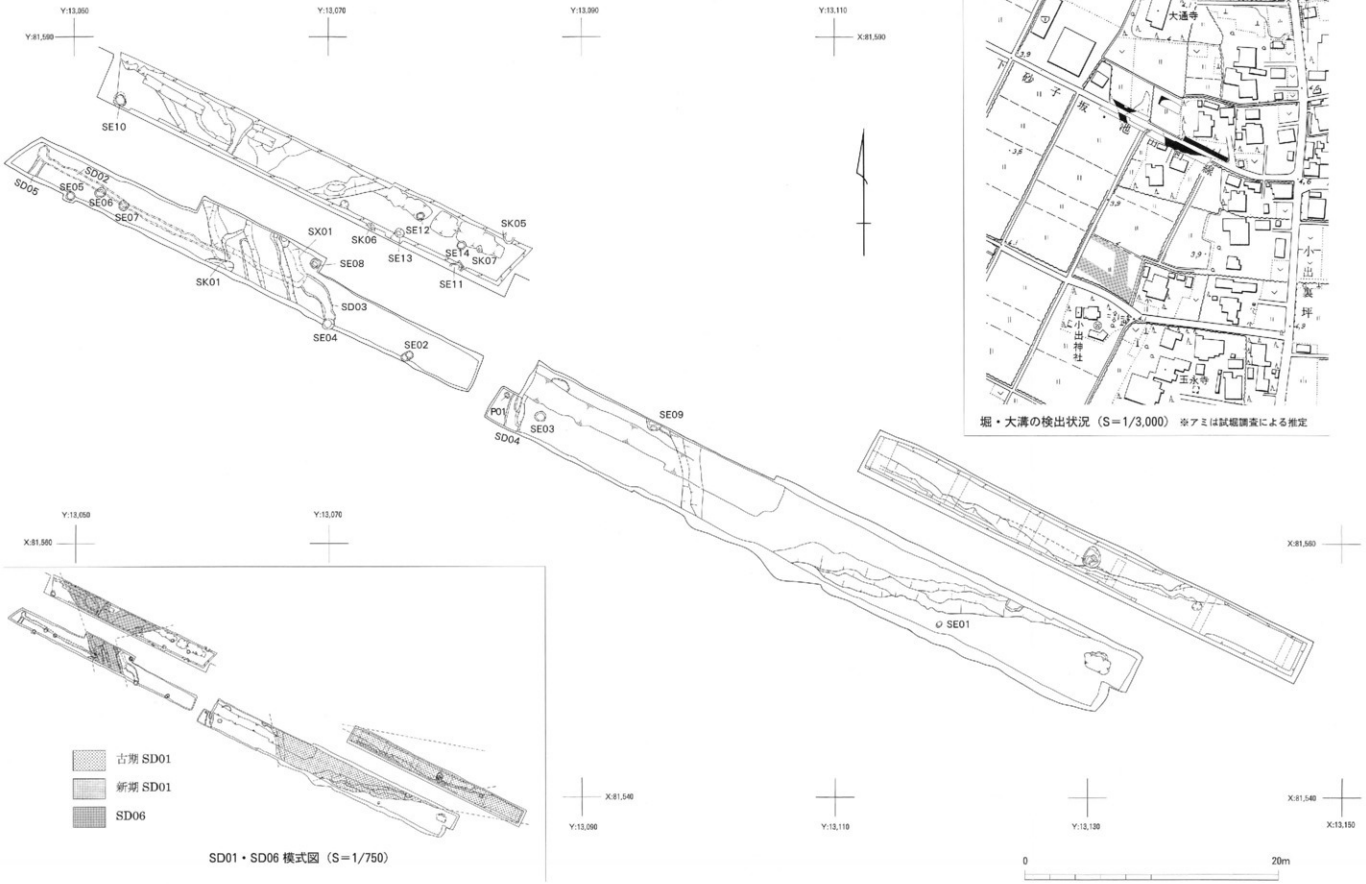
その後、平成９年９月29日～10月１日に宅地部分を除く延長260m、面積3,300㎡について試掘確認調査を実施したところ、対象区東寄り460㎡に中世後半から近世初期にかけての遺構や遺物がみられ、遺跡の所在を確認した。この結果を受けて、同年12月19日県立山土木事務所、県埋蔵文化財センター、市教委とが３者協議を行い、試掘調査で確認された遺跡の保存や未試掘地の取り扱い、今後の保護措置等埋蔵文化財の取り扱いについての「覚書」を平成10年３月１日付けで取り交わした。

平成14年６月25日～26日に250㎡の未試掘地を対象とした試掘確認調査を実施したところ、堀跡の一部とみられる大溝や戦国～江戸時代の遺物を確認した。全体の試掘確認調査結果に基づき道路改良計画高などを調整した結果、遺跡所在範囲に含まれる改良部分全域が発掘調査対象となった。工区を２区（１工区492㎡、２工区541㎡）に分け、２ヵ年かけて発掘調査を実施することとなった。

平成15年５月、現道部の計画高を見直し、拡幅部のみの調査にするとの計画変更を受けて、発掘調査は３か年で実施することとなった。平成15年度は対象地南東部の193㎡、平成16年度は対象地南西部265㎡、平成17年度は北側拡幅部260㎡の発掘調査を実施した。北側拡幅部のうち延長30m、102㎡については、調査着手の日途が立たないため、一旦調査を打ち切り、平成18年度に出土品整理、報告書作成を行った。（第２図・第33図参照）　　（鹿島）



第２図　発掘調査区位置図（S＝1/1,500、ベースは平成７年富山市基本図）



堀・大溝の検出状況（S＝1/3,000） ※アミは試掘調査による推定

SD01・SD06 模式図（S＝1/750）

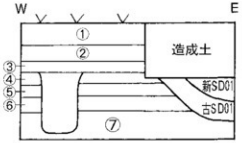
第3図　調査区全体図（S＝1/300）

Ⅲ　発掘調査の概要

ⅰ）調査の方法と基本層序

発掘調査は県道南側拡幅部東寄りから**平成15年度調査区**【H15区】、同西寄りが**平成16年度調査区**【H16区】、県道北側拡幅部が**平成17年度調査区**【H17区】となる。平成17年度は、東西に調査区が分かれるため、それぞれ【H17西区】、【H17東区】と呼称する（第２図参照）。

基本層序については、何れの調査区もほぼ場整備や宅地造成、水路敷設などで上部層が削平・改変を受けている。H16区西寄りの層位より、上から①層：褐灰色～暗灰色土（耕作土・造成盛土）、②層：黄灰色土（耕作床土）、③層：明褐灰色粘質土（褐色鉄分・砂混じり、遺物包含層）、④層：灰黄～灰褐色粘質土（地山層）、⑤層：暗灰～灰黒色粘質土（地山層）⑥層：暗灰黄色～灰白色粘質土（地山層）⑦層：暗灰～黒灰色粘土（地山土）と区分した。H15区やH16区東側、H17東区では④層あるいは⑤層が遺構検出面となる。⑦層の下は白色粘土層と続き、地山土は白色系と黒色系の粘土が互層となる。



第４図　基本層序

調査は、遺物包含層の残る部分はその直上までバックホウにより掘削し、それより下は人力で掘削した。測量は光波測量器（トータルステーション）を使用した測量を実施し、公共座標（世界座標）を使用した。（鹿島）

ⅱ）平成15～17年度調査の概要

１．遺構

検出した遺構は堀１条、溝・大溝５条、井戸14基、土坑７基である。

（1）堀・大溝・溝

SD01　H15・16・17年度調査区にまたがって検出した。遺構は大きく２期に分けられる（第３図左下の模式図参照）。最初に掘削された溝が埋没した後、ほぼ同じ位置に規模を縮小した溝がみられる。以下、前者の溝を「古期SD01」、後者を「新期SD01」とする。平成15・16年度と平成17年度調査区は道路を挟むため、各調査区の溝が確実に同一と断定できないが、土層が類似することから、ここでは一括して扱う。規模は、古期SD01が幅約13m、深さ約1.0～2.0m、新期SD01が幅約5.5～8.5m、深さ約0.3～0.7mである。古期SD01の覆土は、下部の薄い粘質土層と、上部の黒褐色・灰白色の粘土ブロックを含む層に大別できる。下部の粘質土層は、自然堆積土と考えられるが、上部のブロック含有層は、多量の粘土ブロックが混入し、通常の自然堆積土とはみなし難い。遺物や礫の含有も自然堆積土層と比べて少なく、人為的に埋め立てられた土層と考えられる。この人為埋土の上に新期SD01がある。模式的には以上のように七層を大別できるが、すべての場所でこのように明確に分けられるわけではなく、場所によってはある層がみられなかったり、上層の性格付けを行いにくかったりする場合もある。なお以下の記述では、古期SD01覆土下部の自然堆積層を「Ⅰ層」、上部のブロック含有層を「Ⅱ層」、新期SD01覆土を「Ⅲ層」と呼び分けている。（野垣）

【H15・16区】（第３・５・６図、図版１・２・３）　堀と思われる溝を長さ36mに渡って検出した。検出幅は5.5m以上、深さ1.1mである。ほぼ東西方向に走り、15年度調査区と16年度調査区の境あたりで折れる。西側肩部分には多くの礫や木材片が出土しており、護岸が目的と考えられる。また、調査区中央部分（X81,550、Y13,110付近）でも多くの礫が出土しており、その付近の縦断面をみると、

この部分のSD01肩に土を盛って多くの礫を置いており、礫群の西側に東側より新しい土層が見られる。ちょうどこの付近の地山が、地震による大規模な噴砂で形成された砂地であることから、肩部分の前落を防ぐための護岸、または土橋状の出っ張りであった可能性がある。また、この部分で方向の違う堀が交わっている可能性も考えられる。中央部護岸の東側は後世のゴミ穴に切られており SD01東側の覆土と護岸の関係を確認できなかった。この中央部護岸を境に東と西とで覆土の様相が異なる。西側の覆土は粘質シルトが主体である。東側部分の下層には、地山由来の粘土ブロックを多く含む層があり、人為的に埋め戻されたものと考えられる（Ⅱ層）。遺物はⅢ層の下部とⅡ層下部に多く分布する傾向がある。但し、本調査区では層位ごとに発掘していないため遺物の帰属層位は明確ではないことを断っておく。東側のⅢ層は西側の覆土（護岸より新しい層）に連なっていると考えられる。これらのことから中央護岸部分より東部分ではある時期古期SD01が埋め戻され、規模を縮小し新期SD01として利用したことが考えられるが、肩部分は水の流れ込みによる崩壊が起こっていると考えられ、新期SD01、古期SD01の掘り込み当時の幅を明確にすることはできない。西側肩部護岸も中央部護岸と同時期に施工された可能性が高い。西側では護岸より新しい層はすべて新期SD01と考えられる。また、SD01出土の遺物に被熱痕のある土器、陶磁器、大礫が多く含まれること、ウマの骨、歯などの骨片を覆土に多く含むことなどが注意される。（安達）

【H17東区】（第３・７～９図、図版５）本調査区は冒頭に記した上層の大別を比較的明瞭に把握できる（第７図）。新期SD01の完掘後に調査区を横断する断割トレンチを６ヶ所（西から断割Ａ～Ｆ）設定し、土層断面から古期SD01の規模や堆積状況を判断した。

新期SD01は、調査区にほぼ平行して北西－南東方向に延び、調査区中央付近でやや北に湾曲して調査区外に続く。深さは西部で0.6m、中央部で約0.3m、東部で約0.7mである。ただ、表土掘削時にやや掘りすぎた箇所があり、西部で0.2m、中央部付近で0.3m程度深かったと推定できる。西部では掘り込み角度が急だが、東部では緩やかとなる。覆土は粘質土を主体とし、ほぼ水平堆積をなす。

出土遺物は東部に多い。特に溝の斜面付近で木製品が多く出土した（第９図Ⓐ）。この範囲の下層近くで植物の編物、下駄のほか、たも網の枠木などが出土した。たも網の枠木は４個体が連なって出土しており、意図的に配置された可能性がある。底面直上では、残りの良い曲物や漆椀の出土がある。調査区西端部では、鋤先が溝の斜面に突き刺さった状態で出土した（第９図Ⓑ）。土器・陶磁器は、中世土師器や珠洲などの出土が多いが、上層から中層を中心に越中瀬戸、唐津など17世紀代以降の近世陶磁器も出土する。時間をかけて徐々に埋没したことが考えられる。

古期SD01は、新期SD01よりおよそ0.7～1.5m下で検出した。底面の標高は約0.8～1.6mで、凹凸はあるが、全体的には西に向かって低くなる。西端部の断割（断割Ａ）（第７図）で地山の立ち上がりが観察でき、ここから溝幅を推測した。また、東端部の断割（断割Ｆ）で検出した地山の立ち上がりは、平成15年度調査区から続く南側の掘り込みに対応するとみられる。したがって、本調査区は全体が古期SD01の中に入る。古期SD01の覆土は、多くの断割で地山直上に自然堆積土層（Ⅰ層）が観察された。西端部の断割（断割Ａ）のこの層からは空風輪が出土した（第９図Ⓓ）。上部の覆土は灰白色や黒褐色の粘土ブロックを多量に含む土層である。この粘土ブロック含有層は、土層単位が大きく、遺物や礫の出土量が少ない。自然堆積層とは土質や遺物出土状況が明らかに異なり、大半は人為的な埋土（Ⅱ層）と判断される。ただし、調査区西寄りの断割Ｂ（第７図）では、人為埋土に挟まり帯状の暗茶褐色粘質土層（７層）が確認されている。上下の人為埋土層とは色調や質が異なり、この層を追って掘り下げを行ったところ、同層から陶磁器、下駄、漆椀などの遺物が出土した（第９図Ⓒ）。この土層は他の断割では確認されていないが、埋め立ての途中段階での自然堆積土と考えられる。

以上から想定される本調査区SD01の変遷をまとめると次のとおりである。まず、古期SD01掘削後、時間の経過とともに薄く自然堆積土（Ⅰ層）が流れ込む。その後、地山ブロックを多量に含む土砂

（Ⅱ層）で埋められたと考えられるが、上記の帯状の暗茶褐色粘質土層が示すように、埋め立ての途中に中断期間があり、この間に遺物を含む自然堆積があったと推測される。この層は他では確認していないが、層として確認できないだけという可能性もある。古期SD01の埋没後、規模を縮小して新期SD01が掘削され、17世紀以降にかけて徐々に埋没したと推測される。（野垣）

SD02（第16図、図版４） 東西方向に延長17.2m分検出し、西端で北折する。幅0.4～0.6m、深さ0.1～0.15mを測る。SE06・07、SD05より新しい。中世土師器片、珠洲、越中瀬戸などが出土し、城館廃絶後に形成された近世屋敷地を区画する溝と推測される。

SD03（第15図、図版３） 幅0.8～1.4mを測る。SX01より古い溝であるが、上部削平の為深さ0.1mと浅く、SX01との関係は不確定的である。SE04よりは新しい。中世土師器、珠洲、越中瀬戸、木片などが出土した。

SD04（第16図） 調査区を南北に横切り、幅1.1～1.35m、深さ0.3mを測る。中世遺物に加えて伊万里片など近世陶磁器が多く出土する。県道を横切る現水路の方向に一致する。

SD05（第17図） SD02より古く、幅0.6～0.7m、深さ0.05～0.15mを測る。

SD06【H16区】（第15図、図版３） 南北方向に調査区を横切る幅5.5m、深さ0.4～0.45mを測る大溝である。上部0.2mはSX01に切られるが、SX01はSD06が埋没する過程の窪地に堆積した遺構とみられる。覆土は黒灰色粘質土を基調とし、拳大より大きめの礫が多数出土するが、溝の肩部にまとまるような様相は見しない。北側はH17西区SD06に繋がるとみられ、中世土師器や珠洲など中世期を主体とする遺物や鉛玉も１点出土し、SD01とともに小出城の郭を区画する溝や堀としての機能が推測される。漆器や櫛などの木製品も出土した。（鹿島）

【H17西区】（第10～12図、図版６）「八」字状に検出された。中央付近で、三角形状に地山が掘り残されて高まりとなっている。これによって溝は、16年度調査区から続く南北方向に延びるものと、東側に延びるものに分岐していることが推測できる。溝の幅は約６m、深さは最深部で0.8m、平均的には約0.5mである。

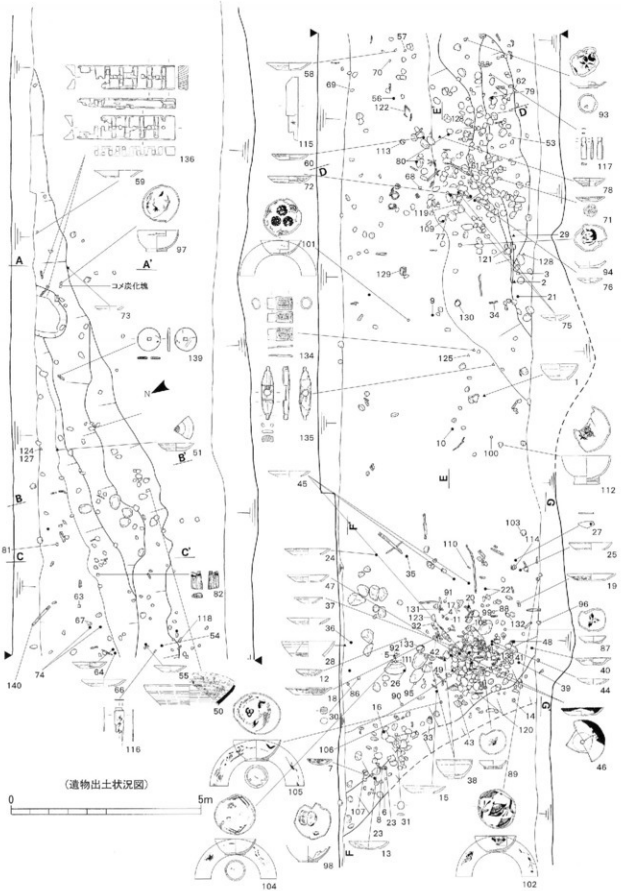
中央の分岐地点では地山が三角形状に掘り残されてやや高まりとなり、その上に灰褐色粗砂層（第10図C断面６層）が盛上される。粗砂層はしまりが強く、またこの土層中に礫が多く混入する。第12図Ⓐに、底面に近い位置で出土した礫を示した。これらの礫の中には粗砂盛土層に埋まった状態で検出されたものが少なくないことから、人為的に礫を盛土に混入させた可能性が高い。礫を盛土に混ぜ、護岸を目的としたものであろうか。これらの礫に混じって五輪塔や板碑が出土している。礫の出土はこの範囲を中心に多いが、遺構全体からも出土している。

分岐地点を境にして東側の底面はほぼ平坦だが、西側では深く落ち込む場所がある。この落ち込みは北に向かうほど幅が広がり、深さも深くなる。遺構検出面からの深さは、最深部で0.8mである。この西側で杭状木製品が並んで検出された（第12図Ⓑ）。すべて倒れた状態で出土し、先端を西に向けている。１本の太い杭の近くに細い木材が数本ある例が多い。落ち込みに併行するように並ぶことから、この落ち込みに関連するものと考えられる。

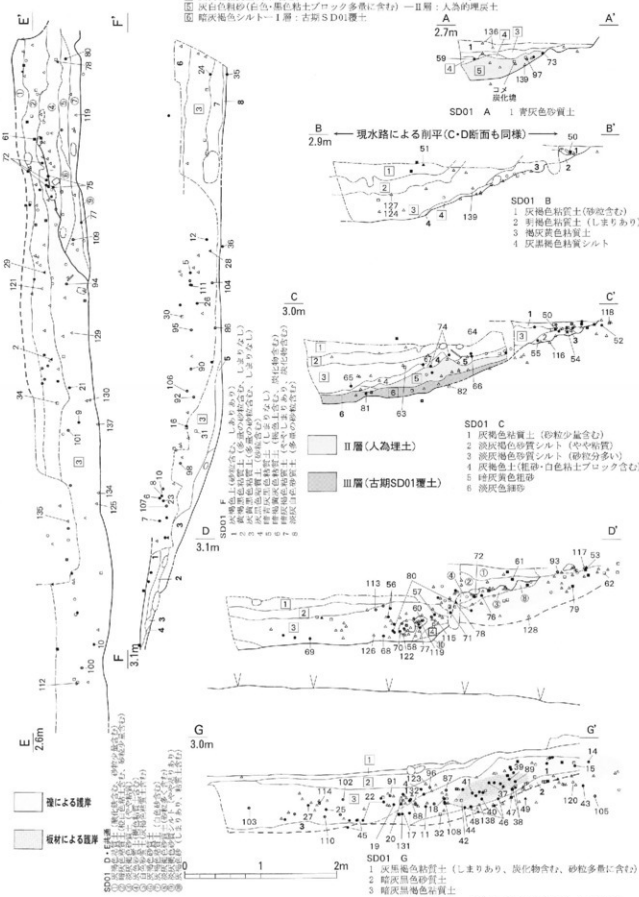
遺物は、中世遺物が主体であるが、上層からは越中瀬戸など17世紀代以降の近世陶磁器が出土している。近世にかけて徐々に埋没したと考えられる。（野垣）

（2）井戸

SE01（第13図、図版１） 直径約40cmの曲物１段が水溜めとして検出された。深さは検出面から0.28mである。掘り方は南側に深さ２、３cmの浅いものが検出された。本来はさらに上の層から掘込まれた井戸の可能性がある。曲物の外側に沿うようにして細い丸太材や板材が出土した他は土器などの遺物の出土はない。（安達）

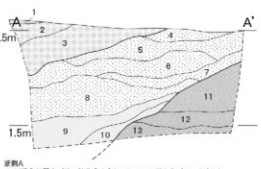


第５図　SD01（平成15・16年度調査区）遺物出土状況図（S＝1/100、遺物は第18～24図スケールの3分の1）

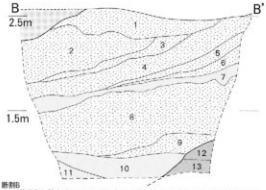


第6図　SD01（平成15・16年度調査区）断面図（S＝1/50）

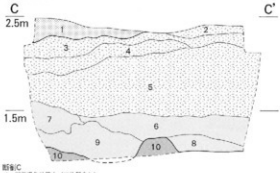
※細字ゴシック体数字は遺物番号に対応する
※遺物垂直分布は見通しで土層断面図にレベルをおとしたものである



断割A
1 灰褐色粘質土（砂・鉄分多く含む。2～3cmの灰白色ブロック含む）
2 灰茶褐色粘質土（砂多く含む。鉄分含む。1～2cmの灰白色・黒褐色ブロック少量含む）
3 灰茶褐色粘質土（砂・炭化物・鉄分含む。灰白色ブロックわずかに含む）
4 灰茶褐色粘質土（5～10cmの灰白色・黒褐色ブロック斑状に含む。砂含む）
5 灰茶褐色粘質土（2～3cmの灰白色・黒褐色ブロック多く含む。砂多く含む。鉄分含む）
6 灰茶褐色粘質土（5～10cmの灰白色・黒褐色ブロック斑状に含む。砂含む）
7 灰褐色粘質土（1～2cmの灰白色・黒褐色ブロック少量含む。砂含む）
8 灰褐色粘質土（3～5cmの灰白色ブロック・1～2cmの黒褐色ブロック含む。砂含む）
9 灰褐色粘質土（2～3cmの灰白色ブロック少量含む。砂含む）
10 灰褐色砂（砂多く含む。粘質土ブロック状30%程度含む）
11 灰白色粘土（黒褐色粘質土しみ状に10%程度含む）
12 黒褐色粘質土
13 黄灰色粘土

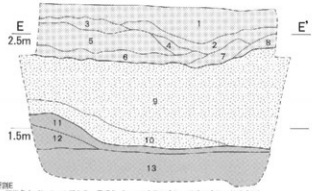


断割B
1 灰茶褐色粘質土（5～10cmの灰白色・黒褐色ブロック含む。砂・鉄分多く含む）
2 灰茶褐色粘質土（5～10cmの灰白色・黒褐色ブロック含む。砂少量含む）
3 灰茶褐色粘質土（2～3cmの灰白色・黒褐色ブロックわずかに含む。砂含む）
4 灰茶褐色粘質土（10～15cmの灰白色・黒褐色ブロック含む）
5 茶褐色粘質土（砂少量含む）
6 灰茶褐色粘質土（7～10cmの灰白色・黒褐色ブロック含む。植物質含む）
7 暗茶褐色粘質土（植物質含む）
8 灰茶褐色粘質土（7～10cmの灰白色・黒褐色ブロック、3～5cmの黄褐色ブロック含む。砂少量含む）
9 灰茶褐色粘質土（成分は土層8と似るが、ブロックが小さく少ない。砂やや多い）
10 暗灰茶褐色粘質土
11 暗灰茶褐色粘質土（10～15cmの灰白色ブロック含む）
12 灰白色粘質土（パサパサした手触り。しまり強い）
13 黒灰色粘質土

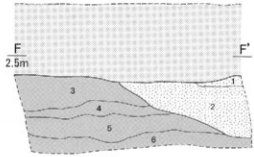


断割C
1 灰茶褐色粘質土（植物質含む）
2 灰褐色粘質土（1～2cmの灰白色・黄褐色ブロック含む。鉄分含む）
3 灰茶褐色粘質土（1～2cmの黄褐色ブロック含む。2～3cmの黒褐色ブロック少量含む。砂少量含む）
4 灰茶褐色粘質土（成分は土層3と似るが砂を大量に含む）
5 灰茶褐色粘質土（5～10cmの黄灰色ブロック、1～2cmの黒褐色ブロック・黄褐色ブロック斑状に含む）
6 暗灰褐色粘質土（1～2cmの灰白色ブロック少量含む。砂質土わずかに含む）
7 灰褐色粗砂
8 暗灰褐色粘質土（灰白色ブロック含む）
9 黒褐色粘質土（含有物ほとんどなく均質）
10 灰白色粘土

断割D
1 灰褐色土（砂多く含む）
2 灰茶褐色粘質土（砂含む）
3 灰茶褐色粘質土（5～10cmの黄灰色ブロック、3～5cmの黒褐色ブロック、1cmの黄褐色ブロック斑状に含む）
4 灰茶褐色粘質土（成分は土層3と似るがブロックが小さく少ない）
5 黒茶褐色粘質土（灰白色ブロックわずかに含む）
6 灰白色粘土（黒褐色土しみ状に含む）
7 黒茶褐色粘質土（灰白色ブロックわずかに含む。土層5に似る）
8 黄灰色シルト（黒褐色ブロック少量含む。植物質含む）



断割E
1 灰褐色土（2～3cmの灰白色・黒褐色ブロック斑状に含む。砂多く含む。鉄分含む）
2 灰茶褐色粘質土（黄褐色ブロックわずかに含む。砂多く含む。鉄分含む）
3 灰茶褐色粘質土（黄褐色ブロックわずかに含む。砂少量含む）
4 灰茶褐色粘質土（砂多く含む）
5 茶褐色粘質土（2～3cmの黄褐色ブロック含む。植物質含む。砂含む）
6 茶褐色粘質土（黄褐色ブロックわずかに含む。植物質含む）
7 茶褐色粘質土（黄褐色ブロックわずかに含む。植物質含む。土層6よりやや明るい）
8 灰茶褐色粘質土（5～7cmの灰白色ブロック、7～10cmの黒褐色ブロック斑状に含む。砂多く含む）
9 灰茶褐色粘質土（成分は土層8と似るが、砂が少ない）
10 灰茶褐色粘質土（1～2cmの灰白色ブロック、2～3cmの黒褐色ブロック含む。土層8・9よりブロック小さく少ない）
11 黄灰色粘質土（植物質含む）
12 灰白色粘土（含有物ほとんどなく均質）
13 黒褐色粘土（植物質多く含む。均一な色調）

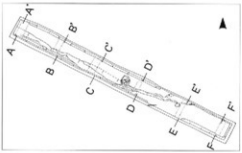


断割F
1 暗茶褐色粘質土（灰白色ブロックごくわずかに含む）
2 灰茶褐色粘質土（3～4cmの黒褐色ブロック、2～3cmの灰白色ブロック含む）
3 灰白色粘土（含有物ほとんどなく均質）
4 暗灰色粘土（土層3と5の漸移層か、両方の土を含む）
5 黒褐色粘土（含有物ほとんどなく均質）
6 灰黄色粘質土（植物質含む）

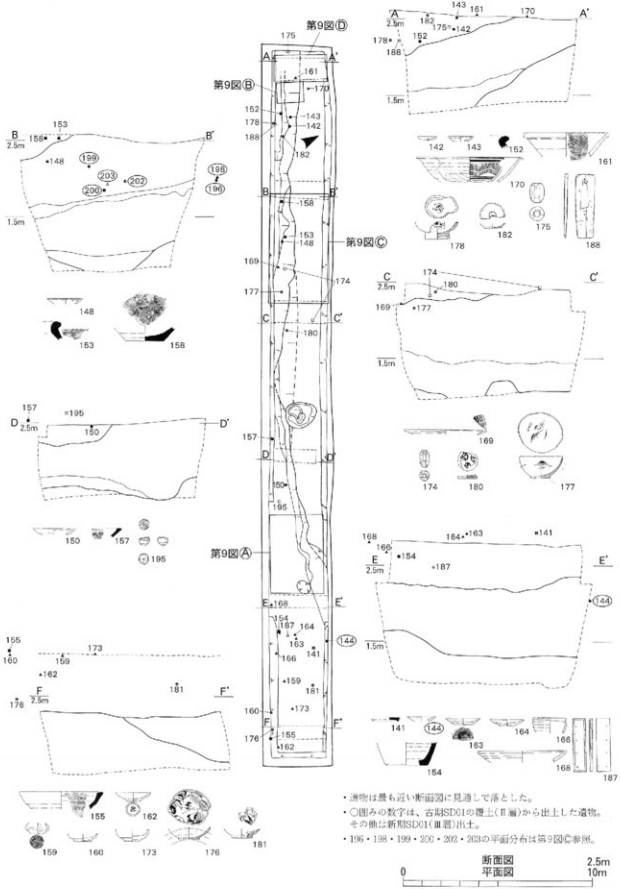
新期SD01覆土（Ⅲ層）
古期SD01覆土（Ⅱ層：人為埋土）
古期SD01覆土（Ⅰ層：自然堆積層）
地　山

※B～Eの断面は、左右反転して図示

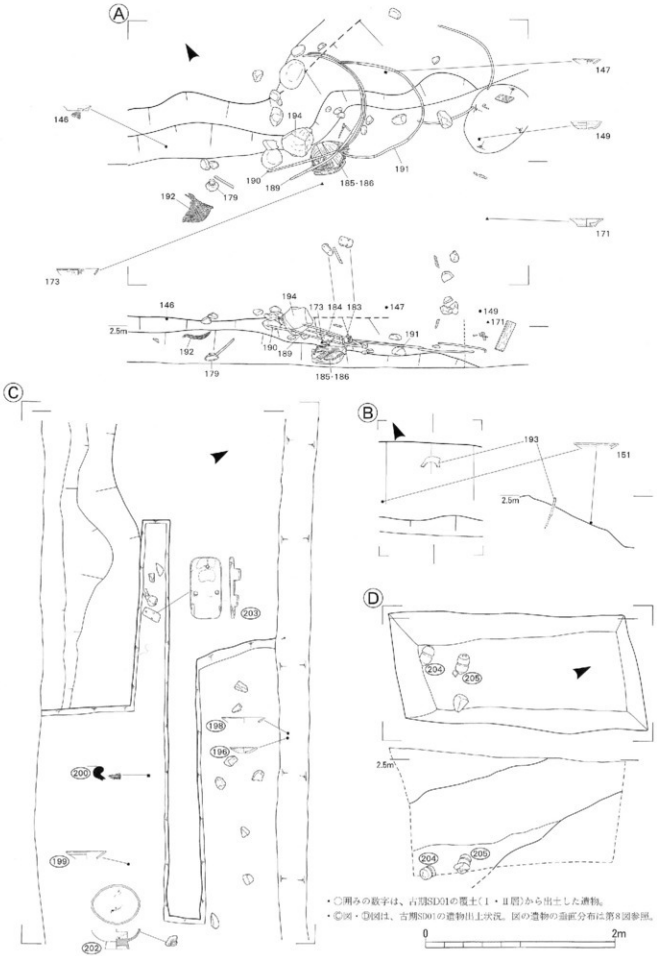
0　2m



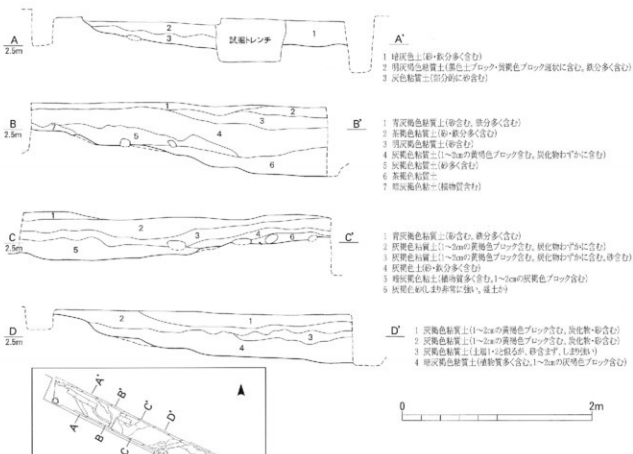
第7図　SD01（平成17年度調査区）断面図（S＝1/40）



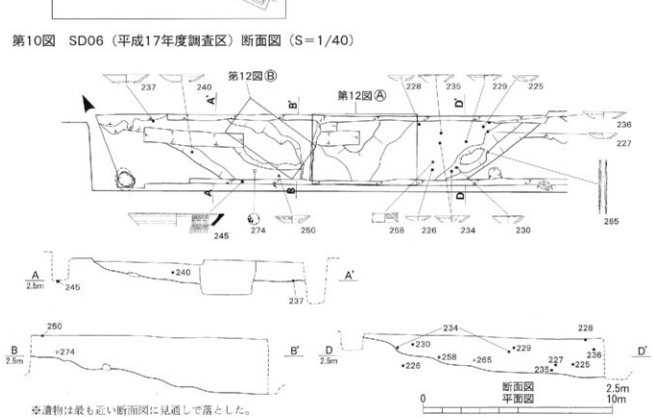
第８図　SD01（平成17年度調査区）遺物出土状況図①（平面図 S＝1/200、断面図 S＝1/50）



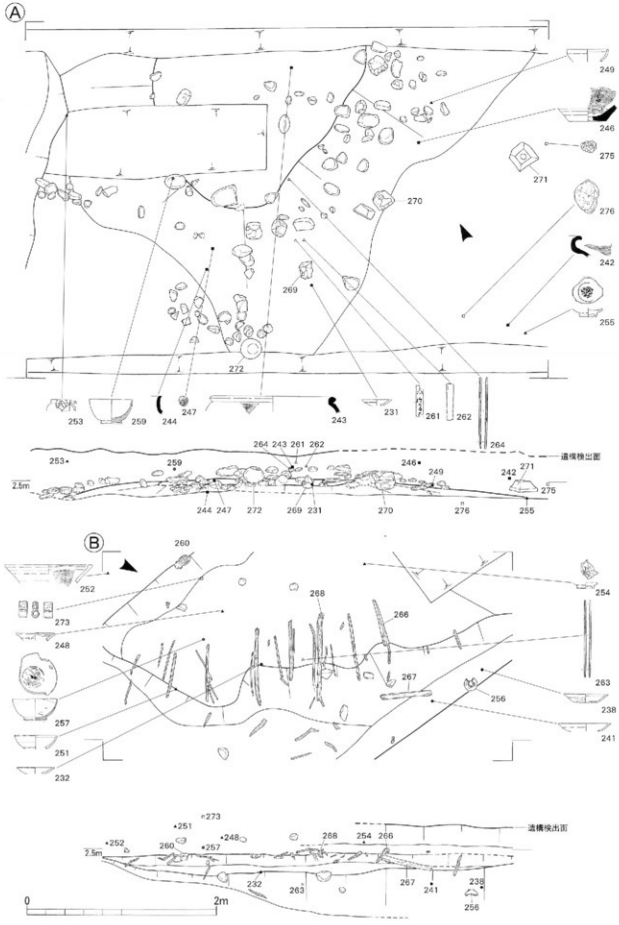
第9図　SD01（平成17年度調査区）遺物出土状況図②（S＝1/40）



第10図　SD06（平成17年度調査区）断面図（S＝1/40）



第11図　SD06（平成17年度調査区）遺物出土状況図②（平面図 S＝1/200、断面図 S＝1/50）



第12図　SD06（平成17年度調査区）遺物出土状況図②（S＝1/40）

SE02（第13図） 素掘りの井戸で直径0.6m、深さ0.85mを測る。断面観察により上部に井戸の南肩を切って長軸0.95m、深さ0.4mの土坑が掘り込まれていることが確認できる。遺物は曲物・柄杓（278）が出土したが、SE02埋没後の土坑からの出土と考えたい。

SE03（第13図） 素掘りの井戸で長径0.85m、短径0.75m、深さ1.05mを測る。覆土には灰色や黒色、褐色といった小ブロック土が混在し、下部まで埋め戻しが行われたようである。下層から珠洲（279）が出土した。

SE04（第13図、図版4） 素掘りの井戸で直径0.85m、深さ1.15mを測る。SD03より古い。覆土上層は締まった暗灰色粘質土、下層は軟質の黒灰色粘質土を基調とする。覆土上層から鶴丸文の漆器（280）が、下層からは曲物底板が出土した。

SE05（第16図） 素掘りの井戸で直径0.65m、深さ0.9mを測る。覆土中層から上面にかけて白色や黒色、黄色の小ブロック土が混在し、埋め戻しが行われた様相を呈している。井戸底に長径30cm、短径20cm、厚さ15cmの石が埋められていた。井戸の覆土中からは多数の木製遺物片が出土した。箸状木製品は14本（破片数）を数える。中世土師器片も数点出土した。

SE06（第13図、図版4） 素掘りの井戸で直径0.85m、深さ1.3mを測る。上部北肩が一部SD02によって切られる。覆土中層以下に拳～人頭大の川原石が充填されていた。井戸の西壁には粘15cm、長さ50cm以上の縦板が斜めに1枚立てかけられていた。多数の土器・陶器片や箸状木製品、櫛（287・288）、木柄付の刃物（289）などが出土した。

SE07（第13図） 素掘りの井戸で直径0.8m、深さ0.9mを測る。上部北肩が一部SD02によって切られる。覆土中層に長さ60cm、幅8cmの縦板が出土した。他に箸状木製品や漆器片、土器片などが出土した。

SE08（第13図、図版4） 長径40cm、短径30cmの曲物1段（291）が水溜として西壁に接し出土した。井戸の直径0.7m、深さ0.3mと浅く、上部は大きく削平を受けているとみられる。壁面には縦方向の薄い木片が僅かに残り、桶状の側構造を持っていたものとみられる。覆土中からは多数の木片に混じって中世土師器片が出土した。

SE09（第13図、図版4） 方形の掘方を持つ井戸の南半部のみ検出された。一辺が1.0m以上の隅丸方形を呈し、深さ0.9mを測る。覆土は地山土に由来する灰色や灰白色の楕円形を呈する大きめのブロック土や黒色のブロック土によって下層から上面まで埋め戻しが行われたものとみられる。下層には縦板状の板やほぞのある横桟（293）が出土した。横桟留めの側構造を持つ井戸枠を有していた可能性がある。箸状木製品や骨片、炭化物、刻印のある珠洲片（292）などが出土した。（鹿島）

SE10（第14図、図版7） 素掘り井戸である。平面は楕円形を呈する。長径0.85m、短径0.7m、深さは1.6mである。中層から下層にかけて壁面が大きくオーバーハングし、断面はフラスコ形となる。壁面は脆く、調査中も徐々に崩落してくるような状況であった。このことを考えると、掘削当初は通常の円筒形の井戸であったものが、使用しているうちに壁面が抉れ、最終的にこのような形態になったと考えられる。遺物の出土状況をみると、少なくとも遺物が混入した時点では壁面は抉れた状態であったことがわかる。覆土中層から完形に近い漆椀2個体と曲物の側板・底板が出土した。

SE11（第14図、図版7） 横桟と側材を組んだ方形井戸である。検出した横桟は井戸枠の基礎部と考えられることから、上部はかなりの程度削平されていることがわかる。横桟の一辺は約0.7mで、深さは0.4mである。西側の横桟は、調査区の壁面保護のために打ち込んだ鉄板で切断されていた。側板の破片が多くみられたが、いずれも原位置を留めていない。一部、材の小口が横桟と掘り方の間に入って検出されたものがあることから縦板組の構造と考えられる。縦板材は幅10cm前後、厚さ1cm未満の薄い板である。東部はほぼ横桟の木組に沿って掘り方があるのに対し、西部はこの枠を越えて、

掘り方が広がる。したがって、横桟の枠の中心と掘り方の中心が一致していない。

SE12（第14図、図版7） 素掘り井戸である。上部は現代の撹乱があり、下部のみが残る。平面は楕円形を呈し、長径0.6m、短径0.55、深さ0.2mである。出物とみられる破片が出土し、これに混じって箸状木製品が1点出土した。

SE13（第14図、図版7） 素掘り井戸である。平面はほぼ円形を呈する。直径約0.7m、深さ0.73mである。

SE14（第14図、図版7） 平面はほぼ円形を呈する。直径0.65～0.7m、深さ1.3mである。径1cm前後の細長い竹材が壁面の全周に貼り付けられる。もともとは底面まで延びていたが、検出後間もなく壁面が崩れてしまい、これと一緒に竹材も崩落したため記録に留めることができなかった。竹材は約70列認められたが、残存していない箇所もあったため、本来は80列程度であったと考えられる。壁面の上部で横方向の材がわずかに確認できたことから、縦に並ぶ竹材と横方向の材が組まれていたことが考えられる。壁面の脆さを考慮すると、壁面の補強のため設置された可能性が高い。（野垣）

（3）土坑

SK01（第15図） 長径2.2m、深さ0.25mを測る。南側は調査区外に延びる。覆土中から珠洲の甕口縁部（318）や中世土師器片などが出土した。

SK04（第16図、図版4） 長軸0.95m、短軸0.7mの隅丸方形を呈し、深さ0.4mを測る。北側は調査区外となる。SX01よりも新しい遺構である。覆土中から下駄1点（319）が出土したが、時期を決定付ける遺物の出土はなかった。（鹿島）

SK05（図版7） 南半部のみ検出した。規模は1.05m以上、深さは0.4mである。

SK07（第14図） 方形状を呈する。北側は撹乱されている。長軸0.54m、短軸0.4m、深さ0.33mである。井戸の可能性も考えられる。（野垣）

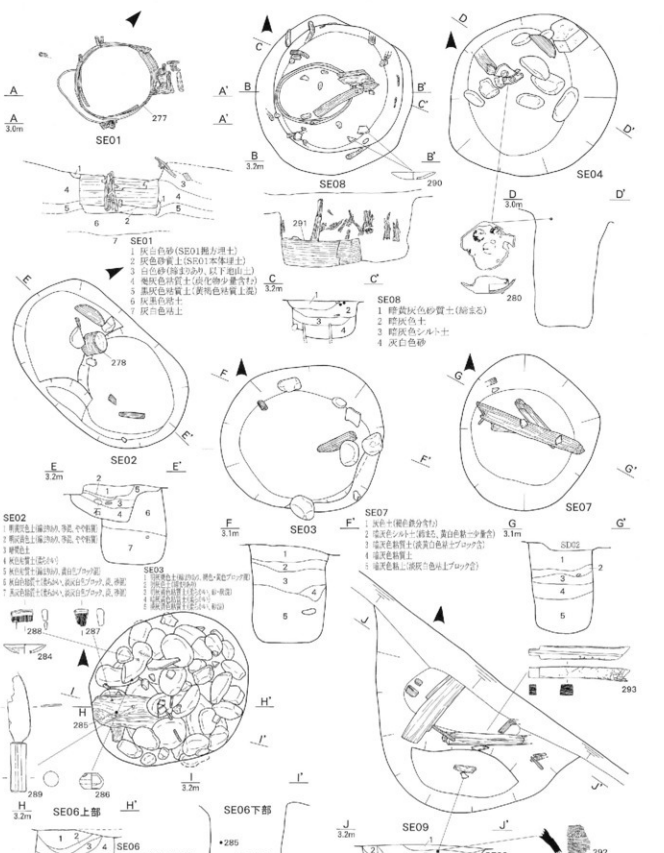
（4）不明遺構

SX01（第15図、図版3） SD06上部に形成された東西8.8m、南北2.7m以上、深さ0.3mの楕円形を呈する遺構で、北側は調査区外に延びる。SD03より新しいと思われるが、切りあい箇所の層が浅く、不確定的である。覆土はSD06よりも砂質が多く含まれ、覆土中からは、中世土師器や珠洲焼、青磁といった中世期の遺物に混じって古代の土師器・須恵器や近世陶磁器（越中瀬戸・伊万里）など様々な時期の遺物（309～317）が含まれる。よって、SD06が埋まった後の窪地を利用した土器廃棄や流れ込みによる堆積などによって形成された遺構と推測される。

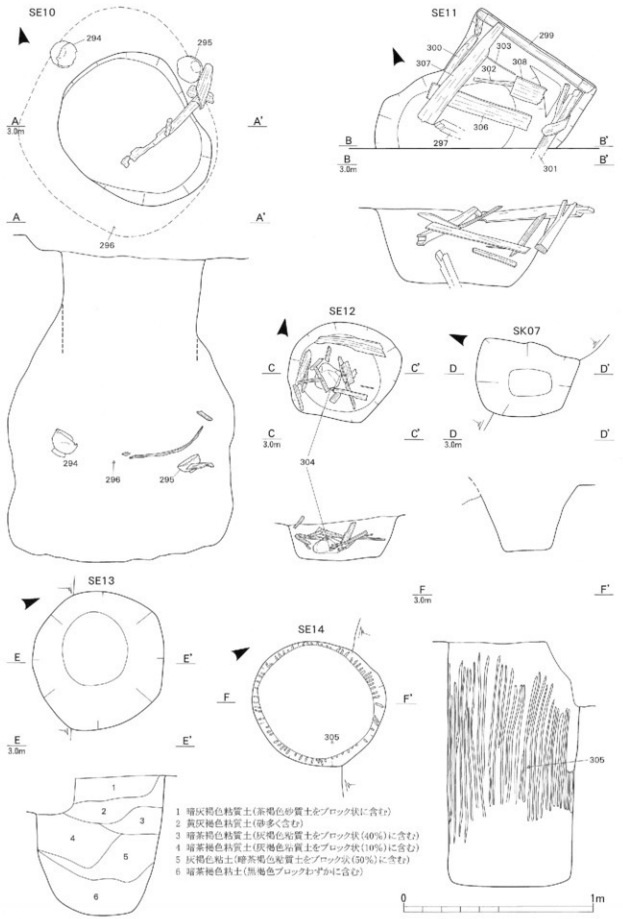
（5）地震による地層のずれ・歪み（小断層）

【H16区】（第17図、図版4）旧排水溝構造物除去後の地山断面に地震による層序のずれ（東下がり）・歪みが観察された。考古地磁気調査で断層活動に伴う右横ずれとねじれによる変形を被ったことが判明した。（鹿島）

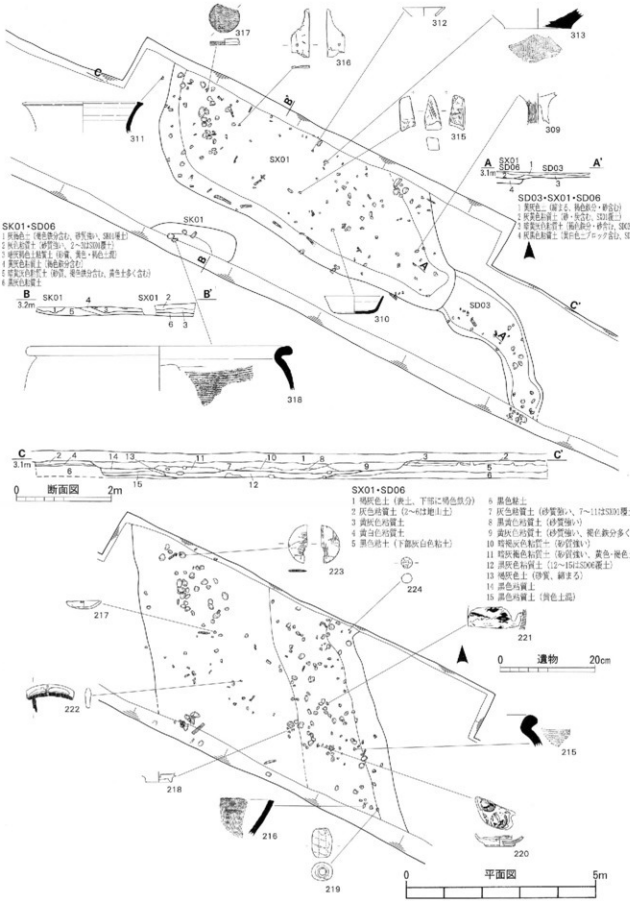
【H17西区】（第37図、図版7）遺構検出面上から排水溝を掘削し、その壁面を精査したところ確認された。土層は、掘削した面までおよそ6層に分層でき、上下ほぼ一直線に約60cmにわたってずれている。上層を基準にしたずれの幅は7～10cmである。2層のずれの境から砂混じりの灰色粘質土が斜め上方に上がる。なお、本断層確認前に、西隣のSK05を掘削していた際、覆土の色調が明確に変わる箇所があった。これが土層のずれの続きを示すなら、北東－南西方向に続いていたと推測でき、SK05より新しい時期に生じたと考えられる。（VI総括1参照）（野垣）



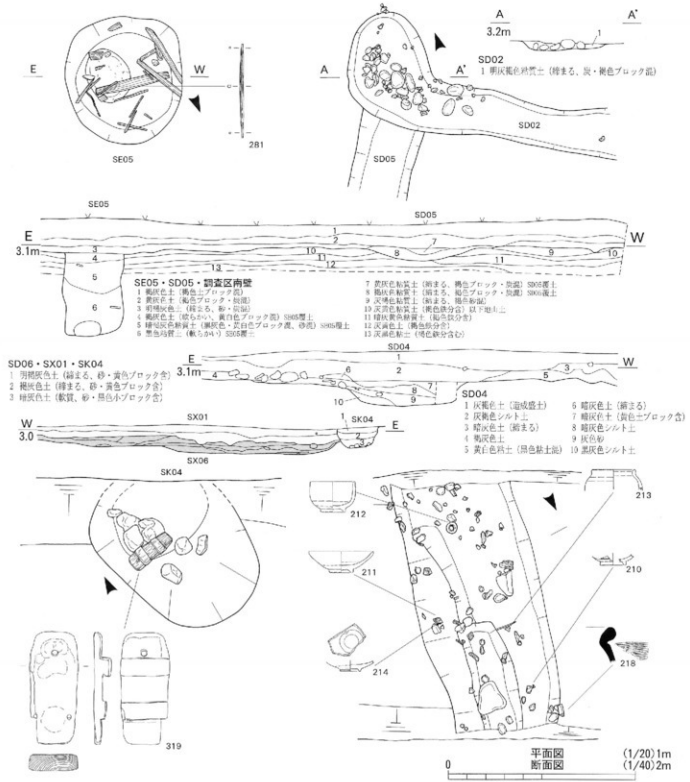
第13図　SE01～04・06～09平面図（S＝1/20）・断面図（S＝1/40）



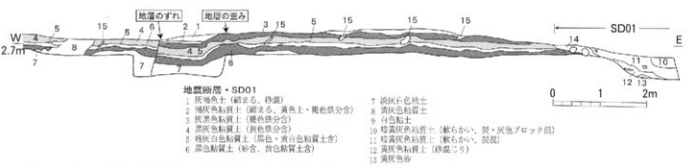
第14図　SE10～14・SK07平面図・断面図（S＝1/20）



第15図　SX01、SD03、SD06（平成16年度調査区）平面図（S＝1/100）・断面図（S＝1/80）



第16図　SE05、SD02・04、SK04平面図（S＝1/20）・断面図（S＝1/20）



第17図　平成16年度調査区内地震による地層のずれ・歪み（S＝1/80）

2．遺物

（1）堀・大溝・溝出土遺物

SD01

【H15・16区】（第18～24図、図版８～11）

①木製品以外の遺物　西側Ⅲ層　1～3はⅢ層上位から出土した遺物である。1は瀬戸美濃の天目茶碗である。16世紀後半に属する。2は古瀬戸の折縁皿で15世紀前半に属する。3は硯である。海部分は欠損している。下端の縁辺部が欠けているがその部分にも墨痕が残る。

4～34はⅢ層中位から出土した遺物である。4～22・26は非ロクロ成形の中世土師器である。4・5・9は平底から口縁部が外反して立ち上がって端部が肥厚し、先を小さくつまみあげるタイプである。内面は底部のみ不定方向のナデで、口縁部は1段ナデを施す。5は口縁部を中心に厚く油煙と黄褐色の物質が付着する。6～8・12は丸底か、それに近い底部で、口縁端部は尖る。11は5同様油煙と黄褐色の物質が付着する。13～17は底部と口縁部の境が明瞭ではなく、口縁端部内面が外反し尖る。調整は外面口縁部に1段ナデ、それより下位には指頭圧痕を残す。内面は底部から口縁にかけて斜め上になで上げるものが多い。14はほぼ全体に油煙が付着する。16は底径が小さく、厚手である。18～22は外反気味に立ち上がる口縁部を持ち、端部を小さくつまみ上げる。内面の調整はすべて先に底部に不定方向のナデを施し、その後口縁から体部と底部の境目にかけてヨコナデを施している。ヨコナデの内側端が凹圏線状にへこみ、不定方向ナデとの境はやや盛り上がる。20・22は型押し成形時の指頭圧痕を明瞭に残す。18・19・21は体部外面をヘラ先で掻き取るように調整している。26は外面口縁部ココナデ、底部に指頭圧痕を残し、内面は斜め上になで上げる。23～25はロクロ成形の中世土師器である。24・25の口縁端部は面取りされ、底部は手持ちヘラケズリを施す。25は富山城下町出土のロクロ成形土師器やそれを模倣した越中瀬戸素焼き皿に口縁部の形態が似る。底部は本遺跡のものの方が薄手である。27は中世土師器の皿底部で外面に「そヵ」の墨書がある。28は古瀬戸灰釉の平椀である。外面露胎部分に煤が付着している。29は瓦質土器の把手と思われる。30は鉛玉である。直径1.0㎝、重量6.70ｇで、2匁弱となる。31は黒色の粘板岩の扁平な小石で、碁石として使用したものと考えられる。32は板状の滑石で、1面は平滑に加工しており、もう片面は剥離している。温石であろう。33は宝篋印塔の頂部である。連弁がなく台形の請花で、側面から底にかけて刻みが各面に2～4ヶ入っている。下端の丸い破断面は柱輪との結合部分である。34はウマの橈骨である。

35・36はⅢ層下位から出土した遺物で、非ロクロ成形の中世土師器である。35は厚手の器壁で、雑な手づくねである。36は丸底に近い底部から斜め上に体部が立ち上がり、外面口縁部にヨコナデ、それより下位に手持ちヘラケズリを施す。

西側護岸中　37・39～41は非ロクロ成形の中世土師器である。37・39・40は口縁部が強く外反し、端部を小さく摘み上げる。40は1段ナデの下部をヘラで掻き取ったあとがある。39・40は型押し成形痕が残る。38は瀬戸美濃の天目茶碗である。黒色の鉄釉が掛かる。16世紀前半に属する。42は擂である。厚さ1.5～2.5㎝である。スサの痕跡が多く残る。

西側護岸下　43～47は非ロクロ成形の中世土師器である。43～45は全体に内湾して立ちあがり、口縁部がやや肥厚する。46は口縁端部が外反し、先は小さくつまみ上げる。口縁部内外面に漆が付着しており、底部は焼成後に穿孔されている。内面のヨコナデと不定方向ナデとの境に小さく盛り上がる凸圏線が形成される。外面は口縁部の1段ナデより下に型押し成形の痕跡が残る。47は口縁部内面がやや肥厚し外反する。端部はつまみ上げる。外面は1段ナデで、それより下位はヘラで調整した後かるくなでている。内面は底部付近までヨコナデ、底部は不定方向ナデを施す。48は珠洲の甕である。吉岡編年のⅤ期にあたる。49は越前の擂り鉢である。口縁端部内面に1条の沈線が入る。卸し目は11

目1単位である。二次的に被熱している。16世紀前半に属する。

東側Ⅲ層　50～53はⅢ層上位から出土した遺物である。50は珠洲の片口鉢である。卸目は幅が狭く鋭い。吉岡編年のⅡ$_2$期と考えられる。51は越中瀬戸の灰釉丸皿である。内面に釉止めの段がある。釉薬は暗緑色であるが、透明感があり、山下窯の製品と考えられる。52は非ロクロ成形の中世土師器で、口縁部外面の指頭圧痕によって端部のすぐ下がへこむ。53は越前の擂鉢で、二次的に被熱しており、割れ口の一部にも煤が付着する。

54～63はⅢ層中位から出土した遺物である。54～58は非ロクロ成形の中世土師器である。56は器面が所々剥離しており、剥離面にも油煙が付着している。57の内面調整は底部から口縁に向けて斜めになで上げる。口縁端部が尖る。58は大きくラッパ状に口縁が開き、端部はわずかにつまみ上げる。内面のヨコナデと不定方向ナデとの境に凸圏線がめぐる。59・60はロクロ成形の中世土師器で、59は底部にヘラ削りを施し、底部と体部の境の角を落としている。15世紀後半に属するタイプである。60は回転糸切り痕を手持ちヘラ削りによって平坦に削り消している。内面の底部と体部の境は強くなでられ段をなす。61は珠洲の壺体部から底部である。底部は静止糸切りである。62は腰刀である。残存長17.9cm、残存幅2.6センチ、峰部は部分的に遺存しており、厚さ0.3cmである。刃は欠損している。右の細くなった部分は茎（なかご）である。63は永楽通寶（明銭　初鋳1408年）である。

64～72・78はⅢ層下位から出土した遺物である。64～70は非ロクロ成形の中世土師器である。64は強いナデによって口縁部が外反し体部との境に段をなす。66と67は同一個体の可能性がある。口縁部内面が外反する。69は口縁部が肥厚し、外面1段ナデより下部には指頭圧痕を残す。70は口縁部外面に強い1段ナデを施し、外反する。端部はわずかにつまみ上げる。71・72はロクロ成形土師器である。71は底部に回転糸切痕を残す。内面は底部中央付近のみ不定方向ナデを施し、他はロクロナデである。黄褐色物質と油煙が厚く付着する。72は底部の糸切痕を手持ちヘラケズリによって消している。口縁端部は小さく面取りする。金沢城兼六園（江戸町推定地）出土の非ロクロ成形の土師器に形態が類似する。17世紀第1四半期に特定されている遺物群である。78は越中瀬戸の鉄釉丸皿である。

Ⅱ層　73・74は非ロクロ成形の中世土師器で、74は内面ヨコナデと不定方向ナデ境に凸圏線を成す。

中央護岸中　75～77は非ロクロ成形中世土師器で、底部と体部の境が不明瞭なものが多い。79は珠洲の甕である。吉岡編年のⅢ期である。

中央護岸下　80は非ロクロ成形の中世土師器で、口縁部外面が強い1段ナデによって外反する。

1層　81は非ロクロ成形の中世土師器で口縁端部が肥厚し、内側に段をなす。16世紀初めに属する。82はウマの第2前臼歯である。

排土中　83は越中瀬戸鉄錆釉の擂鉢である。84は黒褐釉の近世陶器である。

地山中　85はSD01を掘り込んでいる地山を調査の最後に機械掘削したところ出土した青磁の椀である。見込みに花文が入る。13世紀龍泉窯の製品である。（安達）

②漆器　未同定の漆器については実見したまま黒色漆・赤色漆、同定済みの漆器については黒色顔料を含まないものを透明漆・赤色顔料が水銀朱と判明したものは朱漆と標記する。なお、塗膜分析を行った漆器（89・94・96・99・100・101・103・108・112・114）の下地は全て炭粉渋下地、樹種同定を行った漆器（86・87・89～114）の樹種は全てブナ科ブナ属である。

86～89は内外面とも黒色漆塗りの小皿である。86は内面に赤色漆で植物系の文様が描かれている。口縁部はやや外側に立ち上がる。87は内面に赤色漆で三ツ葉桔梗の文様が描かれている。88・89は三つ組みの小皿で内面に赤色漆で松の文様が描かれている。口縁部は体部に比べやや内湾気味に立ち上がる。90は透明漆塗りの小皿で内面に赤色漆で松の文様が描かれている。88・90と組になる。91・92は内外面とも赤色漆塗りの皿と椀で、高台内面のみ中塗り黒色漆のまま残されている。高台内面に赤

色漆で三ツ星文が描かれている。92の口縁部端はやや丸みを帯び、口縁部には火熱を受けた跡が見られる。1箇所孔（径0.2cm）が開けられており椀以外の用途に転用された可能性がある。高台内面にロクロ爪跡が確認できる。93は黒色漆塗りの椀で、内面に赤色漆で三つ月の文様が描かれている。高台内面にロクロ爪跡が確認できる。Ⅱ層（護岸中）から出土している。94は内外面とも透明漆塗りの椀で、内面に朱漆で鶴丸文が描かれている。95は内外面とも黒色漆塗りの椀で、内面に赤色漆で僊と植物の文様が描かれている。外面に文様が描かれているが詳細は不明で、やや低めの高台を持つ。96は内外面とも透明漆塗りの椀で、内面に朱漆で植物系の文様が描かれている。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり口縁端は丸みを帯びる。97は内外面とも黒色漆塗りの椀で、内面に赤色漆で鶴亀と松の文様が描かれている。体部から口縁部にかけて垂直気味に立ち上がる。口縁端は丸みを帯びる。三つ組みの二の椀である。Ⅱ層（人為埋土）から出土している。98は内外面とも黒色漆塗りの椀で、内面に赤色漆で僊の文様が描かれている。やや低めの高台をもつ。外反気味に立ちあがる器壁は厚み0.3cmでやや薄い。99は内外面とも透明漆塗りの椀で、内外面に朱漆で僊の文様が描かれている。体部から口縁部にかけてやや内湾気味に上がる。100は外面が透明漆塗り、内面が朱漆塗りの椀である。外面に朱漆で文様が描かれているが詳細は不明で、体部から口縁部にかけて器壁が薄くなり、口縁部は垂直気味に立ち上がる。101は内外面とも透明漆塗りの椀で、内面に引掻（針描）技法を用いて蝶子牡丹と扇の文様が朱漆で描かれている。外面に朱漆の痕跡が見られるが詳細は不明で、底部から体部にかけてほぼ同様の器壁を持つ。口縁部は外反気味に立ち上がる。2箇所孔（径0.2cm）が開けられ、椀以外の用途に転用された可能性がある。102は内外面とも黒色漆塗りの椀で、内面に赤色漆で扇と房と飾りが描かれた珍しいものである。外面にも扇の文様が描かれている。高台はやや外側にふんばる。口縁部は外反気味に立ち上がる。103は内外面とも透明漆塗りの椀で、内外面に朱漆で扇の文様が描かれている。口縁端は外側に反り丸みを帯びる。高台は外側にふんばる。104は内外面とも黒色漆塗りの椀で、内面に赤色漆で山のような文様と簡略化された鶴丸文が描かれている。口縁部端はやや丸みを帯びる。高台内面にロクロ爪跡が確認できる。105は内外面とも黒色漆塗りの椀で、内面に赤色漆で鶴亀と松の文様が描かれている。外面に文様が確認できるが詳細は不明。Ⅱ層（護岸中）から出土している。106は内外面とも黒色漆塗りの椀で、内面に赤色漆で僊の文様が描かれている。高台内面にはロクロ爪跡が確認できる。107は内外面とも黒色漆塗りの椀で、内外面に赤色漆で鶴丸文が描かれている。また高台内面に赤色漆が一部施されている。口縁端は丸い。高台は高めで外側にふんばる。108は内外面とも透明漆塗りの椀で、内面に朱漆で鶴丸文が描かれている。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。高めの高台を持つ。109は外面が透明漆塗り、内面が朱漆塗りの椀である。高めの高台を持ち底厚は厚い。110は内外面とも透明漆塗りの椀で、朱漆で僊の文様が描かれている。高い高台を持ち体部はやや突出して垂直気味に立ち上がる。111は内外面とも黒色漆塗りの椀で、内面に赤色漆で扇の文様が描かれている。底厚は厚い。高台内面にはロクロ爪跡が確認できる。112は内外面とも透明漆塗りの椀で、内面に朱漆で菊花文が描かれた希少な漆器である。高い高台を持ち底部に比べ体部の器壁が薄くなる。口縁部は垂直に立ち上がる。体部に2箇所孔（径0.2・0.5cm）が開けられており椀以外の用途に転用された可能性がある。113は内外面とも黒色漆塗りの椀で、内面に赤色漆で僊の文様が描かれている。高い高台はやや外側にふんばる。底部に比べて体部の器壁が薄い。体部から口縁部にかけて垂直気味に立ち上がり、口縁端は丸みを帯びる。114は内外面とも透明漆塗りの椀で、内外面に朱漆で文様が施されているが詳細は不明である。口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。高い高台はやや外側にふんばる。

③その他の木製品　115は板状木製品で材はヒノキ科アスナロ属である。本来は底板などの部材と考えられる。下方に「中」の墨書が確認できる。116は木簡である。下部が欠損している。上部に切り

込みが入る。文字は釈読不能である。117・118は不明木製品である。何かの部材か。上部に切り込みが入る。117はⅢ層から出土している。118の材はヒノキ科アスナロ属で頂部に凹みと底面にほぞ状の加工がある。119は板状木製品で材はヒノキ科アスナロ属である。上と下に反対方向の切り込みがみられる。祭祀用道具の可能性もある。120は箆で材はヒノキ科アスナロ属である。包丁痕が見られる。両側護岸下から出土している。121・122は角切折敷の側板である。121は四箇所に木釘が依存している。材はヒノキ科アスナロ属である。122は3箇所に刻み目が、底板をはめる釘跡が確認できる。123は曲物の蓋である。持ち手を付けるための孔（径0.2～0.5cm）が確認できる。両面に焦げ跡が確認できる。124・126は連歯下駄破片である。124の後緒穴は後歯の後方にある。後緒穴径は1.3cmを測り、大人用の下駄だと考えられる。126の後緒穴は後歯の前方にある。材はウコギ科ウコギ属コシアブラである。125は子供用の連歯下駄で材はヒノキ科アスナロ属である。後緒穴は後歯の前方にあり、平面形は小判型である。長さ11.4cmを測る。後方に見られる格子状の刻みは滑り留めかまじないに関係するものと考えられる。127・128は箸状木製品である。両端が削られており、断面形は長方形である。127はⅢ層（上位）から出土している。箸状木製品は、特に岸付近から密集するかたちで出土した。129・130・131・132は曲物である。129は内側に漆が薄く付着しており、漆を入れるための容器として使用していた可能性がある。上方に帯がまわる。下方に底板と止める穴が確認できる。材はヒノキ科アスナロ属である。130は内側に曲げるための加工の後が確認できる。綴じ部分は2重になる。材はヒノキ科アスナロ属である。131は径4.3cmの非常に小型の曲物で、材はヒノキ科アスナロ属である。外側に墨痕が確認できるが釈読不能である。132は径9.1cmでやや小径な曲物で材はヒノキ科アスナロ属である。底板が着いた状態で出土した。133は柄杓で材はヒノキ科アスナロ属である。持ち柄が抜かれた状態で出土した。側板は柄を通す部分が3重になる。134は断面形が楕円形を呈し、長刀の柄の一部とみられる。漆が塗られた布が巻かれている。材はイネ科タケ亜科である。135は糸巻きで材はヒノキ科アスナロ属である。他に組になる部材は出土していない。136はむしろ織機の筬（をさ）で材はブナ科クリ属クリである。Ⅲ層（上位）から出土している。民俗例では江戸後期頃からの普及と言われているが、本遺跡ではそれ以前より使われていた可能性がある。137は機織機の緯打ちで、材はマツ科マツ属である。138・139は紡錘車である。138は芯棒が刺さった状態で出土した。139の材はヒノキ科アスナロ属である。140は機織機の上方部に組まれるクルリと呼ばれる部材で材はスギ科スギ属である。足で引いて回転させ経糸を交差させるための部材である。中央（2.2×2.0cm）と両端（3.0×2.0cm）3ヶ所に臍穴がある。Ⅲ層（上位）から出土した。（稲垣）

【H17東区】（第25～27図、写真図版12・13）

新期SD01（Ⅲ層） 141は須恵器有台杯の低部である。外底面にはヘラ切り痕が残る。142～151は中世土師器である。146はロクロ成形の皿であり、柑状高台をもつ。底部には回転糸切痕が残る。142～145・147～151は非ロクロ成形の皿である。142は口径6cmと小さいが、概ね9cm前後、12cm前後、15cm前後の三法量に分かれる。143・147・148には油煙が付着している。15世紀後半～16世紀代と考えられる。152～158は珠洲である。152・153は甕の口縁部破片である。154は壺の底部である。155～158は片口鉢である。古岡編年Ⅴ～Ⅵ期（14世紀後半～15世紀中頃）と考えられる。159～168は越中瀬戸である。159は小壺で、底部に回転糸切り痕がみられる。160は椀で、内外面鉄釉が施されるが、底部は露胎のままである。161は片口鉢である。162～164は皿である。162は灰釉が施されるが、内外底面は無釉である。底部に「念」と墨書されている[1]。163は見込みに印花が押捺される。164は灰釉が施される。165は向付であり、鉄釉が施されているが、内外底面は無釉である。166は鉄釉の椀であ

[1] 秋鹿にあたり、富山市郷土博物館の浦畑奈津子氏よりご教示いただいた。

る。167は小杯で、鉄釉が施されているが、外底面は無釉である。168は大皿である。169・170は唐津である。169は胴部が屈曲する皿である。170は鉢である。いずれも見込みに白土を掛けて刷毛による縞状文様を施す。17世紀中頃～18世紀後半代と考えられる。171・172は青磁である。171は皿で、底面は露胎である。172は椀で、内面に蓮弁文を施している。173は磁器の椀であり、伊万里と考えられる。174・175は十錘である。共に楕型である。174は長さ55.1mm、幅32.8mm、孔径9.5mm、重量48ｇである。175は長さ51.7mm、幅41.8mm、孔径17.6mm、重量95ｇである。176～182は漆器で材は全てブナ科ブナ属である。椀と皿がある。全て内外面黒色漆塗りで、赤色漆で文様が描かれている。176は椀で、底径6.9cm、高台高0.5cm、内面には鶴と植物文が描かれる。胴部上半を欠損しているが、薄手の底部から内湾しながら立ち上がる。外底面に一本の線刻がある。177は椀で、口径14.0cm、底径6.5cm、器高6.9cm、高台高0.6cm、内外面に松と思われる植物文が描かれる。高台脇からやや内湾し、口縁部に向かって開き気味に立ち上がる。178は椀で、底径7.9cm、高台高2.3cm、内外面に鶴丸文が描かれる。高台脇から丸みをもって立ち上がる。外底面に三本の線刻がある。179は椀で、底径８cm、高台高2.3cm、やや高い高台から腰部で内湾し、胴部から直線的に立ち上がる。180は椀で、底径6.4cm、高台高0.6cm、内面見込み部分に鶴丸文が描かれる。181は椀で、底径6.8cm、高台高0.8cm、内外面に植物文が描かれる。182は皿で、底径5.6cm、高台高0.5cm、内面に文様が描かれ、外底面には「×」状の線刻がある。183・184は下駄で材はいずれもスギである。二点とも後歯がよく磨耗している。近接して出土し、大きさもほぼ同じであることから一対のものと考えられる。185・186は曲物の側板と底板で、材はいずれもヒノキ科アスナロ属である。同一個体で、潰れた状態で出土した。187・188は用途不明の板状木製品である。187は表面裏面が四方とも面取りされる。左寄りに四つの孔が穿たれており、三ヶ所に木釘が残っている。材はスギである。188は上部に一ヶ所孔が穿たれている。材はヒノキ科アスナロ属である。189～191はたも網の枠木である。材はいずれもカヤである。枝を湾曲させ、先端は鋭く加工され、えぐり込みがみられる。192はタケを組んだ箕と考えられる。幅約10mmの縦芯と幅約２mmの横芯により組まれている。193は鉄製の鋤先である。U字形を呈し、木柄を固定するための溝が内側にみられる。194は加工痕のある礫である。面取りした側面には整でつった跡、溝、孔などがみられる。195はヒトの歯である。右下顎第一大臼歯で、分析によるとエナメル質の咬耗度合いから20～39歳程度のヒトのものと推測される。

古期SD01（Ⅱ層） 196～199は中世土師器である。198はロクロ成形、196・197・199は非ロクロ成形の土師皿である。196は口縁部に油煙が付着している。197・199は一段のナデによって口縁部をやや外反させ、端部をわずかにつまみあげている。198は口縁端部を面取りしている。いずれも15世紀中頃～16世紀代のものと考えられる。200は珠洲甕の口縁部破片である。時期は古岡編年Ⅳ２～Ⅴ期（14世紀中頃～15世紀前半代）と考えられる。201は陶片加工円盤で、珠洲の甕体部を加工したものである。202は漆椀である。底径8.1cm、高台高2.4cm、内外面黒色漆塗りで、赤色漆で文様が描かれている。高台脇から開き気味に立ち上がる形態である。樹種はブナ科ブナ属である。203は下駄である。指圧痕から左足用と考えられる。後歯の磨耗が顕著である。

古期SD01（Ⅰ層） 204・205は空風輪である。地山直上の自然堆積土から２点近接して出土した。側面がやや扁平な形状を呈する。（久保）

SD02（第28図、図版14） 206は唐津の椀である。18～19世紀頃のものと考えられる。外面は黒褐色鉄釉、内面は緑灰白色の釉を掛ける。底径は4.5cmを測る。207は越中瀬戸で、削りだし高台の灰釉丸皿である。外側にナデ痕が残る。器径10.8cm、底径5.3cm、器高2.5cmを測る。

SD04（第28図、図版14） 208は珠洲で甕の口縁部である。くの字口端を持つ。209・210は越中瀬戸で、削りだし高台の丸皿である。外側にはロクロ削りの痕跡が残る。底径5.0cmを測る。210は削りだ

し高台の灰釉丸皿である。底径5.3cmを測る。211は唐津で削り出し高台を有する丸皿である。内側には蛇ノ目釉ハギの跡が見られる。17世紀後半～18世紀代のものと考えられる。器径13.7cm、底径4.8cm、器高4.6cmを測る。212は越中瀬戸の椀である。器径9.3cm、器高6.6cm、底径4.8cmを測る。18世紀頃のものと考えられる。213は越中瀬戸の甕である。全体に鉄サビ釉が施されている。器径9.1cmを測る。214は肥前で焼かれた青磁で、削りだし高台の丸皿である。内面には蛇ノ目釉ハギの跡が見られる。底径4.0cmを測る。

SD06

【H16区】（第28図、図版14） 215は珠洲で甕の口端部である。くの字口端を持つ。216は珠洲の擂鉢である。厚みは1.1cmを測る。217は非ロクロ成形の中世土師器である。体部から口縁部にかけて均一の厚みで直線的に外反し先はやや尖る。口縁部外側にススが付着している。16世紀後半のものと考えられる。218は青磁碗の高台部である。底径5.3cmを測る。219は土錘である。孔内に同転痕が確認できる。表面指頭圧痕が多い。6.2×4.3×4.0cm、重量は90.0ｇを測る。220は内外面とも黒色漆塗りの椀で、材はトチノキ科トチノキ属である。内面に赤色漆で鶴丸文が描かれている。外面に文様が確認できるが詳細は不明で、16世紀中葉頃と思われる。下地は未同定。221は内外面とも黒色漆塗りの漆器で、材はブナ科ブナ属である。形状から筒状の製品と考えられる。下地は未同定で、外面に赤色漆で植物系の文様が描かれている。223は曲物の底板で、材はイスノキ科イスノキ属である。片面に包丁痕が見られる。222はスキ櫛である。漆は塗られていない。224は鉛玉である。径1.1cm、重量7.4ｇを測る。（稲垣）

【H17西区】（第28・29図、図版14・15） 225～241は中世土師器である。全て非ロクロ成形の皿である。口径９cm前後の小型品、12cm前後の中型品、15cm前後の大型品に分けられる。225には油煙が付着し、灯明皿として使用されていたとみられる。口縁部は直線的に開くもの（225～228）、短く外反するもの（233・234・237・238）、端部をつまみあげるもの（229～232・235・236）などがある。15世紀後半～16世紀代と考えられる。242～247は珠洲である。242・243は甕の口縁部破片である。242は吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期（12世紀後半～13世紀前半代）と考えられる。243は推定口径38cmの中甕で、吉岡編年Ⅴ期（14世紀末～15世紀前半代）と考えられる。244は壺の口縁部破片である。吉岡編年Ⅳ１期（13世紀後半～14世紀初頭）と考えられる。245・246は片口鉢である。245は推定口径30.8cmで面取した口縁に櫛目波状文が施される。両者とも吉岡編年Ⅴ～Ⅵ期（14世紀後半～15世紀前半代）と考えられる。247は陶片加工円盤で、甕の体部破片を加工したものと考えられる。248・249は古瀬戸である。248は折縁小皿である。口径は12cmで、ツケガケにより灰釉が施されている。249は天目茶椀である。口径は13cmで、鉄釉が施されている。古瀬戸後期の15世紀代と考えられる。250～253は越中瀬戸である。250は丸皿で、口径11cm、内面上半部に灰釉が施される。251は丸椀で、口径14cm、内面および外面上部には鉄釉が、外面下部の高台付近には錆釉が施される。252は擂鉢で、口径28cmである。16世紀末とみられる。253は鉄釉双耳壺である。口径は6.6cmと小型である。釉は均一ではなく、一部器面が露呈している。254・255は青磁椀である。254は底径5.6cm、高台低部は露胎のままである。255は底径5.6cmで高台の内側は露胎のままである。両者とも内面見込み部分に化文が施されている。256～259は漆椀で、材はすべてブナ科ブナ属である。256は底径7.2cm、高台高2.4cm、内外面黒色漆塗りである。内外面に赤色漆で漆絵が描かれるが、剥落により文様は不明である。257は口径14.4cm、底径6.4cm、器高6.8cm、高台高1.0cm、内外面黒色漆塗りで、内面に赤色漆で鶴丸文が描かれる。体部はやや内湾し開き気味に立ち上がる。外底面に二本の線刻がみられる。258は高台部のみである。底径8.2cm、高台高2.8cm、内面赤色漆、外面黒色漆塗りである。259は口径13.6cm、底径6.7cm、器高7.8cm、高台高1.1cm、内外面黒色漆塗りで、内面には赤色漆で文様が描かれる。口縁部下に直径約６mm

の孔が穿たれている。いずれも16世紀代のものと考えられる。260は下駄である。両側の後緒孔部分を欠損する。材はタカノツメである。261は木簡である。「□かる(ヒのれ)」と墨書されている。上部左側に切り込みがみられるが、上部右側及び下部は欠損により全体の形状は不明である。材はヒノキ科アスナロ属である。262は木簡と考えられるが墨書は確認できない。 ·方の端部が欠損する。材はヒノキ科アスナロ属である。263～265は箸状木製品である。265は端部を欠損している。263はヒノキ科アスナロ属、264はクロベ、265はスギである。266～268は杭状木製品である。266・268は先端に加工痕がみられる。材は全てクリである。269・270は五輪塔が陰刻された板石塔婆で、いずれも下半部を欠損している。270は水輪に「バン」が陰刻される。271は火輪である。272は水輪で、「バン」が陰刻される。273は留金具と考えられる。片側が潰れている。275は鉄滓である。274は鉛玉である。径1.2cm、重量8.35ｇである。表面はほとんど剥落している。276はシソ属果実の塊が炭化したものである。扁平な楕円形を呈し、片面は生焼け状態である。（久保）

（2）井戸出土遺物（第30・31図、図版16）

SE01 277は井戸水溜用曲物である。側面縁に底板固定用の木釘穴がある。内面に細工のための加工線が見られる。ヘギ板のような補強材は検出されていない。

SE02 278は柄杓である。持ち柄が抜かれた状態で出土した。側板は柄を通す部分が３重になる。本体径10.6cm、高さ9.7cm、底板径9.5cm、厚み0.5cmを測る。材はヒノキ科アスナロ属。

SE03 279は珠洲の擂鉢部である。厚み1.3cmを測る。

SE04 280は内外面とも黒色漆塗りの椀で内面に赤色漆で鶴丸文が描かれている。外面に文様が確認できるが詳細は不明。底径6.0cmを測る。材はブナ科ブナ属。下地は未同定。

SE05 281は箸状木製品である。断面形は楕円形で両端が尖る。

SE06 282は須恵器で高台を有する坏である。高台内側にナデによより調整を行っている。底径6.4cmを測る。283は珠洲の擂鉢部である。厚みは1.3cmを測る。284・285は非ロクロ成形の中世土師器である。284は口縁部がやや外反する。器径9.0、底径2.3、器高1.8cmを測る。285は口縁部にナデを施す。やや直線的に外反し口端部が尖る。口径は14.7cmを計る大ぶりなものである。284・285とも15世紀後半頃と考えられる。286は古瀬戸の茶壺である。器径2.7、底径3.2、器高3.3cmを測る。287・288はスキ柄である。共に井戸底から出土した。漆は塗られていない。材は287がイスノキ科イスノキ属で、288がツバキ科モッコク属である。289は木柄付の刃物である。井戸底から出土した。持ち柄は直径3.4cm、長さ10.0cm、刃の厚みは0.3cmを測る。持ち柄の材はスギ科スギ属スギである。

SE08 290は非ロクロ成形の中世土師皿である。口端部が外反する。底部に比べ体部に厚みがある。16世紀前半とみられる。291は井戸側として使用された曲物である。側面縁に底板固定用の木釘穴がある。側板に棒状木製品が差し込まれた状態で出土した。材はヒノキ科アスナロ属で、径33.0～43.0cm、高さ12.0cm、厚み1.0cmを測る。

SE09 292は珠洲で甕の体部である。外面に刻印を持つ。293は井戸の横桟で、材はヒノキ科アスナロ属である。SD01北側に依存していたと考えられる。現存状態で42.8×5.3×4.9cmを測る。（稲垣）

SE10 294・295は漆椀で、材はブナ科ブナ属である。いずれも内外面黒色漆塗りで、赤色漆で文様が描かれる。294は口径15.3cm、底径8.1cm、器高11.1cm、高台高2.6cmで、内面に倣文が描かれる。高い高台脇から内湾しながら立ち上がる形態である。外底面には「×」状の線刻がみられる。295は口径14.2cm、底径7.1cm、器高7.2cm、高台高0.8cmで、内面に鶴と植物文が描かれる。高台脇からやや開き気味に立ち上がる形態である。296は曲物の底板で、材はヒノキ科アスナロ属である。

SE11 297～301は井戸枠部材の横桟である。297・298は同一個体である。材はいずれもスギである。302は井戸枠部材で、材はスギである。303は箸状木製品で、両端部が欠損する。樹種はスギである。

306～308は井戸枠部材の側板である。材はいずれもスギである。

SE12　304は箱状木製品である。完形品で、長さ18.75cm、材はスギである。

SE14　305は箱状木製品である。完形品で、長さ23.20cm、材はヒノキ科アスナロ属である。（久保）

（3）土坑・不明遺構出土遺物（第32図、図版16）

SX01　309は土師器の高坏である。胎土は荒く小礫が目立つ。杯部内面に黒色化がみられる。310は須恵器で無台坏である。底部はヘラによる切り離しで、その後ナデにより調整を行っている。器径12.3、底径6.4、器高3.7cmを測る。311は須恵器の壺口縁部である。器径23.8cmを測る。312は非ロクロ成形の中世土師器皿である。口縁部端がややつまみ上がる。15世紀末～16世紀初め頃のものと考えられる。313は珠洲の擂鉢底部である。底径13.8cmを測る。314は越中瀬戸の壺底部である。全体に鉄サビ釉が施されている。底面には回転糸切り痕が残る。315は砥石である。表面に溝状の加工痕が見られる。316は木簡で材はヒノキ科アスナロ属である。上下とも欠損する。片面には「に」という文字が書いてある。一ヶ所、孔が確認できる。317は漆器高台である。内外面とも赤色漆塗りで、高台内面は中塗り黒色漆のまま残されている。他の出土漆器に比べ漆が丁寧に塗られており、材がニレ科ケヤキ属であることからやや高級品に位置すると思われる。孔（径0.25～0.35cm）が3箇所確認でき、加工し香炉等の蓋に転用した可能性が考えられる。器径6.4cm、器高1.3cmを測る。

SK01　318は珠洲の甕である。吉岡編年Ⅳ期で、径54.0cmを測る。体部にかけて器壁が薄くなる。

SK04　319は連歯下駄で、材はヒノキ科アスナロ属である。平面形は隅丸長方形である。後緒穴は後歯の後方にある。歯には摩耗した跡が見られる。

（4）包含層出土遺物（第32図）

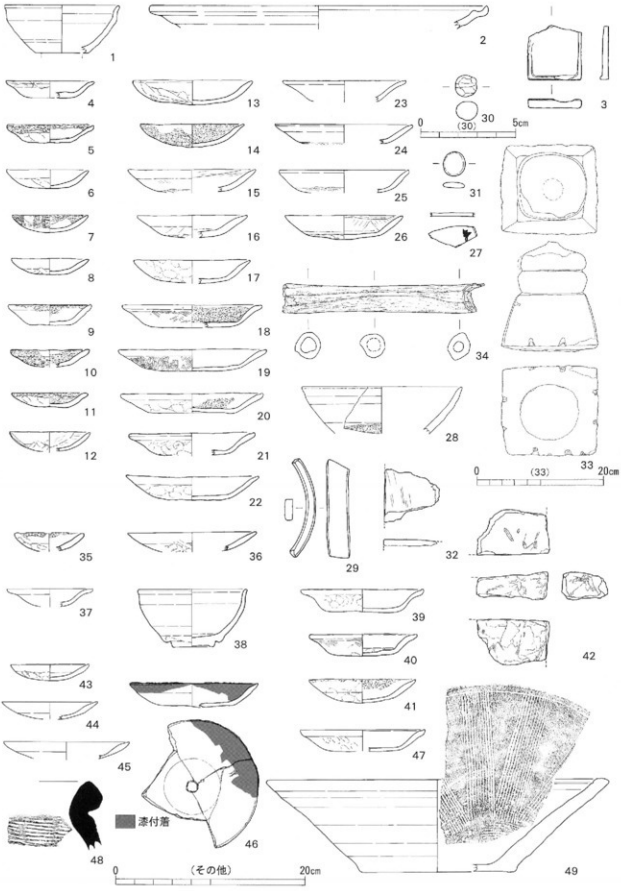
320は須恵器で高台を有する坏である。高台はやや外側にふんばる。底径9.9cmを測る。321は珠洲の片口鉢底部である。322は珠洲の甕である。くの字口縁部を持つ。323は非ロクロ成形の土師皿である。内外面が剥離し、煤が付着していることから二次的火熱を受けたと考えられる。324・325は越中瀬戸で削りだし高台を有する丸皿である。325は鉄釉と灰釉が施されている。326は越中瀬戸の壺である。内外面にロクロナデの跡が見られる。外面のみ鉄釉が施されている。327は越中瀬戸褐色鉄釉の壺である。口縁部分は垂直気味に立ち上がり端は丸みを帯びる。器径10.2cmを測る。328は越中瀬戸の小壺である。内外面に鉄釉・灰釉が施されている。329は越中瀬戸で高台を有する擂鉢である。底径12.0cmを測る。330は越中瀬戸で無台の擂鉢である。329・330とも全面に鉄サビ釉が施されている。底面には回転糸切り痕が確認できる。底径11.5cmを測る。331・332は肥前で焼かれた皿である。145は口縁部がやや外反する。共に18世紀頃のものと考えられる。（稲垣）

（5）出土種子について

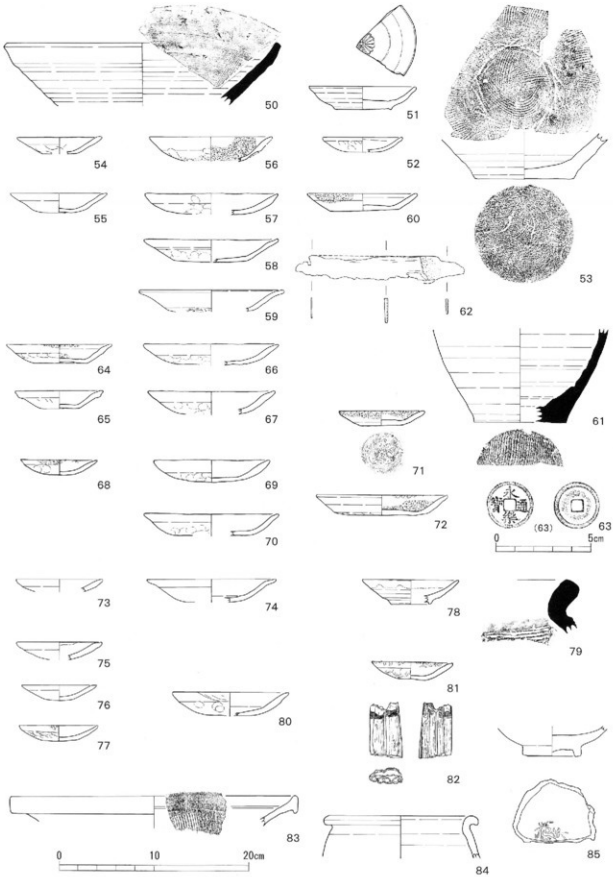
同定されたのは木本7分類群、草本5分類群の計12分類群である。栽培植物はモモ・ウメ・ウリ類・ヒョウタン類・カボチャ（？）である。また、果実や種子が利用可能なものにツバキ属・オニグルミ・トチノキ・エゴノキがある。水湿地性植物にはヒメビシがあり、溝などに生育していたと考えられる。また、オニグルミ・トチノキはやや湿った場所に生育することから溝などの周辺に生育していた可能性がある。

SD01からはモモ核、ツバキ属果実、ゴキヅル種子、ハンノキ毬果、ヒョウタン類種子、ウリ類種子、ウメ核、ヒメビシ種子、トチノキ、カボチャがある。モモ核の数は多い。SD06・SK05・SE09・SE11・SX01からもモモ核、SD02からウリ類種子、SD04から不明（ツバキ属種子か）が出土した。

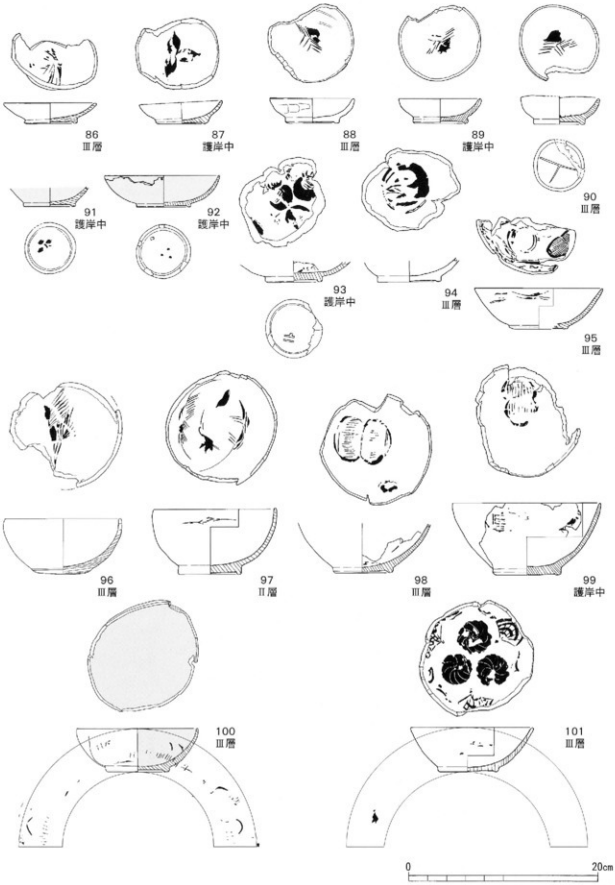
（中村・鹿島）



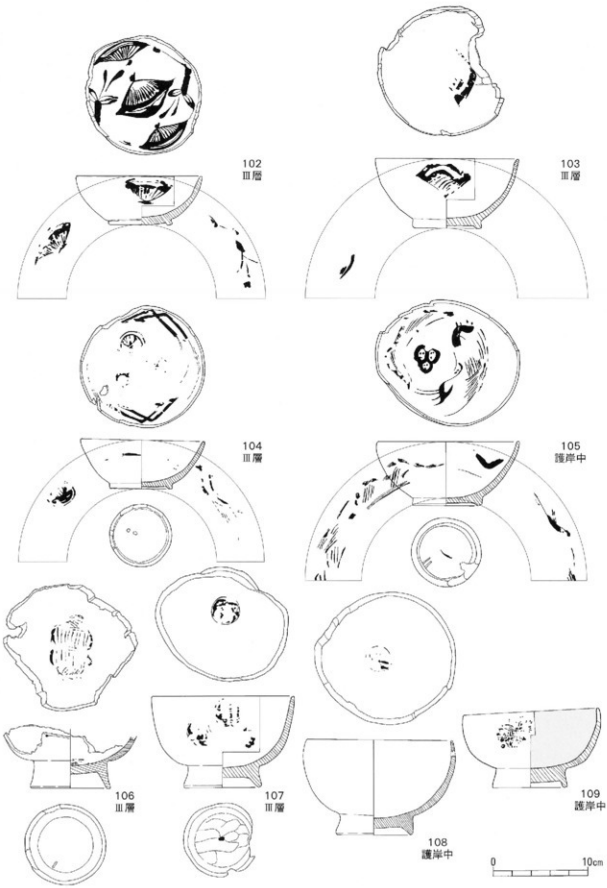
第18図　SD01（平成15・16年度調査区）出土遺物実測図（S＝1/4、30はS＝1/2、33はS＝1/6）



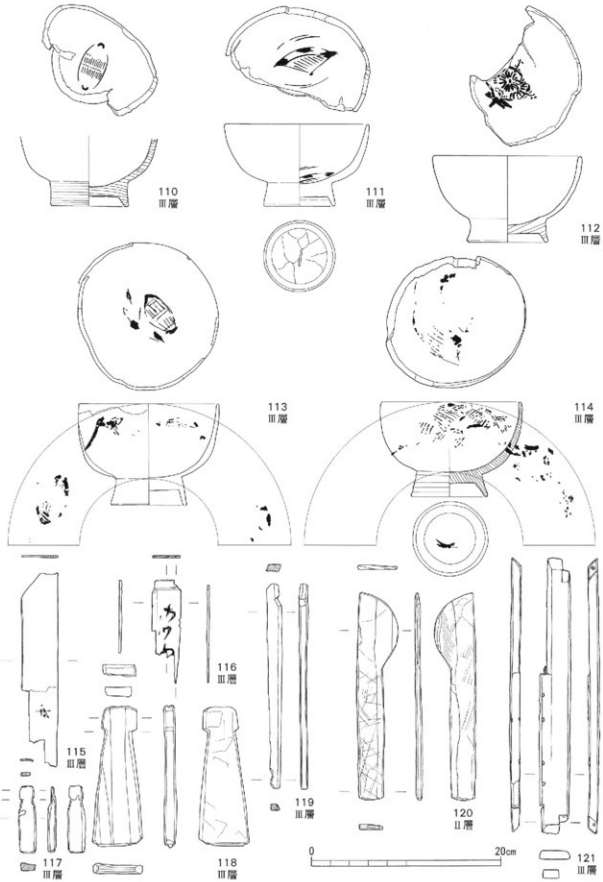
第19図　SD01（平成15・16年度調査区）出土遺物実測図（S＝1/4、63はS＝1/2）



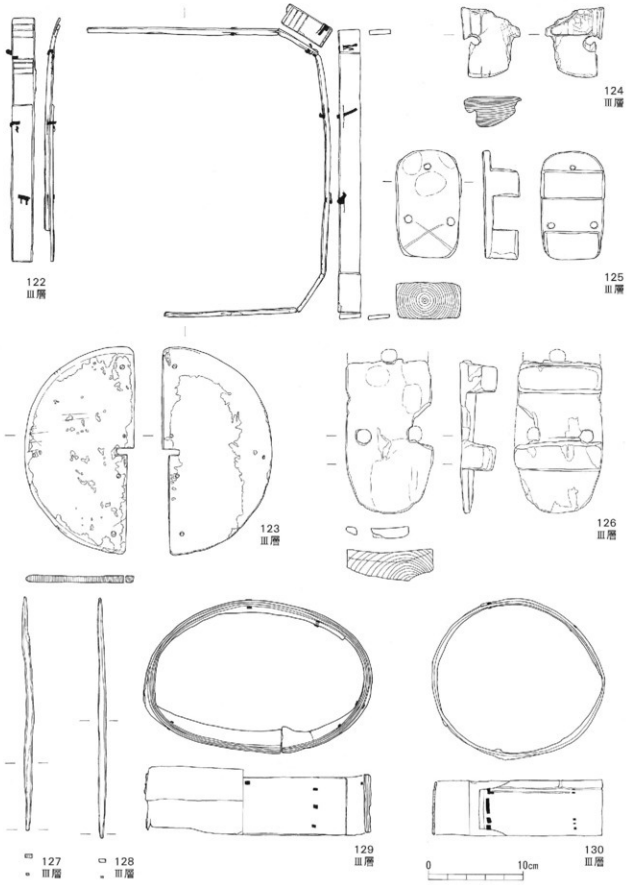
第20図　SD01（平成15・16年度調査区）出土木製品実測図（S＝1/4）



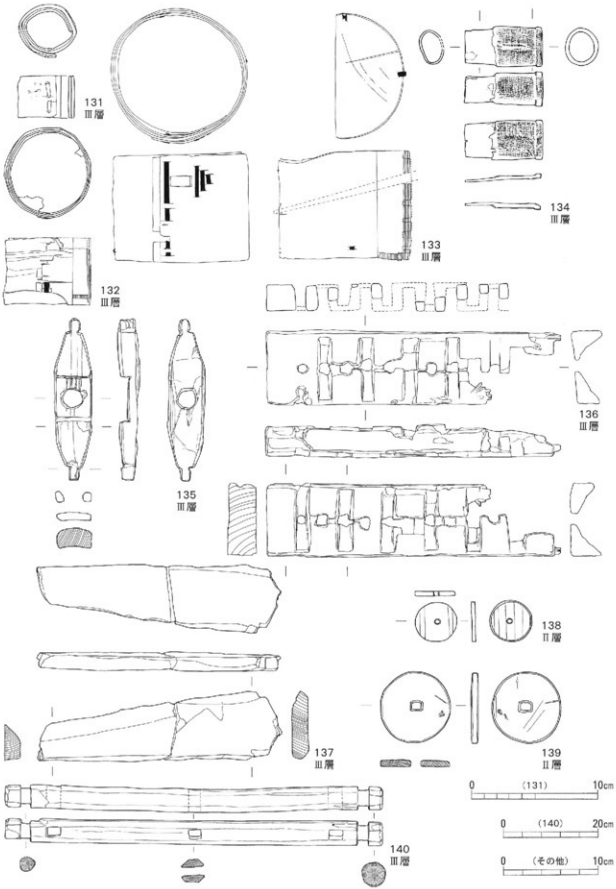
第21図　SD01（平成15・16年度調査区）出土木製品実測図（S＝1/4）



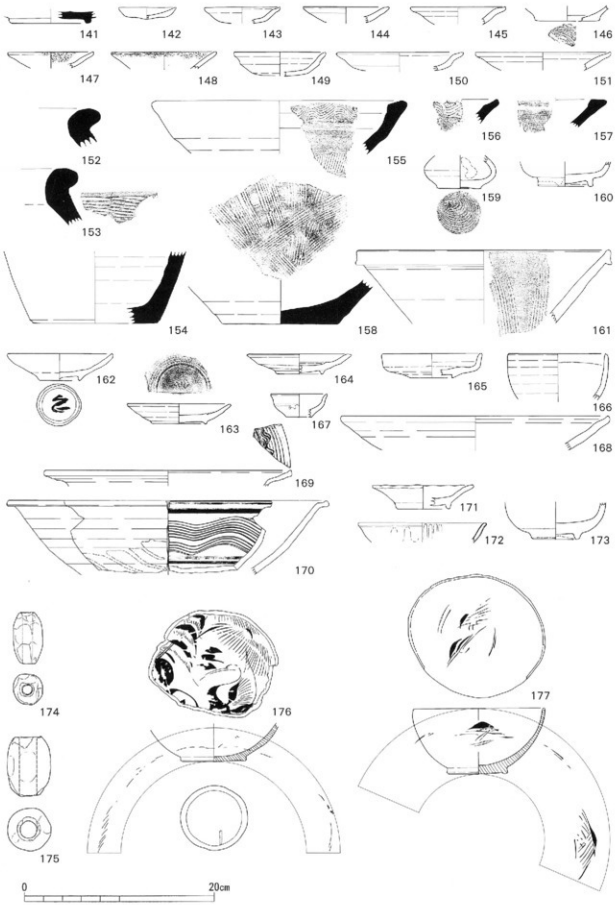
第22図　SD01（平成15・16年度調査区）出土木製品実測図（S＝1/4）



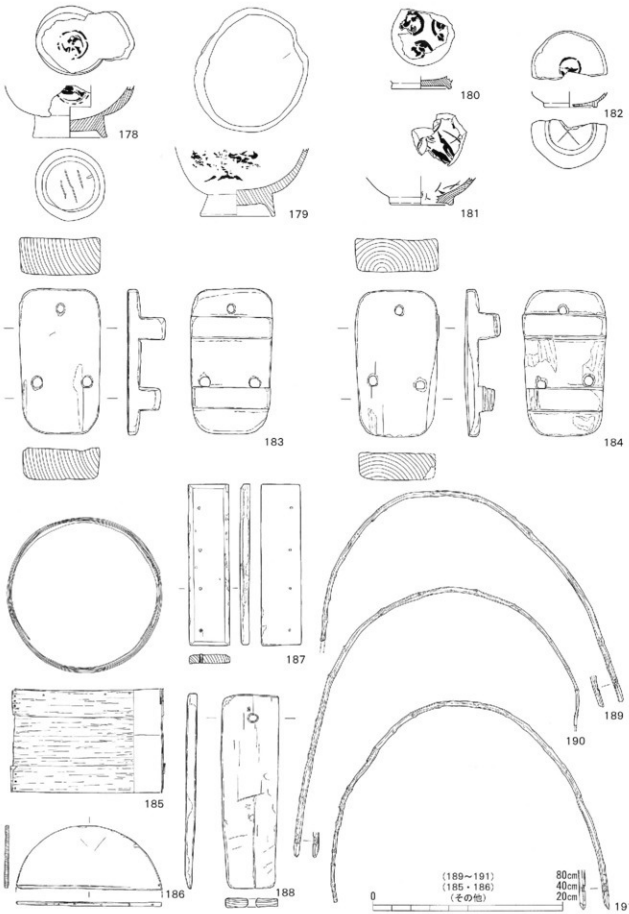
第23図　SD01（平成15・16年度調査区）出土木製品実測図（S＝1/4）



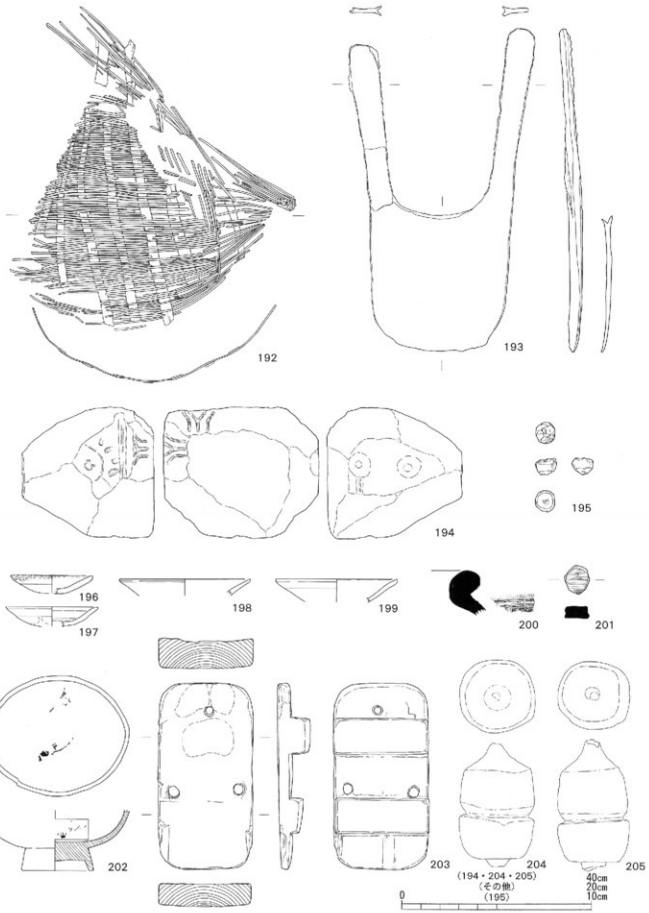
第24図　SD01（平成15・16年度調査区）出土木製品実測図（S＝1/4、131はS＝1/3、140はS＝1/8）



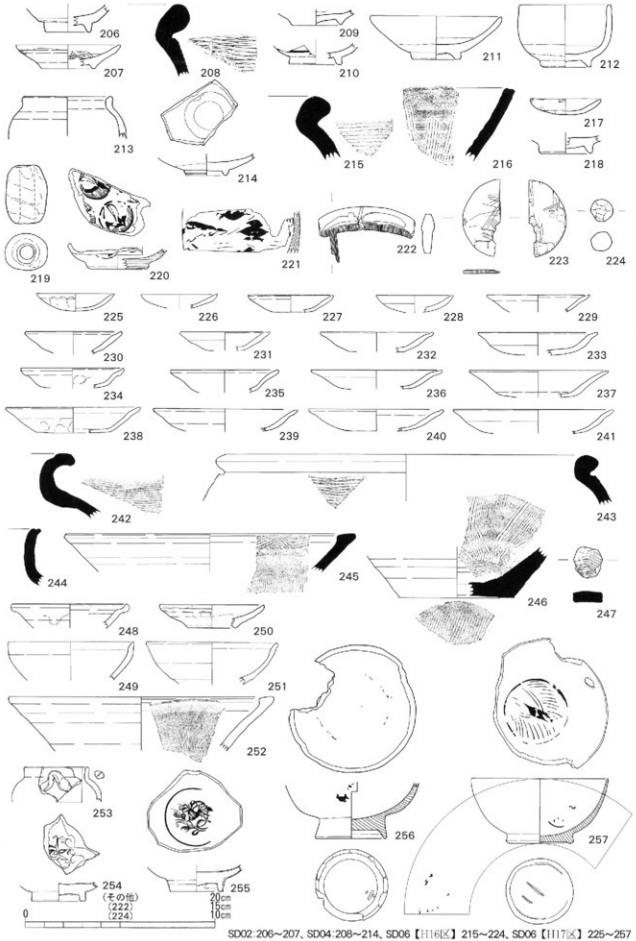
第25図　SD01（平成17年度調査区）出土遺物実測図①（S＝1/4）



第26図　SD01（平成17年度調査区）出土遺物実測図②（S＝1/4、185・186はS＝1/8、189～191はS＝1/16）

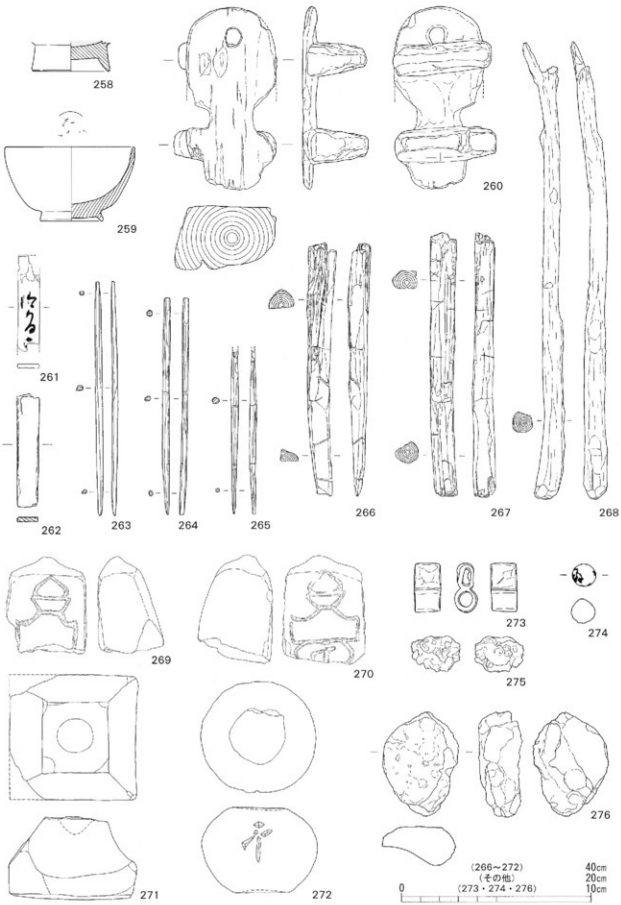


第27図　SD01（平成17年度調査区）出土遺物実測図③（S＝1/4、195はS＝1/2、194・204・205はS＝1/8）

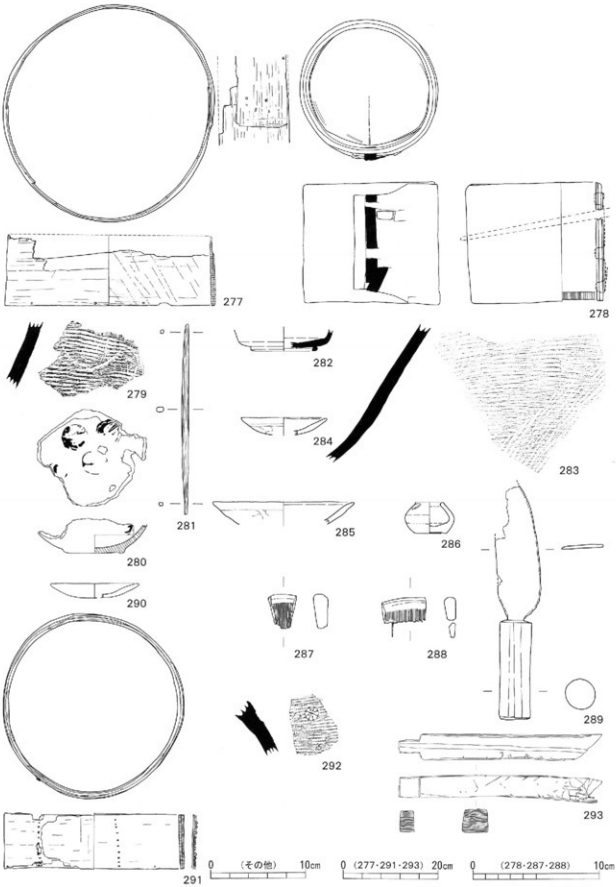


SD02:206～207、SD04:208～214、SD06【H16区】215～224、SD06【H17区】225～257

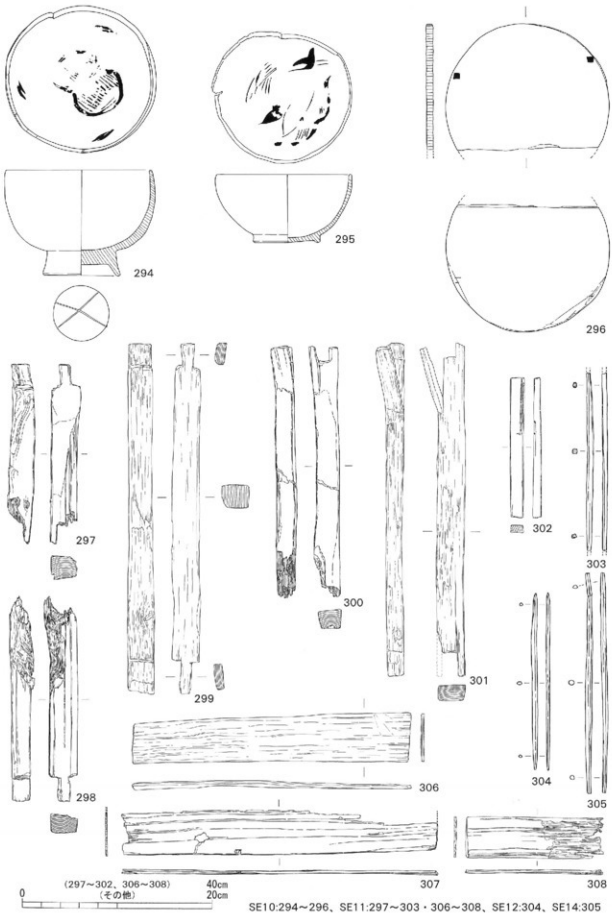
第28図　SD02・04・06出土遺物実測図（S＝1/4、222はS＝1/3、224はS＝1/2）



第29図　SD06（平成17年度調査区）出土遺物実測図（S＝1/4、273･274･276はS＝1/2、266～272はS＝1/8）

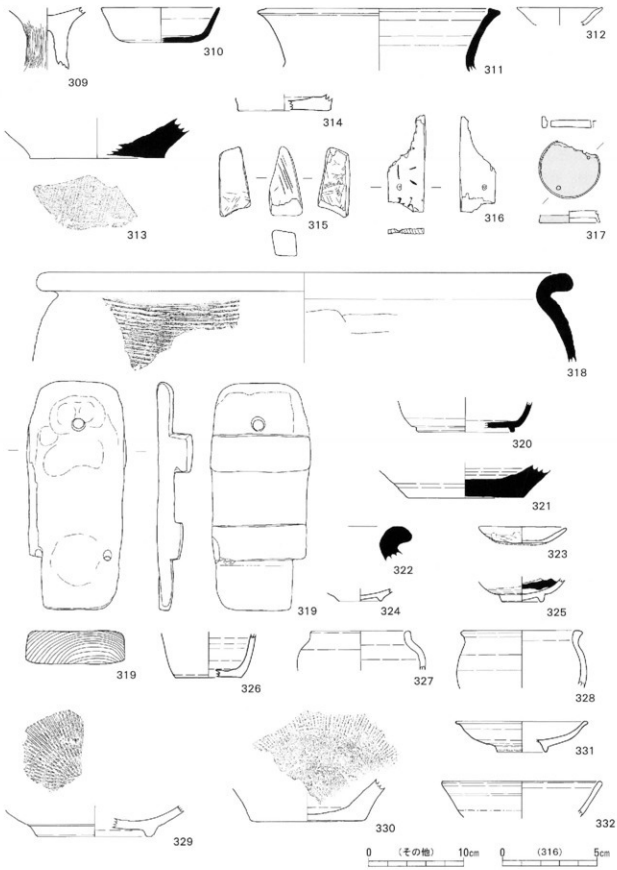


第30図　SE01～06・08・09出土遺物実測図（S＝1/4、277・291・293はS＝1/8、278・287・288はS＝1/3）



SE10:294～296、SE11:297～303・306～308、SE12:304、SE14:305

第31図　SE10～12・14出土遺物実測図（S＝1/4、297～302・306～308はS＝1/8）



第32図　SX01、SK01・04、包含層出土遺物実測図（S＝1/4、316はS＝1/2）

Ⅳ　平成14年度以前の調査の概要

ⅰ）試掘確認調査の概要

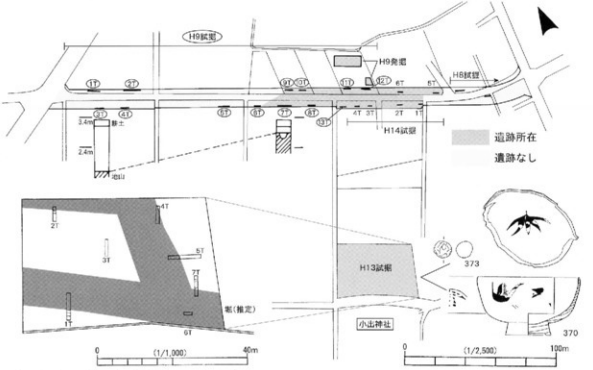
【H14区】　平成15～17年度発掘調査に先立つ試掘確認調査が平成８～９年度と平成14年度に実施された。ここでは、平成14年度に試掘確認調査を実施した際に出土した遺物を一部紹介する。

【H13区】　県道下砂子坂池田町線から南へ約100ｍに位置する水橋小出72－1外において、平成14（2002）年１月18日、資材置場造成工事を原因とする試掘確認調査［調査担当（当時）：古川知明主任学芸員、原田幸子学芸員、山崎美和嘱託学芸員］を富山市教育委員会が実施した。調査では、小出城に関連が深いとみられる堀跡が検出されたので、ここで触れておく（平成13年度試掘）。

試掘調査対象面積は1,628㎡で発掘面積は26㎡である。検出された主な遺構には中世の堀・溝がある。幅約10ｍの堀が東西方向に走り、途中で北方向に分岐する。分岐した溝の西肩は検出されていないが、４・５Ｔの覆土の状況から東西方向に延びる堀と同様の性格がうかがえる。出土した主な遺物には、縄文土器や弥生土器、中世土師器、白磁、瀬戸美濃、唐津、土製弾丸、漆器椀、箸状木製品、板状木製品、石板などがある。土製弾丸は堀底の粘土層から出土した。

ⅱ）発掘調査の概要

県道下砂子坂池田町線の北側に面した水橋小出102－1において、平成10年３月２日～31日（延べ20日間）、住宅建設に先立つ発掘調査[調査担当（当時）：鹿島昌也学芸員]が富山市教育委員会によって実施された。調査では、小出城に関連すると思われる堀の一角や多数の出土品があった溝などが検出されたので、あわせて紹介する。発掘調査面積は150㎡で、住宅建築予定箇所（Ａ区）と車庫建設予定箇所（Ｂ区）とに分けて調査を実施した。Ｂ地区は地山面まで掘り下げたところ、遺物の出土は少量あったが遺構は検出されなかった。ここでは主にＡ地区の状況について記すことにする。なお、本調査は平成９年度調査区【Ｈ９区】と呼称する。公共座標は日本測地系を用いた。　（鹿島）



第33図　平成14年度以前の調査配置図

iii）発掘調査の遺構【H９区】（第34図　図版17）

検出した遺構は上層遺構として溝３条、土坑４基、下層遺構として堀1条、溝４条がある。

（1）上層遺構　SD01～03、SK01・02等がある。SD01は、東西方向に延び、調査区北東隅では地震による地層のズレより新しく形成される。SD02はSD03より古く形成されているが、覆土中から多数の礫に混じって中世～近代の遺物が出土した。SD03はSD02よりも新しく、近代以降に形成されたとみられる。長方形を呈するSK01からは、やや大きなＹ字状の丸太材が出土した。

（2）下層遺構　SD04～08がある。SD07は幅４ｍ以上、深さ0.8ｍ以上を測り、堀の一部とみられる。SD08は南北方向に延びると大溝（堀か）の北端とみられ、覆土中から多くの礫が検出された。SD07・08は中世期の堀・溝とみられ、【H15～17区】のSD01・06と関連があると推測される。　（鹿島）

iv）発掘調査・試掘確認調査の遺物（第35・36図　図版18）

【H９区】発掘調査

SD01　333は唐津の三島手櫛描毛目の皿である。334～340は越中瀬戸である。334・335は鉄釉のげんこつ椀である。334は褐色釉、335は黒褐釉で、白色の釉が水玉状に付着する。336は黒褐色鉄釉の椀である。釉切れをおこしている。337は褐色鉄釉小皿で底部は回転糸切り痕を残す。338は褐色鉄釉の壺である。339は鉄錆釉の卸皿である。卸し金を模した形態である。340は内面に返りのある小皿で灯明皿である。341・342は砥石である。341は両側面に刃物を立てて研いだ跡がある。343は銅製と思われるかんざしである。364は寛永通寶（古寛永1636～1659年）である。

SD02　344は珠洲の甕である。吉岡編年のⅢ期である。345～348は越中瀬戸である。345は黒褐色鉄釉網目文の椀である。346は褐色鉄釉の耳付壺である。347・348は鉄錆釉の擂鉢。349は口縁部がひだ状の近世陶器である。350は伊万里の染付け皿である。見込みに五弁花のコンニャク印判が入る。外面底部には裏銘が入る。365は踏鉄である。左右の溝に３ヶずつ釘穴が並ぶ。

SD03　351・352は越中瀬戸の小皿である。351は素焼きだが、汚れのように部分的に褐色鉄釉が付着する。352は内面全体に褐色鉄釉が掛かり、重ね焼き痕跡がある。353は土錘である。長さ５㎝、推定直径４㎝である。366は木杓子である。表面に黒色漆が塗ってある。

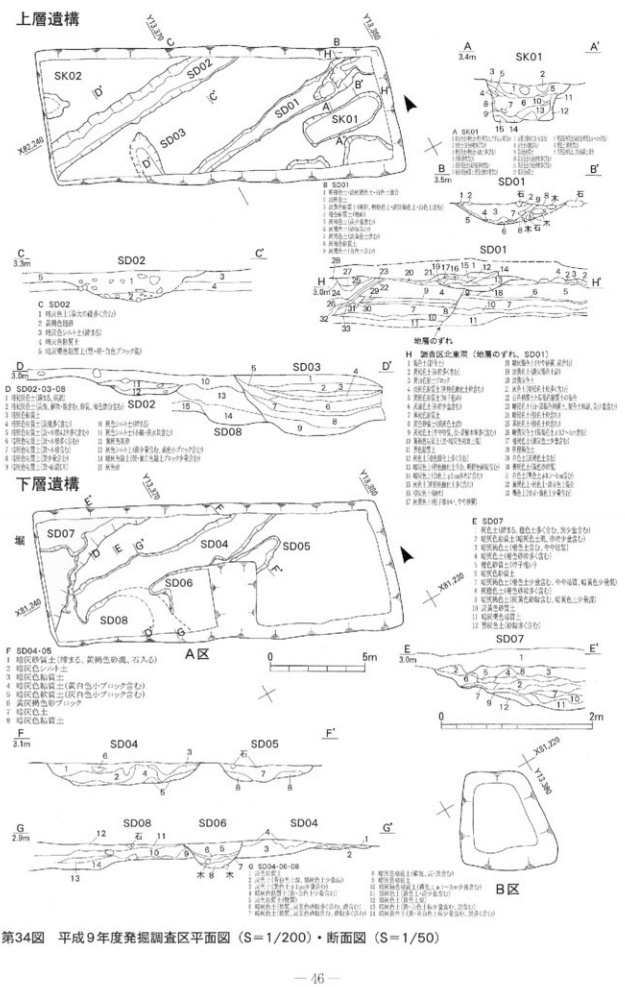
SD08　354は非ロクロの中世土師器である。355は珠洲の片口鉢で、吉岡編年のⅤ～Ⅵ期である。

SK02　356～358は越中瀬戸である。356は黒色鉄釉の椀である。高台は内面のみ削り込んでいる。357はにぶい褐色鉄釉の灯火具である。358は注口のある鉄錆釉擂鉢である。

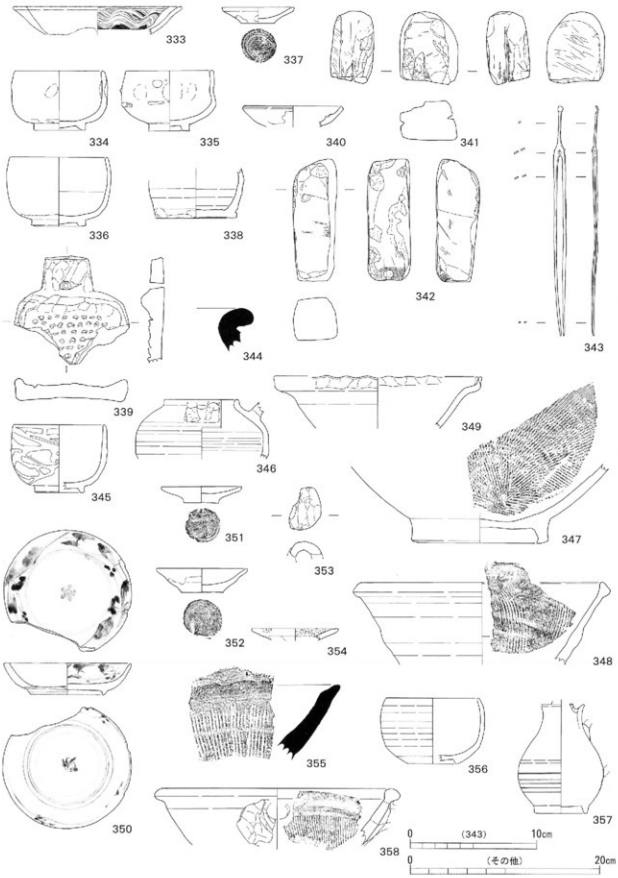
A区包含層　359は青磁の皿である。360は越中瀬戸の丸皿で菊の印花文が入る。透明感のある暗緑色の灰釉が掛かり、付け高台である。361は12世紀の白磁の壺底部である。362は珠洲の陶製円盤である。周囲を打ち欠いている。363は皇宋元寶（北宋　初鋳1101年）。367は箱の側板と思われる。「ユリカマノハコ」の墨書がある。両側に２ヶずつ木釘が残る。369はA区排土から出土した漆器蓋である。内外面黒色漆でつまみ内部に赤色漆で「せ」の文字が書かれる。つまみ部分は欠損している。

【H13区】試掘確認調査　370は漆椀である。内外面黒色漆塗りで、赤色漆で笹文などが描かれる。373は土製弾丸である。直径2.3㎝、重量8.35ｇを測る。

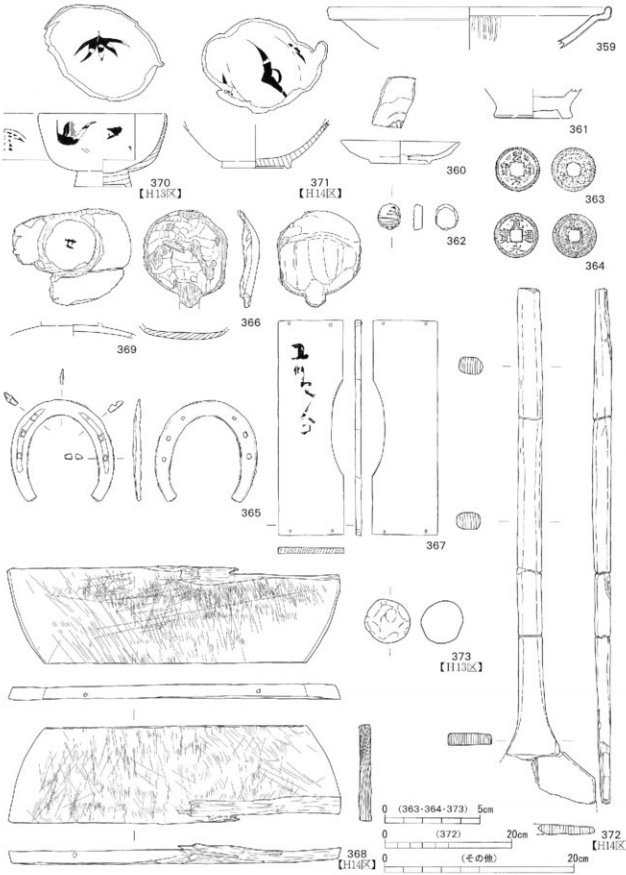
【H14区】試掘確認調査　12トレンチSD01部分（【H17東区】）から出土した遺物として368・371・372がある。368は桶の底板である。何枚かの板をつなぎ合わせて１枚の底板としており、両側面に繋ぎ目の内釘がみられる。刃物痕が両面に多数残る。371は内外面黒色の漆椀で内面に笹文が赤色漆で描かれる。372はコスキや雪バンバと呼ばれる雪かき用木製スコップと思われる。残存長82.6㎝で、上下端とも欠損している。　（安達）



第34図　平成９年度発掘調査区平面図（S＝1/200）・断面図（S＝1/50）



第35図　平成９年度本調査出土遺物実測図（S＝1/4、343はS＝1/3）



第36図　平成９年度本調査・平成13年度試掘確認調査出土遺物実測図（S=1/4、363・364・373はS=1/2、372はS=1/6）

V　自然科学分析

i）放射性炭素年代測定及び出土木材の樹種同定の結果（平成15・16年度調査）

測定番号	サンプル（樹種同定）	遺構データ	$\delta^{13}C$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-3652	炭混じり黒色土	遺構：SE06 層位：上層 その他：No.553	−25.8±0.23	525±25	1404AD(68.2%)1431AD	1320AD(9.9%)1350AD 1390AD(85.5%)1440AD
PLD-3653	炭（スギ）	遺構：SE06 その他：No.505	−27.23±0.51	915±35	1020AD(68.2%)1170AD	1020AD(95.4%)1210AD
PLD-3654	調査区土層炭	遺構：南壁8層 その他：No.560	−26.31±0.31	2160±30	360BC(27.0%)340BC 230BC(41.2%)160BC	360BC(36.3%)280BC 260BC(58.9%)90BC
PLD-3655	木片（スギ）	遺構：SE03 その他：No.883	−23.45±0.14	915±25	1040AD(45.0%)1100AD 1110AD(23.2%)1170AD	1030AD(95.4%)1210AD
PLD-3656	箸状木製品（スギ）	遺構：SE05 その他：No.898	−23.35±0.14	910±25	1040AD(42.1%)1100AD 1110AD(26.1%)1150AD	1030AD(95.4%)1220AD
PLD-3657	井戸側材（ハンノキ亜属　根材）	遺構：SE08 その他：No.569	−28.4±0.14	110±25	1690AD(20.9%)1730AD, 1810AD(42.9%)1890AD, 1910AD(4.4%)1920AD	1680AD(27.7%)1740AD 1800AD(66.3%)1930AD 1940AD(1.4%)1960AD
PLD-3658	井戸枠破片（ヒノキ）	遺構：SE09 その他：No.823	−23.75±0.15	750±25	1260AD(68.2%)1288AD	1220AD(95.4%)1300AD
PLD-3659	漆付着木片（ヒノキ）	遺構：SX01 その他：No.185	−24.36±0.15	180±25	1660AD(10.4%)1680AD 1730AD(48.5%)1810AD 1930AD(9.3%)1950AD	1650AD(17.8%)1700AD 1720AD(61.2%)1820AD 1920AD(16.6%)1960AD
PLD-3660	木片（ヒノキ）	遺構：SD06 その他：No.765	−23.84±0.15	615±25	1300AD(30.9%)1330AD 1345AD(26.5%)1370AD 1380AD(10.9%)1395AD	1290AD(95.4%)1410AD
PLD-3661	棒状木製品（スギ）	遺構：SD06 その他：No.856	−27.17±0.27	975±25	1020AD(29.4%)1050AD 1090AD(22.3%)1120AD 1140AD(16.5%)1160AD	1000AD(43.6%)1070AD 1080AD(51.8%)1160AD
PLD-3662	薄板（ヒノキ）	遺構：SD01 層位：護岸下 その他：No.706	−24.44±0.19	740±25	1265AD(68.2%)1289AD	1240AD(95.4%)1300AD
PLD-3663	炭（クマシデ節）	遺構：SD01 層位：III層 その他：No.334	−27.95±0.18	235±25	1640AD(47.7%)1670AD 1780AD(20.5%)1800AD	1630AD(59.3%)1680AD 1760AD(31.2%)1810AD 1930AD(4.9%)1950AD
PLD-3664	炭（カエデ属）	遺構：SD01 層位：上層 その他：No.363	−25.94±0.16	245±25	1640AD(59.0%)1670AD 1780AD(9.2%)1800AD	1530AD(3.1%)1550AD 1630AD(69.8%)1680AD 1770AD(20.5%)1800AD 1930AD(1.9%)1950AD
PLD-3665	炭（クリ）	遺構：SD01 層位：III層下部 その他：No.281	−25.15±0.17	305±25	1520AD(52.5%)1580AD 1620AD(15.7%)1650AD	1490AD(72.1%)1600AD 1610AD(23.3%)1660AD
PLD-3666	炭（スギ）	遺構：SE06 その他：No.614	−23.54±0.15	590±25	1305AD(0.8%)1310AD 1315AD(48.6%)1355AD 1385AD(18.8%)1405AD	1300AD(70.8%)1370AD 1380AD(24.6%)1410AD
PLD-3667	炭（リョウブ）	遺構：SE07 その他：No.804	−24±0.14	450±25	1428AD(68.2%)1455AD	1420AD(95.4%)1480AD
PLD-3668	靱製（コメの縄）	遺構：SD01 層位：II層 その他：No.762	−24.67±0.16	345±25	1480AD(24.9%)1530AD 1560AD(43.3%)1630AD	1470AD(95.4%)1640AD
PLD-3669	木片（アカマツ）	遺構：SD01 層位：III層上～中 その他：No.783	−26.09−0.17	380±25	1450AD(53.3%)1520AD 1600AD(14.9%)1620AD	1440AD(68.2%)1530AD, 1570AD(27.2%)1630AD

表１　放射性炭素年代測定及び出土木材の樹種同定結果

① 木材（木製品・炭）の樹種同定

植田　弥生（パレオ・ラボ）

1．はじめに

各遺構に共伴する土器の年代観と比較検討する目的で、内堀（SD01）や外堀（SD06）そして井戸跡（SE）などから出土した木製品や炭を使用しAMS法による放射性炭素年代測定が行なわれた。ここでは、放射性炭素年代測定に用いられた木製品や炭の樹種同定結果を報告する。

2．試料と方法

木製品から材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。材組織標本は、パレオ・ラボに保管されている。

炭はまず横断面（木口）を手または片刃の剃刀で割り、実体顕微鏡下で接線方向と放射方向を見定めて剃刀で弾くように割り、各断面を作成する。そして、走査電子顕微鏡で拡大して材組織を観察する。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5㎜角以下の大きさに整え、直径1㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。同定した炭化材の残り破片は、富山市埋蔵文化財センターに保管されている。

3．結果

同定結果を表1に示し、表2に遺構ごとの検出樹種を集計した。

表2

遺構 ＼ 樹種	内堀 SD01		外堀 SD06		井戸 SE		土坑 SX01	合計
	木製品	炭	木製品	炭	木製品	炭	木製品	
アカマツ	1							1
スギ			1		2	2		5
ヒノキ	1		1		1		1	4
針葉樹							1	1
サワグルミ	1							1
ハンノキ亜属					1			1
クマシデ節		1						1
クリ		1						1
カエデ属		1						1
リョウブ						1		1
合計	3	3	2		4	3	2	17

検出された材の分類群は、アカマツ（1点）・スギ（5点）・ヒノキ（4点）・針葉樹（1点）の針葉樹3分類群と、サワグルミ・ハンノキ亜属根材・クマシデ節・クリ・カエデ属・リョウブの落葉広葉樹6分類群が各1点であった。

木製遺物のほとんどは針葉樹材で、主にスギとヒノキであった。№22は連歯下駄の破損品と思われ、広葉樹材のサワグルミであった。

炭は、針葉樹のスギが2点、クマシデ節・クリ・カエデ属・リョウブの広葉樹材が各1点であった。

№18は、直径約6㎝の穀類の塊で、高熱により粒形は変形していたがコメであった（図版4　13-1・13-2）。

4．まとめ

中世の遺跡や城跡からは、アカマツ・スギ・ヒノキといった針葉樹の木材や炭化材が検出されることが多いが、当城跡においても同様な傾向が認められた。また北陸一帯では、古代やそれ以前では木製品にスギ材の利用が多いことは良く知られているが、中世の当遺跡ではスギとヒノキがほぼ同等に検出され、中世の時期または城郭という場所ではヒノキ材の利用も増加していたようである。

№22の下駄の破片と思われる木製遺物はサワグルミであった。サワグルミはキリ下駄の代用として下駄材に利用される樹種である。

井戸側からはハンノキ亜属の根材（№7）が検出された。この試料を用いた放射性炭素年代値（PLD-3657）は、110＋25yrBPで江戸時代以降の値であった事、根材である事から、井戸廃絶後にハンノキ亜属の樹木が生育していたと思われる。

炭は、広葉樹材が多く、検出種類数も多いことから、周辺の林の雑木が燃料材として利用されていた事が連想される。

② 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ*

1．試料と方法

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

2．結果

表1に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

暦年代較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。^{14}C年代の暦年代較正にはOxCal3.9を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

3．考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年代較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

*パレオ・ラボAMS年代測定グループ：小林紘一・丹生越子・伊藤　茂・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani

ii）富山市小出城跡出土動物遺体同定（平成15・16年度調査）

黒澤　一男（パレオ・ラボ）

1．はじめに

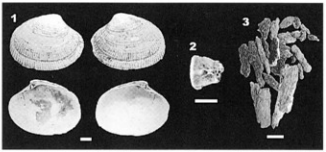
県道下砂子坂池田町線の建設工事に伴い、その地域において発掘調査がおこなわれた。そこで3点の動物遺体がSD01より検出された。ここではそれらの検出された動物遺体について同定をおこなう。

2．試料

試料1は、アサリである。左右殻ともあり、同一個体のものである。サイズは、殻長26.5㎜、殻高34.0㎜、殻厚15.7㎜ある。

試料2は、魚類の椎骨である。破片化し、同定に有効な棘や突起が欠如しているため同定にはいたらない。破片であるので正確ではないが、椎体横径はおよそ7.4㎜である。

試料3は、骨幹部が破片化してしまっていること、ビビアナイト（藍鉄鉱）に置換されてしまっていることにより、同定にはいたらない。



図版　出土動物遺体写真

1．アサリ（No.783）　2．魚類　椎骨（No.33）　3．骨片（No.617）

iii）動物遺存体について（平成15・16年度調査）

株式会社 吉田生物研究所
独立行政法人 奈良文化財研究所

出土した動物遺存体は3点、いずれもウマ（Equus caballus）の四肢骨と歯である。骨自体は、地下水の鉄イオンと骨のリンとが化合して藍鉄鉱（ビビアナイト）を析出して脆くなっているが、骨幹部の大きさと断面形状から中足骨、橈骨の可能性が高いと判断した。

SD01（取上No.109）ウマ　中足骨（右）骨幹部

両骨端を欠損する。残存部の幅、直径などから在来馬のうち、中形馬クラス（木曽馬相当）と考えてよいだろう。同様に大きさから若～成獣のものと思われる。

SD01　82

SD01　82（取上No.747）ウマ　第2前臼歯（右）

長さ×幅×高さ：34.0×15.0×58.5㎜

かなり大きい。手持ちのサラブレッド標本とほぼ同大。エナメル高が58.5㎜と、若齢から壮齢（4～5、6歳？）か。

SD01　34

SD01　34（取上No.76）ウマ　橈骨（右）

両骨端部を欠くが、骨幹部から近位部外側へかけて外側へ広がるラインが、ウマの橈骨のそれに一致する。ウシは骨幹部の太さがはるかに太く、大型である。

iv）漆器の塗膜構造調査（平成15・16年度調査）

株式会社 吉田生物研究所

1．はじめに

富山市に所在する小出城跡から出土した漆器36点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行った。以下にその結果を報告する。紙幅の関係で11点の観察結果を表に示している。

2．調査方法

表3の資料本体の内外面から数㎜四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

3．断面観察結果

塗膜構造：全点とも、下層から木胎、褐色の柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地、漆層という構造をとる。

下地：全点とも、褐色の柿渋に木炭粉を混和した渋下地であった。層の途中で剥離する様子も観察された。また、漆層との境目に特に柿渋量の多い箇所がある場合、縦方向に亀裂が入る様子が見られた。

漆層：下地の上にまず透明漆層が1層施される。地色が黒色の場合にはこの層が最上層となる。地色が赤色の場合や文様が施される場合には、その上にさらに赤色漆が1層重ねられる。地色が赤色の場合でも、下地の上に直接赤色漆層が重ねられる事例は認められなかった。文様の朱漆層の上にさらに透明漆が1層重ねられたものも1点（77）みられた。（4）は内外両面とも下地の上に黄褐色の透明漆が1層、その上に赤色漆が1層重なる構造である。

顔料：赤色漆層に混和された赤色顔料は、透明度が高く明確な粒子の形状を示すので、朱と判断される。なかには直径40μmという大きな粒子も観察された。

表3　断面観察結果表（抜粋）

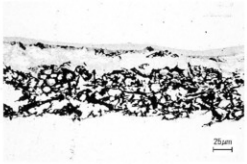
遺物（処理）No.	器種	樹種	遺構	概要	部位	写真No.	塗膜構造（下層から）				顔料
							下地		漆層構造		
							膠着剤	混和材	透明	赤色	
101（11）	椀	ブナ属	SD01	内面は黒地に赤色で唐＋花文。花文は針がき技法＊を用いる。外面は黒色地に赤色で文様。	内面＊	5	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
					外面＊	—	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
89（14）	小皿	ブナ属	SD01	内面は黒色地に赤色で文様。外面は無文で全面黒色。	内面＊	1	柿渋	木炭粉	1層		
					外面＊		柿渋	木炭粉	1層	—	
94（17）	椀	ブナ属	SD01	内面は黒色地に赤色で鶴丸文。外面は無文で全面黒色。	内面＊	2	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
					外面＊	—	柿渋	木炭粉	1層	—	
103（74）	椀	ブナ属	SD01	内面は黒色地に赤色扇文。外面は黒色地に赤色扇文。	内面＊	—	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
					外面＊	6	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
110（75）	椀	ブナ属	SD01	内面は黒色地に赤色不明文様。外面は無文で黒色。	内面＊	8	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
					外面＊	—	柿渋	木炭粉	1層	—	
99（76）	椀	ブナ属	SD01	内面は黒色地に赤色唐文。外面は黒色地に赤色不明文様。	内面＊	—	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
					外面＊	3	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
112（77）	椀	ブナ属	SD01	内面は黒色地に赤色不明文様。外面は無文で黒色。	内面＊	9	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
					外面＊	—	柿渋	木炭粉	1層	—	
114（89）	椀	ブナ属	SD01	内面は黒色地に赤色不明文様。外面は黒色地に赤色不明文様。	内面＊	—	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
					外面＊	10	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
100（90）	椀	ブナ属	SD01	内面は無文で赤色地。外面は黒色地に赤色不明文様。	内面＊	4	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
					外面＊	—	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
106（98）	椀	ブナ属	SD01	内面は無文で赤色地。外面は黒色地に赤色不明文様。	内面＊	7	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
					外面＊	—	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
—（4）	椀	—	SE07	内外面とも赤色漆椀の体部片。	内面＊	—	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱
					外面＊	—	柿渋	木炭粉	1層	1層	朱

＊針がき技法：文様の漆が乾く前に針状の工具で線状に漆をかきとり、線状の文様を表現する技法。
＊部位：印のある面は文様のある部位をサンプリングした。

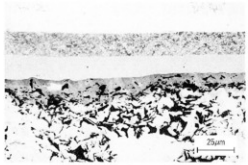
4．摘要

富山市に所在する、小出城跡から出土した内外両面赤色の漆椀体部片について、途膜構造を調査した。今回、観察結果を示した以外にも漆椀25点の漆膜構造調査を行ったが、全点とも下地は炭粉漆下地で、下地の上に地色には関係なく透明漆層が1層施される。赤色顔料としては、地色の場合も文様の場合も朱が混和される、といった共通点が認められた。

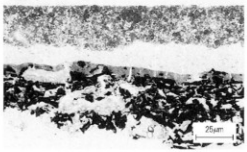
下地には漆下地の資料は認められなかった。この点は、木胎の樹種が1点（ハンノキ属）を除いて全てブナ属であったことと相応しており、資料が等しく比較的安価な大量生産品であったことを示している。また、地色が赤色の場合でも、下地の直上に透明漆が1層施される点や赤色顔料として朱が使用される点などから、資料の年代は中世に比定される。近世になると下地の直上に赤色漆が施される例やベンガラの使用例が増加する。



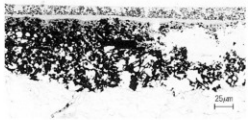
1. No.89　内面断面（×200）



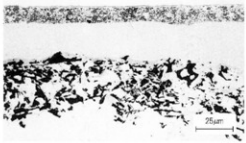
2. No.94　内面断面（×400）



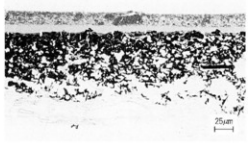
3. No.99　内面断面（×400）



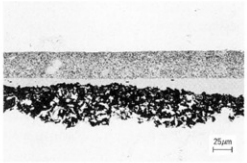
4. No.100　内面断面（×200）



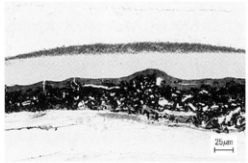
5. No.101　内面断面（×400）



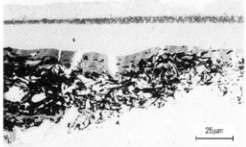
6. No.103　外面断面（×200）



7. No.109　内面断面（×200）



8. No.110　内面断面（×200）



9. No.112　内面断面（×400）

10. No.114　外面断面（×200）

写真 1

v）放射性炭素年代測定（平成17年度調査①）

パレオ・ラボAMS年代測定グループ*

1．試料と測定方法

測定試料の情報、調整データは表4のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

2．測定結果

表4に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

表4　放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

No.	遺　構	試料データ	δ^{13}C (‰)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP±1σ)
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
1	遺構：SD06下層 図No：276	試料の種類：炭化種実（シソ属炭化果実） 状態：dry カビ：無	-25.16±0.12	355±20	1470AD(42.7%)1530AD 1590AD(25.5%)1620AD	1450AD(49.2%)1530AD 1550AD(46.2%)1640AD	357±19
2	遺構：新潟SD01覆土	試料の種類：炭化材(コナラ節) 試料の性状：最外以外？（φ6cm丸木？） 状態：dry カビ：無	-25.42±0.17	345±20	1480AD(27.9%)1530AD 1570AD(40.3%)1630AD	1460AD(95.4%)1640AD	346±20
3	遺構：宮潟SD01覆土(人為埋土中)	試料の種類：炭化材（カバノキ属） 試料の性状：最外年輪（φ6cm発皮付） 状態：dry カビ：無	-24.96±0.14	355±20	1470AD(41.6%)1530AD 1570AD(26.6%)1620AD	1450AD(49.0%)1530AD 1550AD(46.4%)1640AD	357±20
4	遺構：宮潟SD01覆土（人為埋土に挟まれた暗茶褐色土中）（第7図断面B 7層）	試料の種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最外以外の年輪部 状態：dry カビ：無	-24.82±0.16	370±25	1450AD(50.8%)1520AD 1590AD(17.4%)1620AD	1440AD(67.9%)1530AD 1550AD(37.5%)1640AD	

暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

3．考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

試料No.1のシソ属炭化果実と試料No.3の樹皮付きカバノキ属炭化材は、年代測定試料としては非常に良い試料である。いずれも、1σ歴年代範囲においてCal AD1470－1530年（42.7%）、2σ歴年代範囲においてCal AD1450－1530年（49.2%）と計算された。

一方、試料№2のコナラ節からなる炭化材は、炭化材の断面形状からすると最外年輪部と思われる部分を測定しているが、測定値は上述の試料より若干新しい年代値を示し、1σ暦年代範囲においてCal AD1570－1630年（40.3%）、2σ暦年代範囲においてCaL AD1460－1640年（95.4%）と計算された。

試料№4は、最外年輪を持たない炭化材であったが、1σ暦年代範囲においてCal AD1450－1520年（50.8%）、2σ暦年代範囲においてCaL AD1440－1530年（57.9%）と計算された。

測定値は、4試料ともほぼ同様の年代値が測定されているが、暦年較正を行った較正曲線は、変化の少ない勾配の低い部分に相当するために、1σおよび2σ暦年代範囲は微妙に確率が変化している。こうした較正曲線の事情があるため、較正年代値を最大公約数的に見ると、1σ暦年代範囲においてはCal AD1450－1620年、2σ暦年代範囲においてはCal AD1440－1640年となる。なお、較正曲線は10年輪の測定値である。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy:The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代，3-20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

＊小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・藤根　久

vi）放射性炭素年代測定（平成17年度調査②）

株式会社 中部日本鉱業研究所（現 株式会社アーキジオ）

1．試料と測定方法

試料は、新期SD01、古期SD01、SD06、SE10、SE14から出土した試料、計8点（No.1～8）である。№8以外は炭化材、№8は土器付着炭化物を一部削り取って分析に用いた。

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸1.2N、水酸化ナトリウム1N、塩酸1.2N）により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC製コンパクトAMS・1.5SDIIを用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

2．測定結果と考察

同位体効果の補正を行った結果を表5に示す。No.1は370±20BP、No.2は345＋20、No.3は375±20BP、No.4は505－20BP、No.5は395＋20BP、No.6は435±20BP、No.7は400±20BP、No.8は390±20BPである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため1年単位で表している。

暦年校正は、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

暦年較正を行った結果を表5に示す。測定誤差2σの値は、No.1はcalAD1449-1629、No.2はcalAD1468-1634、No.3はcalAD1448-1625、No.4はcalAD1408-1440、No.5はcalAD1443-1616、No.6はcalAD1430-1471、No.7はcalAD1443-1615、No.8はcalAD1445-1618である。これらの結果をみると、15-16世紀に分布の中心があり、築城時期と照らし合わせても大きく矛盾しない。

表5　暦年較正結果

No.	遺構	試料	補正年代(BP)		暦年較正年代(cal)										相対比	Code No.
1	SD06覆土下層	炭化材(クリ)	372±21	σ	cal	AD	1459	-	cal	AD	1512	cal	BP	491	- 438	0.786	9128-1
					cal	AD	1601	-	cal	AD	1616	cal	BP	349	- 334	0.214	
				2σ	cal	AD	1449	-	cal	AD	1521	cal	BP	501	- 427	0.667	
					cal	AD	1572	-	cal	AD	1629	cal	BP	378	- 321	0.333	
2	SD06覆土中層	炭化材(ヨゴノキ属?)	346±20	σ	cal	AD	1488	-	cal	AD	1523	cal	BP	462	- 427	0.462	9128-2
					cal	AD	1572	-	cal	AD	1604	cal	BP	378	- 346	0.352	
					cal	AD	1608	-	cal	AD	1629	cal	BP	342	- 321	0.244	
				2σ	cal	AD	1468	-	cal	AD	1529	cal	BP	482	- 421	0.463	
					cal	AD	1543	-	cal	AD	1634	cal	BP	407	- 316	0.597	
3	SE10覆土	炭化材(ブナ属)	376±20	σ	cal	AD	1454	-	cal	AD	1496	cal	BP	496	- 454	0.718	9128-3
					cal	AD	1507	-	cal	AD	1511	cal	BP	443	- 439	0.046	
					cal	AD	1601	-	cal	AD	1616	cal	BP	349	- 334	0.235	
				2σ	cal	AD	1448	-	cal	AD	1522	cal	BP	502	- 428	0.720	
					cal	AD	1574	-	cal	AD	1584	cal	BP	376	- 366	0.023	
					cal	AD	1597	-	cal	AD	1625	cal	BP	353	- 325	0.258	
4	SE14覆土	炭化材(散孔材)	505±20	σ	cal	AD	1416	-	cal	AD	1432	cal	BP	534	- 518	1.000	9128-4
				2σ	cal	AD	1408	-	cal	AD	1440	cal	BP	542	- 510	1.000	
5	新規SD01覆土	炭化材(ヘラ状コナラ亜属コナラ節)	393±20	σ	cal	AD	1449	-	cal	AD	1484	cal	BP	501	- 466	1.000	9128-5
				2σ	cal	AD	1443	-	cal	AD	1511	cal	BP	507	- 439	0.948	
					cal	AD	1601	-	cal	AD	1616	cal	BP	349	- 334	0.107	
6	古規SD01覆土(人為埋土中)	炭化材(ブナ属)	435±20	σ	cal	AD	1438	-	cal	AD	1463	cal	BP	512	- 487	1.000	9128-6
				2σ	cal	AD	1430	-	cal	AD	1471	cal	BP	520	- 479	1.000	
7	古規SD01覆土(人為堆土中)	炭化材(不明)	398±20	σ	cal	AD	1448	-	cal	AD	1481	cal	BP	502	- 469	1.000	9128-7
				2σ	cal	AD	1443	-	cal	AD	1511	cal	BP	507	- 439	0.913	
					cal	AD	1601	-	cal	AD	1615	cal	BP	349	- 335	0.087	
8	新規SD01覆土	土器付着炭化物	389±20	σ	cal	AD	1450	-	cal	AD	1488	cal	BP	500	- 462	0.932	9128-8
					cal	AD	1604	-	cal	AD	1606	cal	BP	346	- 344	0.068	
				2σ	cal	AD	1440	-	cal	AD	1516	cal	BP	510	- 434	0.864	
					cal	AD	1595	-	cal	AD	1618	cal	BP	355	- 332	0.154	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。

vii) 重軽鉱物組成分析（平成17年度調査）

株式会社 中部日本鉱業研究所（現 株式会社アーキジオ）

1．試料と分析方法

試料は、平成17年度調査東区のSD01の断割Bより採取された古期SD01の覆土である（第7図）。断面では、発掘調査所見により上位より1層～13層まで分層され、そのうち、12～13層は地山、7層・10層～11層までは自然堆積層、1～6・8～9層は人為埋土層とされ、その埋め立て層を掘り込んで新期SD01が構築されていると考えられている。

分析には、人為埋土層より2層（No.1）と8層（No.2）、自然堆積層より10層（No.3）の合計3点を選択した。

試料約40ｇに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉱物と軽鉱物をそれぞれ250粒に達するまで偏光顕微鏡下にて同定する。重鉱物の同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とした。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は、「その他」

とした。「その他」は軽鉱物中においても同様である。また、火山ガラスは、便宜上軽鉱物組成に入れ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は厚手平板状あるいは比較的大きな気泡持つ塊状、軽石型は小気泡を非常に多く持つ塊状および繊維束状のものとする。

2．分析結果・考察

結果を表6に示す。重鉱物組成では3点ともに、斜方輝石と角閃石を主体とし、単斜輝石、緑レン石、不透明鉱物を少量伴うという組成を示す。このうち8層（№2）と10層（№3）は、角閃石の量比が斜方輝石よりも格段に多いことが特徴であり、2層（№1）は、斜方輝石と角閃石がほぼ同量、さらに「その他」とした粒子がこれらの鉱物よりも多く含まれていることが特徴となる。「その他」とした粒子は、落射光下では褐色～赤褐色を呈する不定形粒であることから、酸化鉄粒と考えられる。

軽鉱物組成では、3点ともに長石類が多く、少量の石英を伴う組成である。「その他」とした粒が、上位の試料ほど多い傾向が窺える。軽鉱物における「その他」は、未分解の粘土粒や風化粒子である。3点の試料間では、重鉱物組成および軽鉱物組成ともに、鉱物の種類構成は同様であった。このことから、人為埋土層は、その場に自然堆積した堆積物と同じ地質学的背景を有する地域内の堆積物が使用されたと考えられる。小出城跡の地理的位置から、同じ地質学的背景を有する地域とは、窟願寺川および上市川とそれらに付随する水系が形成する富山平野東部地域程度の広がりであり、その地質とは、富山平野の東南方を取り巻く山地を構成している地質である。富山県（1992）などにより地質を概観すれば、平野側の山地には新第三紀の堆積岩類と安山岩質溶岩および同質凝灰岩が広く分布し、さらに背後の山地には、飛騨深成岩類とされる花崗岩類の地質が広く分布している。10層の重鉱物組成に認められた輝石類は新第三紀の溶岩や凝灰岩に由来し、角閃石は花崗岩類に由来すると考えられる。人為埋土層の下部である8層は、10層とは各鉱物の量比まで類似することから、同じ地質学的背景を有する地域の中でも、遺構から至近の場所にある堆積物に山来する可能性がある。一方、2層については、斜方輝石と角閃石の量比関係が10層とはやや異なるが、この程度の違いは、当社による富山平野内の堆積物の分析例によれば、同一地点での堆積層における異なる層位間でも認められる。また、「その他」とした酸化鉄については、2層が掘底となっていることから、堀が構築された後の風化変質により生成した可能性がある。したがって、2層の上も、8層の上と同一あるいは至近の場所の堆積物に山来する可能性が高い。

表6　重軽鉱物組成分析結果

№1	試料	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	ザクロ石	緑レン石	褐簾石	モナザイト	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	石英	長石	その他
1	断層B　2層	55	14	44	2	2	9	0	0	1	22	101	250	0	0	0	30	77	143
2	断層B　8層	35	19	122	0	1	12	1	1	0	23	35	250	1	0	0	39	84	126
3	断層B　10層	50	23	128	3	0	16	0	0	0	8	22	250	2	0	0	57	104	87

参考文献

富山県　1992．1/10万富山県地質図　内外地図株式会社

VI　総括

i）富山市小出城跡に現れた小断層の考古地磁気研究

酒井英男，松延礼佳，岸田徹，伊藤孝（富山大学理学部）
野垣好史（富山市教育委員会）

1．はじめに

小出城跡は、富山市北東部・水橋小出地内、白岩川右岸の低湿地帯に位置する戦国時代から安土桃山時代を中心とした時期の城館跡である（第37図）。富山市埋蔵文化財センターによる発掘調査から、中世土師器・瀬戸美濃・青磁などの陶磁器や漆器椀・下駄などの木製品が出土している。遺物には、室町時代以前あるいは江戸時代以降と見られるものもあり、小出城が文献史料に登場する前後も人為活動のあったことが想定されている。今回、平成17年度調査西区の発掘で現れた小断層の露頭において考古地磁気の研究を行った。

・・第37図　富山市小出城跡の位置と調査露頭を示す。下には、試料採集点、試料番号とサイト名を載せている。

2．小断層の露頭

第37図に示す露頭（面の法線方向はＮ20Ｅ）において、小断層は、上下にほぼ直線的に現れた。露頭の上下約60cmの範囲で５～６層の土層が判別でき、小断層を境として対応する上層から、断層は僅かに逆断層のセンスが認められる。各土層の上下のずれ幅はほぼ同じで７～10cmと読みとれた。ずれ幅が似ていることは、地震による変形は積算されてはおらず、ある時代の一度の地震により形成されたことを示している。

図に示されるように、表層から断層面沿いにくさび状に入り込んだ領域がある。これは、断層活動時に表層から落ち込んで再堆積した領域と考えられる。再堆積領域は水平面で南西－北東の方向に延びており、小断層の走向を示すと考えられる。この露頭の西側で発掘された土坑では、周囲と色の異なる土層が南西－北東へ延びていることが確認され、小断層が続く走向を示すと考えられている。

3．研究試料の採集と実験方法

研究試料は、断層近傍の土層と再堆積の領域で採集した。断層近傍では分類された土層に層準（サイト）を設定し、容量７ccのプラスチック製キューブケースを用いて試料を採取した。具体的には、ケースを露頭面に打ち込み、表面に磁北方向を記して定方位試料とした。第37図の中央に、試料採集点、試料番号とサイト名を載せている。断層面を挟んで11サイトを設定し、各サイトでは、断層面から水平方向に両側30～40cmまでの範囲において約５cm間隔で試料を採取した。再堆積領域Ｋ113サイトでも、同様にプラスチックキューブケースにより定方位試料を採集した。

室内実験では、まず試料の自然残留磁化を測定し、その後で、二次的に付着した磁化を除去する段階交流消磁実験を行った。研究方法の詳細は、打出遺跡の報告書（酒井ほか2006）等を参照されたい。交流消磁実験では、交流磁場として、2.5mTと５mTおよびその後５mTずつ段階を上げて30mTまでの強さの磁場を用いた。各試料の消磁実験の結果は、ザイダーベルト図法とfitting統計法（Kirshvink, 1997）により解析し、信頼できる磁化方向を求めた。

4．実験結果

交流消磁実験の結果、殆どの試料では、堆積後に付着した二次的な磁化は低い交流消磁の段階で除去でき、信頼できる磁化方向が得られた。全試料について帯磁率も測定したが、帯磁率の差は小さかった。これは、露頭の堆積物が比較的均質な土壌からなっていることを示している。

各試料から得た残留磁化方向を、第38図ではサイトでまとめてシュミット等積投影図に投影している。各サイトの図で、断層面に最も近い試料の磁化方向を丸印でマークした。その磁化方向は他の試料の磁化方向からずれる傾向がみられ、特に断層東側のサイトでは東偏し伏角が深くなっている。

再堆積領域については、領域の境界付近の試料は変形を被っていることが磁化方向から推察されたが、内側の試料は、揃った磁化方向を示した（第39図）。

・・第38図　各サイトの位置と残留磁化方向を対応させている。

5．考察とまとめ

5．1．断層近傍の土層の変形と断層の走向

第38図に示された様に、断層のごく近傍が変形を受けていることが磁化方向から推察された。これは、断層面が早い動きでずれたことを示唆している。磁化のずれには、断層面の東側で伏角が深くなる傾向もあり、断層運動（方向）との関係は興味を持たれ今後の検討課題となった。また、堆積層の磁化方向は過去2000年間の地磁気の方向とは異なるので、堆積年代はそれ以前と考えられる。跡津川断層は北東・南西の走向を持つ右横ずれ逆断層の特徴として知られるが、本研究の小断層も同様に北東－南西方向に続く走向であった。

5．2．再堆積領域の地磁気年代

変形の影響が無い試料について、平均した磁化方向は、偏角－7.4度、伏角53.2度、統計誤差（$\alpha 95$）2.3度と得られた。第39図には、この方向を地磁気永年変動（Hirooka, 1971）と対比している。図より再堆積層の年代として、A.D.1850±50年が推定される。この地磁気年代は、小断層は、AD 1858年2月26日に富山県内を襲った“安政の地震”に関連して形成された可能性を示している。酒井ほか（1983）でも、安政の地震の記録としての堆積層の磁化年代を報告している。

富山県と岐阜県の県境を走る跡津川断層に起因した“安政の地震”について、『魚津在住言上控』（成瀬正居編，金沢市立玉川図書館蔵）に、小出城近傍の地震被害に関する以下の記述がある（廣瀬誠 2000）。

「小出村　田地高低になり，地割れ砂噴出，家・蔵多数全半潰」

この記述からも、小出城跡の小断層は安政の地震の際に生じた可能性は十分あり、地磁気年代はこれを支持している。再堆積領域は噴砂とも考えられ、今後、同地域の地下状況を磁化調査も含めて更に詳しく調べることが望まれる。

・・第39図．再堆積層の変動の影響の無い試料の残留磁化方向と考古地磁気変動の比較．

参考文献

Fisher, R.A. (1953) : Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A217, 295-305.

Hirooka, K. (1971) : Archaeomagnetic study for the past 2,000 years south west Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ. ser. Geol. & Mineral., 38, 167-207.

廣瀬誠（2000）：『地震の記憶－安政五年大地震大水災紀』

Kirschvink, J. L. (1980) : The least-squares line and plane and the analysis of palaeomagnetic data and Geophys. J.R. Astr. Soc., 62, 699-718.

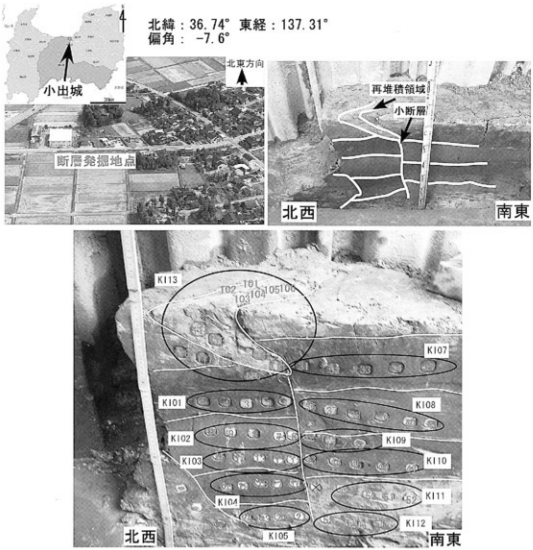
酒井英男・広岡公夫（1983）：古地磁気・岩石磁気からみた断層運動．月刊地球，7，p.394-398.

酒井英男・正和紗央里・岸田　徹・伊藤　孝・飯田　肇（2006）：噴砂や断層近傍の土壌の磁化特性の研究－ペットボトルによる液状化の実験と古地震の年代推定，立山カルデラ研究紀要，第7号，立山カルデラ砂防博物館，pp.31-36.

酒井英男・金井友里・岸田　徹（2006）：富山市打出遺跡の焼土の古地磁気測定，富山市打出遺跡発掘調査報告書　一般県道四方新川条屋線住宅基盤整備事業に伴う発掘調査報告，富山市埋蔵文化財調査報告7，富山市教育委員会，170-178.

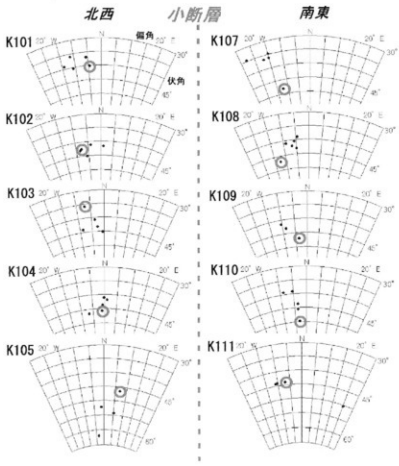
寒川　旭（1999）：地震考古学－遺跡が語る地震の歴史　，中公新書，pp251.

富山市教育委員会埋蔵文化財センター（2004）：小出城跡発掘調査現地説明会資料.

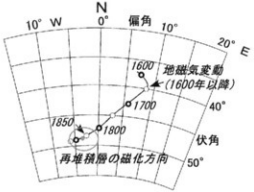


小断層の位置（矢印の箇所）

第37図　小出城跡の位置、露頭の写真・図、試料採集点とサイト名



第38図　各サイトの残留磁化方向のシュミット等積投影図



試料番号	偏角 (°)	伏角 (°)	磁化強度 (x10⁻⁵Am²/kg)
113	−3.7	48.7	1.93
114	−1.0	52.5	2.21
115	−3.4	47.0	1.84
116	−5.2	47.4	1.74
118	−2.3	47.9	1.71

平均の偏角 −3.2°
平均の伏角 48.7°
信頼円 α_{95} 2.3°
K 1100

第39図　再堆積層の変形の影響がない試料の磁化方向と地磁気変動の比較

ii）主要遺構の特徴と変遷

野垣好史

報告した一連の発掘調査によって、小出城に関係するとみられる堀跡や大溝が検出された。ここでは、主要遺構であるSD01とSD06を中心にその特徴をまとめ、遺構の変遷について考察する。

1．主要遺構の特徴

SD01について　報告でも述べた通り、本遺構は2期にわたって機能していたと推測できる。

最初に掘削された古期SD01は、検出幅13m以上、深さ1～2m以上に及ぶ大規模な溝である。掘り込みの傾斜角は約25°～40°である。走行方向はおよそN-80°-Wで、東西方向に延びるが、西部で南北方向に方向を変えると思われる。方向の変え方は、L字状に北に曲がる、逆L字状に南に曲がる、東西方向の溝とT字状に合流する状況が考えられるが、現段階では確定できない。古期SD01の覆土は、最下層に薄く自然堆積層（Ⅰ層）があり、それより上は灰白色や黒色系の粘土ブロックを多量に含む土層（Ⅱ層）である。粘土ブロックは地山土と類似しており、地山に由来すると考えられる。Ⅱ層は、その土質や遺物・礫の出土が少ないことなど、自然堆積の土層（Ⅰ層）とは明らかに特徴が異なり、人為的に埋められた土層と判断した。覆土（Ⅰ・Ⅱ層）から出土した遺物によると、16世紀前半頃が中心と考えられるが、15世紀後半に遡る可能性もある。

人為埋土によって古期SD01が埋没した後、ほぼ同じ位置に新期SD01がみられる。土層断面の観察によると、新期SD01は、17年度調査東区では人為埋土を掘り込んで造られる（第7図）が、15・16年度調査区では元々の窪地をそのまま利用している様子（第6図）が看取できる。検出幅5.5～8.5m、深さ0.3～0.7m、掘り込み角度は約10～20°と緩やかである。走行方向はおよそN-65～80°-Wで、古期SD01と比べるとやや北西－南東方向にずれる。新期SD01について特記されるのは、15年度調査区で検出した2ヶ所の礫集中地点である。西側の方は斜面の一部に礫を密に配置し、東側の方は溝の斜面に盛土を行って山島状とし、盛土の表面や土部に礫が置かれる。いずれも護岸のための造作と考えられるが、東側の方は付近の地山が地震による噴砂で砂質を呈するので、その崩落を防ぐ目的があったのかもしれない。新期SD01の出土土器・陶器は、中世土師器や珠洲などが中心であるが、越中瀬戸など17世紀代以降のものも混在する。17年度調査区では17世紀後半～18世紀前半に下る陶磁器などがある。16世紀後半頃に形成され、長期間にわたって埋没したと考えられる。

SD06について　検出幅約5.5～6m、深さ0.5m前後の溝である。付近の井戸がかなり削平されているとみられることから、本来はより深かったと考えられる。北側の17年度調査西区では「八」字状に広がり、南北方向と東西方向の溝に分岐していると考えられた。北側の分岐点となる場所では、地山が三角形状に掘り残され、その上にしまりのある粗砂層を薄く盛土している。この付近を中心に多くの礫が出土し、盛土層のなかにも礫が混じる。礫はびっしりと敷き詰められるような状況ではなく、底面に近いものや盛土に混入した状態で出土したものだけをみれば、むしろまばらである（第12図A）。ただし、浮いた状態で検出した多くの礫も元々は盛土層に伴っていた可能性があるから、当初はより密に配置されていたと考えられる。分岐点の隅角にあたる場所のみに護岸のためこうした施工をしたのか、北や東に延びる斜面にも同様な工法を施したのかは不明である。もうひとつ注目されるのは、17年度調査西区で見付かった杭列である。用途は断定できないが、防御用の施設、あるいはしがらみのように水流を塞き止める施設の可能性が考えられる。

井戸跡について　14基検出した。素掘り井戸が大半を占めるが、横桟留の構造をもつもの（SE09・11）もある。また、SE14は壁面に竹材を貼り付けて、補強をする特異な構造をもつ。井戸跡は土器・陶磁器が出土するものが少ないため、時期を明確にしにくいが、SD01・SD06と切り合いをもたずに配置されているため、これらと近い時期に営まれた可能性が高い。

2．遺構の変遷

SD01、SD06を中心に、検出した中・近世遺構の変遷をⅠ～Ⅲ期に分けて概述する。

Ⅰ期　16世紀前半と考えられるが、15世紀後半に遡る可能性もある。

この時期の遺構として、古期SD01が該当する。検出幅13m以上、深さ２mに達する本遺構は堀と呼ぶにふさわしい規模を有する。これが小出城に関係する遺構であることが確実なら、文献に初出する1545（天文14）年より前に、中世城館としての小出城が整備されていたことになろう。

古期SD01は大規模に埋め立てられ、埋土には大量の粘土ブロックが含まれる。粘土ブロックは地山に由来するとみられることから、この埋め立ての土砂は、次の時期に新たに掘削された堀や溝の掘削土が用いられた可能性がある。

平成14年度の個人住宅建築に伴う発掘調査で見つかったSD07も、遺物の様相や深さ0.8mに及ぶ深い溝であることなどが、古期SD01と似る。両者の溝の関係やつながり方は十分明らかでないが、同時期の遺構の可能性がある。

なお、古期SD01の走行方向は、周辺の旧地割図（第40図）にみえる方位とほぼ一致する。現在はほ場整備のため改変されている場所があるが、調査地の南北にある家屋や区画の方位は当時の名残を留めている（第３図右上）。小出城成立時の地割が現在まで踏襲されてきている状況がうかがえる。

Ⅱ期　16世紀後半頃と考えられる。文献に小出城の記載がたびたびみえる時期にほぼ相当する。

この時期の遺構として新期SD01とSD06が該当すると考えられる。両溝は、同様の規模で、17世紀以降の近世遺物が出土する状況などが類似する。また、護岸のためと思われる礫を溝の斜面に配置する工法がみられることも両溝で同じである。

新期SD01とSD06は、幅・深さともⅠ期の古期SD01と比べると小規模である。削平を考慮しても規模は著しく劣り、織田勢と上杉勢が激しく攻防していた時代背景を考えれば、小出城の中心部を囲む堀と考えるにはやや不自然である。したがって、この時期の小出城の中心は別の場所にあって、新期SD01やSD06は城の周辺域あるいは付随的な施設を囲んだ溝と考えられる。中心部の位置については、今回調査区の南側が有力な候補となる。平成13年度の試掘調査で、小出神社のすぐ北側の水田で大規模な溝の存在が想定されている（第33図）。また、金子玲子・林寺厳州氏が付近を踏査した際には、小出神社・玉永寺周辺に鎌倉～室町、戦国時代の遺物が多く散布していたと報告されている（金子・久々1995）。これらのことを考慮すると、小出神社周辺が当該期の城の中心部であった可能性が考えられる。上記した古期SD01の埋め立てと考え合わせると、Ⅰ期からⅡ期にかけて堀の位置の変更や改修がなされた可能性も考えられよう。

また、一連の調査で出土した武器資料が、いずれも当該期の遺構に伴って出土していることも注意される。たとえば、新期SD01覆土（Ⅲ層）からは鉛玉・長刀の柄・鏃刀、SD06からは鉛玉の出土があり、新期SD01からは被熱した礫も出土している。平成13年度の試掘調査では土製弾丸の出土がある。SD06で検出した杭列も防御用の施設の可能性がある。戦を想起させるこうした考古学的な要素は、上杉氏の越中進攻があった時代背景とも符合する。1581（天正９）年に織田・佐々勢と上杉勢が争った「小出城の戦い」など、文献にみえる攻防を裏付ける資料と考えられる。

Ⅲ期　17世紀代以降で、小出城が廃城となった後の時期と考えられる。この段階は、まだ新期SD01やSD06が埋没していなかったと考えられ、覆土に当該期の遺物が混入する。

この時期の遺構として、平成16年度調査区のSD02が該当する。SD06を切って掘削され、近世屋敷地を区画する溝と推測される。このほかには当該期の確実な遺構は認められないが、小出城の廃城以降も居住域として一帯が利用されていた様相がうかがえる。

ⅲ）小出城出土漆器について

稲垣裕二

小出城跡は地下水位が高く、漆器の保存状態が良好で、調査区内（発掘調査面積718㎡・試掘調査面積123㎡）の堀や井戸からの出土点数は70点を超えた。県内でも非常に密度の高い出土量であり、漆器は小出城内で欠かせない生活用具であったと考えられる。ここではその特徴をまとめてみたい。なお、漆器の文様・年代観については四柳嘉章氏（漆器文化財科学研究所所長）よりご教示を得た。漆器塗膜は未同定のものが多いため、本文では実見に従い黒色漆・赤色漆と表記している。

1．用材・技法・形態から見た漆器

器種には椀・皿・蓋があり、大半が椀である。椀は器高・高台が高くなり、高台底厚が厚いもの・やや薄いもの・高台内面が丸みを帯びるものが確認できる。高台が低い椀は立ち上がりが垂直のもの・やや外側にふんばるものとに分けられる。樹種同定を行った74点の内、トチノキ科トチノキ属が2点・カバノキ科ハンノキ属が1点・ニレ科ケヤキ属が1点、他はブナ科ブナ属であった。塗膜分析を行った漆器は36点で、全てが炭粉渋下地である。地の粉漆下地の漆器は認められない。漆層は下地の直上に1層だけ透明漆を、赤色漆塗りの漆器は透明漆層の上に1層だけ赤色漆を塗る非常に簡易的な仕上げ方である。上塗色は出土漆器の殆どが総黒色漆塗りで、内面赤色漆塗りが3点、内外面赤色漆塗りが4点出土している。未分析の漆器を含めて、主に15世紀終～16世紀中葉頃（蓋（№369）は近世）の普及品と考えられる。また、漆器の中には数点、口縁部・体部に孔を開け細工してあるもの（№92・101・112）、椀の高台部のみを加工しているもの（№317）、火熱を受けたもの（№92）が確認でき、祭祀具や他の用途に転用された品や戦火にあった品もあったと考えられる。

同地域にある水橋金広・中馬場遺跡では12世紀終～16世紀中葉にかけての漆器が出土し、殆どがブナを用いた総黒色漆塗り・炭粉渋下地の漆器である。地の粉漆下地を用いた総赤色漆塗りの椀（15世紀前半頃）が1点、他にケヤキを用いたベタ高台の皿（12世紀終～15世紀前半頃）が出土している点から、本遺跡とは時期差があるものの、中世後半に見られる簡易的な漆工は共通している。

2．漆器文様について

上に鶴丸・唐・扇文様が、写実的に描かれている。内外面が同様の文様で構成されているものや鶴丸・唐・扇の文様を単一又は植物系等の文様と組み合わせて描かれたものがある。№111などにみられる扇文は県内他遺跡出土漆器とも共通し、この地域に流行した描かれ方である。№90は一乗谷朝倉氏遺跡の出土例から松を表していると考えた。弓庄城（上市町）・木舟城（高岡市）・梅原胡摩堂遺跡（南砺市）等、県内の主要な中世城館跡出土漆器と共通する文様が多く、本遺跡も中世城館として重要な位置づけを担っていたことが推定される。

他に鶴亀と松文（№97・176・295）・三つ月文（№93）などの蓬莱・宝珠文が多い。鶴亀は左右どちらにも配置するタイプがあり、一般的なものとは異なる配置の仕方である。また、菊花文（№112）は他に類例が無く、県内で初例となる螺子牡丹と扇（№101）が描かれたものは引掻（針描）技法を用いる。さらに扇・房・飾りが一緒に描かれたもの（№102）など独自性のある文様も確認できた。

3．小結

木遺跡では漆容器として使用されていたと思われる曲物や板状木製品、中世土師皿がある。また、井口城跡（南砺市）と同様のヘラ状木製品が出土しており、小出城内に漆製品を専門に扱う職人を招き入れて漆器製作を行っていたのではないかと推測される。出土した漆器は極一般的な普及品であるが、文様構成では一乗谷朝倉氏遺跡（福井県）や県内の各城館等の影響を受けながらも小出城独自の構成が成されていた印象を受ける。小出城の漆工技術は単に中世後半にみられる漆器の需要に対応したものではなく、独自の様相を織り込みながら質の高いものを生み出そうとしていたようである。

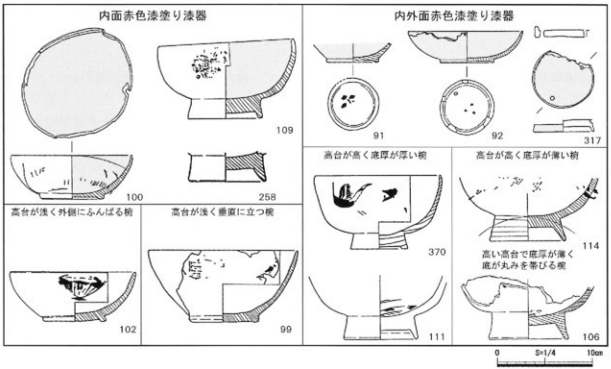


表7　小出城跡漆器形態・上塗色分類表

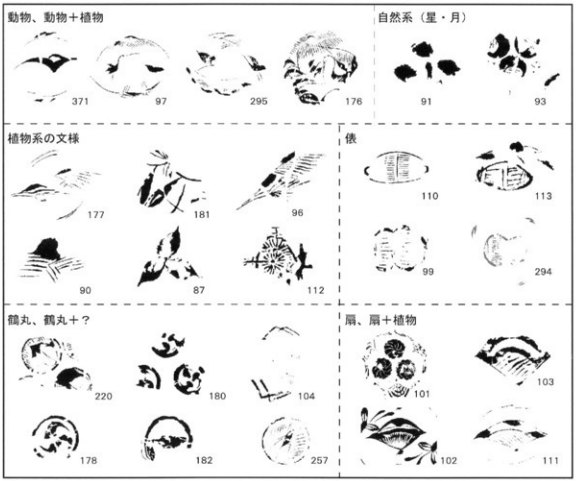


表8　小出城出土漆器文様分類表（※文様はデジタルカメラ撮影画像を処理したもの）

iv）まとめ

鹿島昌也

1．「推定　小出城域」について

富山市遺跡地図に記された「小出城跡」の面積は127,000㎡に及ぶ。面積が示すように、これまで位置が特定されていなかった小出城の実態を探るための貴重な資料を蓄積することができた。調査成果を元に「推定 小出城域」を提示し、あわせて城がこの地に築かれた背景とその前後の様相について触れ、まとめとしたい。今後この成果を基に、より深く「小出城」に迫ることができればと思う。

まず、立地環境をみてみる。【H９区】試掘調査で、遺跡の所在が確認された７Ｔと遺跡の所在が確認できなかった３Ｔとでは、地山の標高で約1.3mの差が生じることが判明した（第33図）。この調査で遺跡の西限をほぼ確認できた『三州志』に登場する小出川の旧流路か）。このことから、遺跡の北と西、南を中小の河川で囲まれた微高地を選地し、水運や交通の要衝となる場所に立地していたことが分かる。遺跡の東限は、旧地籍図に残る字名「下坪」「中坪」「西坪」の東端となる主要地方道立山水橋線（通称五百石街道）付近と推定した。ここには、現在　堀」を苗字とする宅地が南北に並ぶことも注目される。遺跡の北端については、大通寺の北側が新橋川に向かってやや低くなっているため、この付近を北限と推定したい。遺跡の南限は、小出神社北側の【H13区】試掘調査で東西方向の幅約10m規模の大溝が検出されたこと、小出神社北側を東西に延びる農道改良時に遺物の出土をみていること、小出神社北側の水田中に石組み井戸があったとの地元の方の話から小出神社付近までとしたい。おおよそ南北270m、東西150mの範囲を「推定 小出城域」とした（第40図）。ここには、16世紀後半に営まれた「小出城」とあわせて、鎌倉末期～元亀２（1571）年まであったとされる「瑞井山金剛護国禅寺」［通称：金剛寺（Ｉ位置と環境参照）］も含めて中世城館域として考えたい。

平成15～17年度発掘調査区では中世以降、少なくとも３時期の変遷がみられ、平成９年度発掘調査区では中世～近代以降まで４時期の遺構が形成される。遺跡としては、15世紀代後半頃には、中世集落としての営みが開始され、16世紀後半頃にピークを迎え、近代に至るまでの遺構や遺物がほぼ継続して認められる。合計で1,000㎡に満たない面積の発掘調査で、建物跡が確認できなかったものの、堀や井戸などからの豊富な出土遺物を基に検証を試みたい。

2．遺物から見た小出城

まず、古期SD01として幅13mもの大規模な堀で区画された居館が営まれる。堀からは15世紀代に遡る中世土師器や五輪塔空風輪が出土した。覆土中遺物の放射性炭素年代測定の値などから、大通寺付近にあったとされる金剛寺との関連も推測されるが、今後の課題としたい。他に井戸（SE06）が15世紀後半の様相を呈し、小出城の前身となる中世居館の営みが始まっていたと推測される。新規SD01は古期SD01を埋めて再度掘削された最大幅8.5mの堀である。その南肩は河川から運ばれたやや大振りの川原石を用いた護岸がみられる。覆土中からは、鉛玉や長刀柄、腰刀、焼けた石や陶器類などが出土し、鉄砲（火縄銃）を使用した戦乱があったことを物語る。鉛玉は県内では、上市町弓庄城など限られた城館跡からの出土にとどまる。大きさや重さも弓庄城出土鉛玉に類似し、戦乱期の城館の存在を裏付ける資料と言える。また、SD01から出土した動物遺体（骨・歯）は３点ともウマとの報告を得た。しかも木曽馬や現在のサラブレッド相当の大きなウマがいたことが判明し、（Ⅴ章Ⅲ参照）松井章氏によると、当時としては大型の馬で、戦に関わった軍馬である可能性が高い。

さらに、西に約30m離れた位置に形成されたSD06も礫による溝斜面の護岸や鉛玉の出土などの共通点から、新規SD01とほぼ同時期に機能していたとみられる。ここに形成される区画は東西約25m南北30m以上を測る。区画内には井戸以外の施設は検出されなかったものの、出土遺物から16世紀後半に営まれた小出城を形成する郭の一つと推測される。また、SD01から南に約150m離れた【H13区】

で、幅約10m規模の堀とみられる大溝から土製の弾丸も出土した。このことから軍事の拠点となった小出城の主たる施設はSD01の南側に所在していたことが推定される（考察ii参照）。

小出城は、上杉（長尾）方、織田（神保・佐々）方双方の最前線基地として位置づけられ、どちらかの勢力が入った時点で郭の配置や構造の改変があっても不思議はない。これまでの調査で「推定　小出城域」内は複数の堀で区画された郭が連なったり、堀が掘り直されたりしていることが明らかになった。文献には南北22～33間・東西34間と記され、城の規模が異なることからもその構造が一貫しなかったことがうかがえる。また、その規模はさほど大きくない。しかし、これは「推定　小出城域」内における主郭が置かれた一角を示しているに過ぎない。中世城館域のみならず、河川で囲われた微高地全体がある時期には小出城の最大領域となり、相手方からの防御の役割を担っていたと推察される。高岡徹氏は、文献から城下「町」の存在を指摘し、「町」が城の外郭的性格を持ち、総構えのような形で堅固に守られていたのではないかと推測している（註1）。

一方、堀の覆土からは戦乱に関連する以外にも漆器をはじめ機織の部材や櫛、使用痕の残る大人や子供の下駄、タモ網、魚忖、種子など様々な生活具が出土した。また、豊富な陶磁器類の出土は、河川を利用した人やモノの交易の拠点であったことを物語っている。「推定　小出城跡」は、戦乱期以外には女性や子供も暮らす中世居館として機能していたことが推測される。注目されるのは、花鳥文や植物文などで彩られた漆器点数の多さである。南砺市井口城では城内で漆器の製作が行われていた。小出城跡でもヘラ状木製品や漆が付着した容器とみられる木製品、漆が付着した中世土師器が出土し、城館内で漆器の生産が行われていた可能性も否定できない（考察iii参照）。

3．小出城その後

新規SD01は17世紀～18世紀にかけて埋没したとみられ、同時期のSD06埋没後にも近世屋敷地を区画する溝が形成される。その一方で、調査区内からは地震による地層のズレや歪みの痕跡が複数確認され、安政の地震に関連して形成された可能性が示された（考察i参照）。地元では、「安政地震の際、南の曲淵集落から小出方向を見ると水柱が上がっていた」との言い伝えがあり、激しい噴砂の様子がうかがえる。高岡市福岡町木舟城跡では、地震による地滑り痕跡が確認され、木舟城廃城との関連が注目されている。小出城跡では、地震による地層のズレを切って近世～近代期の遺構が形成される箇所がみられる。

小出地区の集落は「小出城の戦い」の舞台となるような戦乱に見舞われ、さらには地震の災害にあっても移転することがなかった。この地に集落が営まれ続けたのは、15世紀に中世居館としての基礎ができ、近代に至るまで、その立地環境が生活の拠点のみならず水運や交通、軍事の拠点としても見過ごすことができない要衝の地であった事が背景にあるのではないか。

註1：高岡徹2007「小出城跡とその攻防戦の実態」『富山市考古資料館紀要』第26号を参照

第40図　旧地割図からみた「推定 小出城域」（太線内）

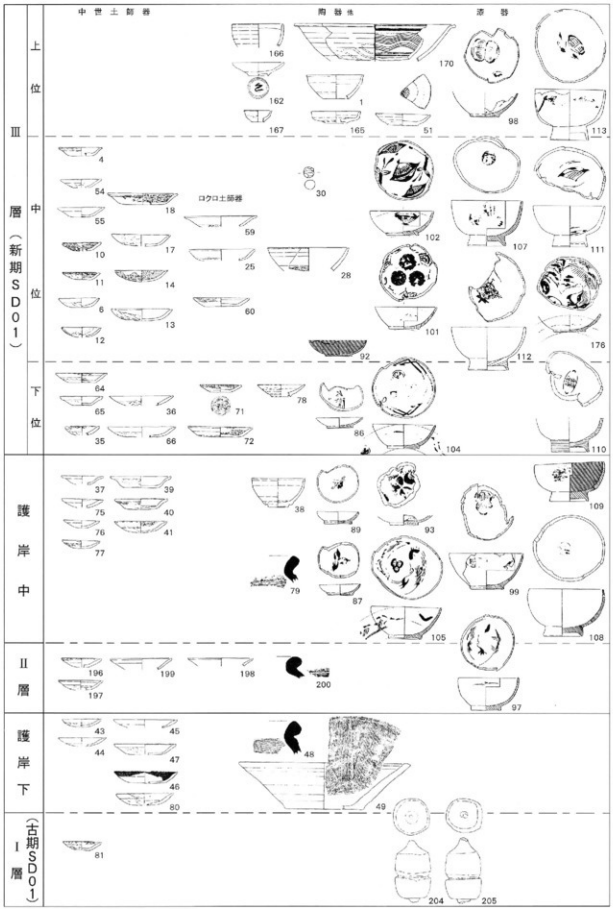
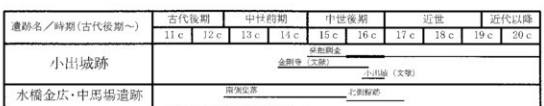


表9　小出城SD01出土遺物の様相　※層位ごとの出土遺物を示したもので編年とは異なる（安達・稲垣作成）
スケールは第18～27図の1/2



遺跡（遺構と遺物が伴う）が営まれていた期間を示す

第10表　白岩川中～下流域の主な遺跡別時期区分表

参考文献

浅野清編 1960『佐々成政関係資料集成』
石川県穴水町教育委員会 1987『西川島』能登における中世村落の発掘調査
伊藤雅文・滝川重徳 1995「金沢城石川橋・兼六園出土土師器皿の検討」『北陸近世遺跡研究会会報』No.2　北陸近世遺跡研究会
宇野隆夫 1986「越中弓庄城跡の上師器」『大境』第10号　富山考古学会
江戸遺跡研究会 2001『図説　江戸考古学研究事典』柏書房
小野正敏・水藤真編 1990『よみがえる中世6－実像の戦国城下町越前　一乗谷』平凡社
金子拓子・久々忠義 1995「小出城跡と金剛寺」『大境』第17号
上市町教育委員会 1985『富山県上市町弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要』
木倉敏信 1967「廃滅した瑞井山金剛寺」『富山史壇』36
久保尚文 1983「越中中世史の研究　室町・戦国時代」
射水市埋蔵文化財センター 2006『射水市中世城館遺跡総合調査報告書』
富山市 1987『富山市史』通史＜上巻＞
富山市教育委員会 2005『富山市水橋専光寺遺跡発掘調査報告書』
富山市教育委員会 2005『富山市弓庄城跡発掘調査概要』
富山市教育委員会 2006『水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
名久井文明 1991『樹皮の文化史』吉川弘文館
七尾市教育委員会 1992『七尾城下町遺跡七尾城シッケ地区遺跡発掘調査報告書』
北陸中世土器研究会編 1997『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』柴書房
北陸中世遺跡研究会 1995『中世北陸の容器』第8回北陸中世遺跡研究会
北陸中世遺跡研究会 1997『北陸の漆器考古学』－中世とその前後－第10回北陸中世遺跡研究会
北陸中世考古学研究会 2006『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』
福岡市教育委員会 2002『富山県福岡町木舟城跡発掘調査報告－範囲確認調査報告－』
舟橋村教育委員会 2000『富山県舟橋村浦田遺跡発掘調査報告書3』
舟橋村教育委員会 2001『富山県舟橋村仏生寺城跡発掘調査報告』
藤田邦雄 1996「北陸における肥前陶磁」『月刊　考古学ジャーナル』No.410　ニュー・サイエンス社
細辻真澄 2001「伍海宮田遺跡出土の土鐘について」『富山考古学研究』第4号　射水市教育委員会
麻柄一志 1982「水橋小出遺跡出土の帯製石斧」『富山市考古資料館報』No.7
水橋町役場 1966『水橋町郷土史』第二巻
森隆 2001「富山県出土の土鐘集成」『富山考古学研究』第4号　射水市教育委員会
森隆 2003「富山県の中世上器（資料編）」『富山考古学研究』第6号　射水市教育委員会
森隆 2005「富山県の中世土器（資料編2）」『富山考古学研究』第8号　射水市教育委員会
盛峰雄 2000「肥前の製品について　陶器の編年　1、碗・皿」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

SD01南半部完掘状況（西から）

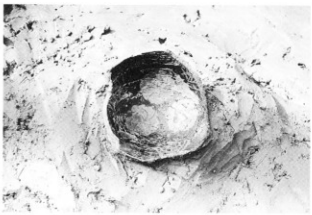
SE01曲物水溜（東から）

SD01土層断面（東から）

SD01北半部完掘状況（東から）

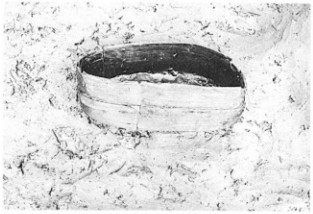
SD01西側肩部護岸（北西から）

SD01土層断面（東から）


SD01漆椀（牡丹文）出土状況

SD01　漆椀（鶴亀文）出土状況

SD01漆椀（扇文）出土状況


SD01曲物出土状況

SD01下層長刀柄出土状況

SD01下層子供用下駄出土状況

SD01機織機の部材出土状況

SD01紡錘車出土状況

平成16年度調査区全景（南東から）

東側調査区の南半部完掘状況（西から）

東側調査区の北半部完掘状況（東から）

SD01遺物出土状況（東から）

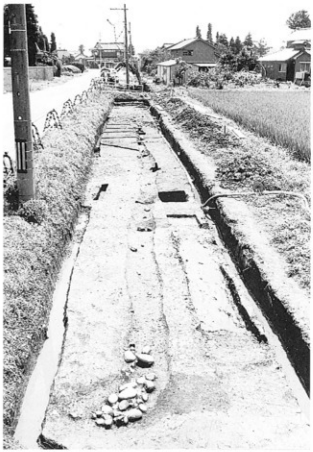
SX01・SD03（南から）

SD06櫛出土状況

西側調査区完掘状況（東から）

SD06遺物出土状況（南から）

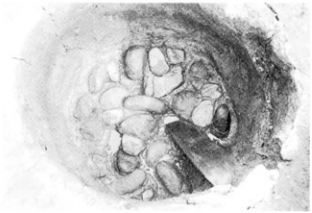
図版4【平成16年度調査区】



SD02（西から）

SK04（南から）

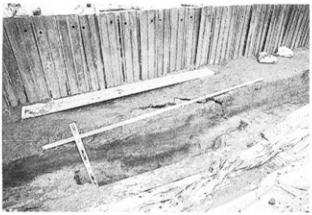
SE04（北から）



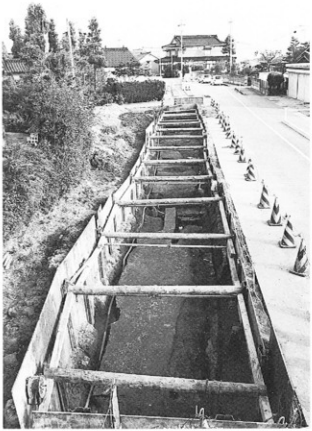
SE06（北から）

SE08（南から）

SE09（南から）



地震による地層のずれ・歪み（南から）


新期SD01完掘状況（北西から）

新期SD01西部完掘状況（西から）

新期SD01鋤先出土状況（西から）

新期SD01たも網出土状況（東から）

断割Ａ土層断面（南東から）

断割Ｂ土層断面（北西から）

古期SD01（断割Ａ）空風輪出土状況（南東から）

図版6【平成17年度調査区】

SD06完掘状況（南東から）

SD06 Cライン土層断面（南東から）

SD06 Dライン土層断面（南東から）

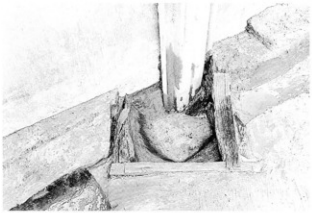
SD06護岸？部礫検出状況（北東から）

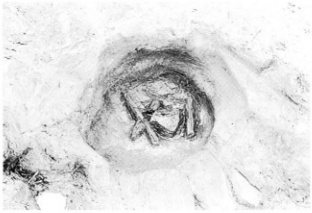
SD06護岸？部礫除去状況（南から）

SD06板碑出土状況（東から）

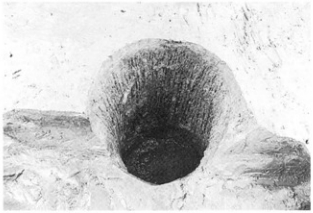
SD06杭列出土状況（東から）

SE10完掘状況（北西から）


SE11完掘状況（北東から）

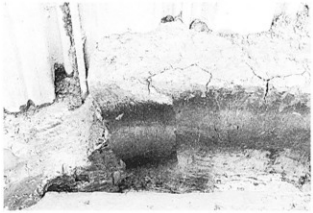

SE12遺物出土状況（北から）

SE13完掘状況（南西から）


SE14完掘状況（北東から）

SK07完掘状況（東から）

SK05完掘状況（南から）


小断層検出状況（南西から）